

井部北里村及び丹羽郡岩倉町に接す。濃尾平野の東側に位し、大部分が洪積層に属し、南部小牧山(八六米)は秩父古生層より成り、濃尾平野陥没當時の埋め残りなり。町の西北部は神積層より成る。俗に洪積層の地は巾上と云はれ、神積層地は巾下と稱す。南部には大山川流、町の西部には斜に合瀬川流れ灌漑に便す。清瀬街道(小牧街道)、小牧山の西南麓の小牧宿(今の元町)を経て北行し、大川に通じて木曾川を渡り、中山道に合す。其の外布衣街道・岩倉街道及び名古屋市下街道あり。古來交通上の要地と共に軍事上の要地をなせり。西岩倉町より名古屋鐵道の小牧驛通じ終點小牧驛(大正九年設置)あり。又大川・上飯田間の大曾根橋も此地を通過し、小牧口・新小牧・上新町・小牧原驛(共に昭和六年設置)を置く。此地は昔小牧原と稱せられ、原野なりしが徳川時代に開墾せられて畑となり、畑米・畑麥を産す。のち副産として文化・文政頃より棉花栽培行はれ、其他桑・大根・紫雲英を栽培し、更に林況の好景氣となるや芝草盛となれり。現今も水田大部分を占め、その中に桑畑點在す。原野開拓の爲に小牧原新田・間原新田・村中原新田・河内尾新田・入鹿出新田・三ツ瀧原新田等の新田墾墾多し。青物市は明治維新より行はれ、隣接各村より多くの蔬菜果物の出荷を見る。また寛文七年には馬市を復興せし旨、文書に見ゆるも其後

廢れ、次いで小牧市として毎月一・六日に食料品・衣類の露店市あり、宿街道の兩側に並ぶ相當賑盛を極めしが、明治初期に廢止せらる。現今は芝草・養蠶の中心市場にて製絲・製棉・醸造等盛なり。小牧の名の起原には二説あり、一は昔この地に伊勢川の河入當時、先史民族が獨木舟にて交通し、この小牧山を目標に帆を巻きしより帆巻山と呼ばれ、それが轉訛してこまきとなれり云ひ、一は中古馬市行はれ、爲にこの地を駒車と呼びしものが小牧と文字を變へしなりと説く。鎌倉時代には曳馬と呼ばれし如く、吉野朝廷時代には小牧街道及び群内小牧町の名見え、寛文六年記には、尾州小牧庄と見ゆ。明治二十二年には小牧原新田を合せ、明治三十九年七月外山村・小牧町・知多里村・堤村・眞利村を廢し、小牧町を置き、各所より石器類を出土し、次ので銅器及び小土器も發見す。徳川時代、天明二年より明治維新まで小牧代官所の置かれし地にて、現今も税務署・名古屋區裁判所小牧出張所・郵便局・勝川警察署小牧警備出張所・小牧中學校等を置き、地方的中心をなす。小牧城址は小牧山にあり。織田信長の修造にかかりしが、永祿末に信長の岐阜に城を移すに及び廢城となる。天正十二年豊臣秀吉が徳川家康・織田信雄と事を構へし謂ゆる小牧長久手の戦には、家康は逸早く此山を占領し秀吉を苦しめ事史上に名高し。

徳川義直の尾張侯となるや、其子光友は寛文二年その邸を収め假殿を修む之を小牧御殿と稱し、藩公參府交代の時や鷹狩の時の休息所となす。小牧御殿の北には蟹清水の磐址あり。之は織田四郎の居りし地、のち永祿頃は丹羽五郎左衛門居住し、小牧の役の時廢城を修理し、徳川軍の小牧山右翼の磐とせり。いまと漆川軍の小牧山を認めらる。又大字北外山の城島には北外山城ありて、今堀形土壘の一部を殘存す。小牧の役の折は徳川の右翼進營を置きし所。當時は城主居らず廢れたるを以て修理し陣營とせり。北外山の地陣には宇田津の磐跡あり。昔宇田津と云ふ鞍作りの名工住みしと傳ふ。天正小牧の役にはこの磐も徳川軍の右翼進營とせられたり。なほ南外山八幡神社内には南外山城ありて漆川・壘跡の一部を殘し、里傳に堀尾孫助の居城なりと云ふ。「外山神社」北外山に鎮座。郷社。祭神、天照大神。創建年代及び沿革は不詳。もと六所明神とも稱せり。延喜の制に式内社に列す。明治五年五月郷社に列せらる。例祭、八月十六日。「正眼寺」三瀧にあり。曹洞宗。青松山と號す。應永元年國主青生直政勅許を得て中島郡金剛山傳法寺の廢れたるを中興して正眼寺と號し通幻寂菴禪師を開山とす。のち織田・豊臣・徳川氏等寺領を附す。歴代皇宮諸武門の崇敬淺からず。維新前は當宗近國總鎮所たりき。

【小牧山】指定史蹟。古戰場。愛知縣東春日井郡小牧町の南部。西春日井郡との境に屹立する山。一に礮車山とも稱す。標高約八六米。形狀圓くして、東西稍々長し。全山蒼蒼として樹木叢生す。山は尾張平野の北方に獨立して、尾張平野を一日に瞰下すべき要害の地なるを以て、名古屋藩治の當時は、人の登るを禁じた。頗る展望に富み、戦國頃は北方に犬山城、東南に清洲城を控へて重要な地をなせり。織田信長の時代この地城塞をなす。のち廢城に歸せしが、山麓の小牧村・間々村・西島村・村中村等は其の當時の城下町として、工商の住宅地なりきと云ふ。天正十三年四月、豊臣秀吉、徳川家康の争ひし謂ゆる小牧長久手の役に當り、三河の諸將此地に據りて秀吉の軍を制し、大いに之を苦しむ。維新後一時之を公園となせしが、明治二十四年三月徳川侯爵家の所有に歸す。近年再び公園となし、山上に一館を設けて、創重館と云ふ。昭和二年十一月今上天皇の地に行幸せられてより、管理者徳川義親公、一般人士に之を開放せり。「小牧城址」小牧山頂にあり。四方三重濠、四方には總構の隙址あり。織田信長、其勢力の伸張に従ひ、弘治二年此處に築き清洲より移り居す。その後幾時もなく永祿七年美濃稻葉山(飯草)に城を移すに及び廢城となる。今山上に本丸址あり。附近に石礮・土濠を遺存す。天正十二年秀吉對

家康の小牧長久手の役には、一時家康の本營となり、大いに秀吉を苦しむ。「小牧長久手役」本能寺變後幾時もなく、豊臣秀吉は復讐明智光秀を討つて秀吉の警を報じ、一躍成名を馳せ、次で柴田勝家・織田信孝を平げ、佐々成政・澁川一益等を降し、前田利家と和し、信長時代の舊同僚中、秀吉に對抗する者なきに至れるが、なほ秀吉の如何ともなす能はざるものに、信孝の兄信雄と、信長の客將たる徳川家康あり。しかして秀吉としては、信雄を除くを得ば、信長の舊業はそのまゝ己の手中に歸するを得るが故に口實を設けてこれを除かんとせり。天正十二年三月、信雄の老臣尾張屋時城主四田長門守・同刈安賀城主淺井田宮丸・伊勢松ヶ島城主津川義冬の三人に唱ふるに利を以てし、信雄をして其秀吉に通ずるを疑はしめ、信雄これを信じ、その三月を以て三士を信雄の居城伊勢長島に誘致して殺す。ここに於て秀吉は口實を設けて兵を信雄に加ふるに至りしため、信雄は援を家康に請ふと共に、四國の長曾我部元親にも情を通じて援を請ふ。家康義によりて信雄を援け秀吉に當ることとなり、ここに兩雄の交戦となる。信雄・家康の聯合軍は或は越中の佐々成政をして加賀越前を衝かしめんとし、或は元親をして大阪を襲はしめんとし、更に紀伊の根來雜賀の徒黨をして兵を大阪に出さしめんとし、秀吉を包圍攻撃するの策を執れり。

これに對して秀吉も、或は越後の上杉景勝、加賀の前田利家等をして、一方佐々成政を攻撃せしめんとすと共に、景勝をして關東を侵し、以て家康の背後を衝かしめ、或は蜂須賀家康・墨田季高等をして鎌倉根來の徒に當らしむる等兩雄の外交戦はかなりに目覺しきものありたり。時に家康は領國甲信二國の守備を堅めて、この年三月八日居城濱松を發し、十日尾張高洲に至り信雄と會見し、戰略を議す。然るに秀吉の軍たる西軍にありては、美濃大垣城主池田信輝は、その女婿美濃金山城主義長可ともにも殊勳を奏せんとしつありしところへ、會し尾張大山城主中川定成が信雄の命によりて伊勢に出兵し、城中兵寡きを知り、十三日信輝は大垣を發して急行し、この日犬山城を襲うてこれを占領せり。これ實に西軍の大成功事たり。恰も此日は信雄・家康の會見の日にして、家康は西軍主力の向ふ所に伊勢に非ずして、美濃より尾張殊に犬山方面に向ひ来る事を覺り、敵に先んじて小牧山を占領して對抗することとなれり。これまた東軍の收めたる大成功にして、これによりて尾張平野を一時の裡に收め、西軍の行動を手取る如く觀取することを得たり。長可も信輝の偉功を奏せしか見るに羨望に堪へず、金山を出でて尾張丹波郡羽黒に出て、清洲に對して示威運動を試みしが、十七日家康の將酒井忠次・榊原康政等と戦ひて之に

破らる。ここに於いて東軍の士氣大いに揚がす。秀吉は四國の事情急に出發するを得ず、漸く二十一日を以て十萬餘の大軍を率ゐて大阪を發し、二十七日犬山城に入り、小牧山に對して樂田の營を築きて本營となし、四月五日ここに移り、兩雄の正面對抗となりしが、互に機を見て容易に動かさず、然るに池田信輝は家康が國を喪しうして大軍來れるを察し、孝ろ其處に乘じて一舉家康の本國三河を衝くに優れるなしとし、これを秀吉に謀る。秀吉固よりその妙算たるを知れるもその事たる頗る冒險なるに依り、初めは容易に聽かざりしも、信輝の懇請に負けつひに許す。而して輕舉妄動を戒む。信輝大いに喜び、四月六日夜半を以て子之助及び森長可・堀秀政及びに秀吉の甥三好秀次等と共に軍を發し、長久手に至りて先づ近傍愛知郡岩崎村の岩崎城を攻む。時に城將丹羽氏次は家康に従つて小牧に在り。弟氏重これを守りたりしが、謀して敵の三河を攻めんとするを知り、その進路を妨ぐるの策を取る。信輝も初めは區々たる小敵を意に介せざりしが、銃丸來りて馬を傷つくるに及び、秀吉の調戒を忘れ、城を攻めて之を陥れ、首級を檢して徒らに時を過す。家康報を得て大いに驚き、酒井忠次・本多忠勝等を小牧にとどめ、榊原康政・大須賀康高等を率ゐて發し、八日三好秀次の軍を破り、九日更に信輝・長可と戦ひこれを破れり、

長可・信輝等相尋いで戦死し、秀吉のこの一軍は大敗を極めしが、家康敢へてこれを追はす。信雄と共に小橋城に入りて秀吉に備ふ。秀吉はたして敗報を聞き急ぎ赴援し來れるが、家康既に小橋城に退きし故として如何もする能はず、その用兵の巧妙なるに驚き、空しく樂田に歸る。ここに於いて家康も軍を收めて小牧山に歸る。斯くてこの戦は家康の快勝に歸せり。これより兩軍對陣するのみにて、共に容易に動かさず。伊勢方面に於いては家康の軍に利ありしも、固より戦局を左右するほどのことなく、特に樂田・小牧兩方面にありては自重して動かさず、秀吉も一旦大阪に歸り、家康も同時に歸りしことなどあり。斯くて十一月に至り、秀吉は先づ信雄と軍調議和を結び、次いで家康と和し、十一月十六日家康は兵を收めて同時に歸り、二十一日濱松に歸る。此役に家康は物質的には何等得る所なかりしが、無形の聲望は秀吉に對して隠然一敵國たるの觀を呈せしむ。秀吉もその先鋒は敗戦に歸せしむ、全體としては得る所決して少なからず、役後の調和を機會として家康を配下に致すを得たるは、大なる收益と謂はむ。獨り信雄は何等得る所なく、全然兩雄の傀儡となり、聲望益々下るに至れり。

【コロマキ】古牧 長野縣上水内郡にありし村。大正十二年長野市に編入さる。【コロマキ】駒城村 山梨縣甲斐國北五

藤原の西南部。駒ヶ嶽の東斜面を占む。北に菅原村、東は武川村、南は富村外二ヶ村入會地と隣す。西境に赤石山脈の一峰たる駒ヶ嶽(二九六六米)あり。村は其東斜面を占め、村内に黒戸山(二二五四米)あり。東北境には中山(八八七米)ありて村内に傾斜す。山地一帯森林多し、南境より東部の山裾に向ひて釜無川の支流大武川流れ、山裾の部分には桑畑及び田地あり。農業主にて米・麥・蕎麦を産し、特産物には柿・木炭あり。山裾に沿ひて村道一條あるのみにて交通不便なり。此地は和名抄瓦麻郡置衣郷の地にて、大字柳澤は柳澤氏發祥の地なり。村内に大瀬理の瀧(高さ約三〇米、幅七米)及び柳澤壺殿守信勝より高俊までの居住せし柳澤氏の屋敷、熊鬼の喉と稱する名所あり。明治七年舊橋手・柳澤・大坊の舊三箇村を合併して一村となし、正副戸長を置き之を治む。同十五年今の武川村と聯合して戸長役場を實相寺に置き、聯合戸長これを治めしが同二十五年町村制施行に依り、別れて町村となり以て今日に至る。柳澤氏(清和源氏、新羅三郎義光の高。中興の祖を美濃守吉保(保明)といふ。後に保山と號す。徳川五代將軍綱吉に信任せられ、元禄元年一萬石を加へられ、漸次加増して寶永元年甲府十五萬石となり、享保九年その子吉里の時に大和の郡山に移封さる。明治維新の後、藩籍十五萬二千二百八十八石を奉還し、實祿五千九百四十九石

を受け、華族、伯爵となる。その支族に越後黒川・越後三日市の柳澤氏あり。
コマギノ 駒木野 浅川町(東京府) 波岡船井郡の東部。面積四二・六八方軒、人口二五二五人に過ぎざるも、種々の意味に於いて地理學上重要な研究資料を提供す。全村殆ど秩父古生層の山地にして、高度は北及び東方に高く五六百米の山岳地帯なり。南方は二三百米の丘陵性山地となり、其の中央に狭小なる盆地を見る。本村の中心胡麻原附近は、洪積層の極めて低平なる原野状の地形にて、未だ浸蝕進まず、恰も福知山附近の長田野、生田野に似る。其高度は二百米内外にて(胡麻原にて二〇三米、胡麻原にて六二九米)、恐らく山陰編各群中標最も高度ならん。この丘陵性の幼年地形は、隣町須知町まで連続し、同町西生野も同一地形のものなり。山陰線は殿田より保津川の支流に沿うて上る。胡麻原附近に至れば地形全く一變し、平坦地の田圃を走り胡麻原(明治四十二年設置)に着す。胡麻原を發すると、再び平坦なる原野の中を走る。これ胡麻原なり。未だ開拓進まず大部分は原野草原なり。暫時にて線路は下り勾配となる、と同時に由良川の一支流高尾川の溪谷に入り、谷は若返りしU字形に深く刻まれ、谷頭まで杉林となり胡麻原と地形再び一變す。この低平なる

胡麻原こそ山良川と、保津川との分水嶺に當り、或は日本海斜面と太平洋斜面との分水嶺とも言はん。この地は單に地形的に兩斜面の分水嶺をなすのみならず、此所を境界として降水量・気温等の自然的現象は勿論、言語風俗等文化の境界線に當る事は興味深く且つ注目すべき地理的事項なり。尙興味ある事は、地理學上の穀頭河(Kanai River)の現象を此地に於て見る事なり。即ち此處は高尾川の上流、如川の谷より流下せし洪積期の土砂なり。元來如川は胡麻原を経て保野田に向け南流す。夫が高尾川が谷頭浸蝕を始めると胡麻原の臺地に喰込み、遂に如川の流れを奪取せり。茲に於て保野田の谷谷は一の穀頭河となる。かく穀頭河の現象を見るほど地形が低平なる臺地にて、隣附近には水田あるも、他は洪積層共通の水利不便にて水田なく、所々に畑地が見られ、新中野新田等の田圃兼落が散在するのみ。然しかる不毛に近き原野なるが、其開拓極めて古く、既に延喜式に丹波國胡麻原とあり、近郷牧の所在地として知らる。胡麻原の地は駒より轉訛せしものにて胡麻の字牧といふ所に山陰線胡麻原を建設す。その地の歴史を多く物語る。隣の志和賀には式内志波力神社あり。志和賀村は元駒立村なりしが、胡麻原村に合併せる。かく古くより牧畜業行はれしが、應仁大亂以來荒廢の地となり、不毛地として顧られず。然るに中

世江州の木戸、紀州の湯淺より移民來り此地を開拓せり。今も木戸氏・湯淺氏は此地の名門なり。然し此等の來住者は水田と山林との生活にて牧畜を考へず、鐵道開通後、兵庫縣より移民來たり、不毛の荒地の一町歩程借地して樹苗栽培・花卉栽培を行ひ、各々年々千圓以上の利潤を擧ぐ。其後福州の某の地に牧牛場を計畫せしが、未だ實を擧げざるに至らず。近時遊園地的施設を施せるも、都市より遠距離の爲に其の利用十分ならず。同村耕地面積約四千町歩、郡内有数の耕地面積にて、米約五千石を産す。農の牛面には林業を營み、薪炭・木材を産出す。又附近洪積層中の粘土を焼き瓦を造るものあり。
コマコシ 駒越村 青森縣陸奥國中津郡の東部。岩木川の北邊に據り、弘前市の西方の農村にて、南は相馬村に接し、西は東日屋村に、北は岩木村及び大浦村に接す。西部は一般に高く、東南部の岩木川に沿へる地及び北部一帶は平坦にて、田畑よく拓げ、殊に東南部は地味肥沃にして耕作に適す。岩木川は本村の東南部を貫流し、灌漑の便に富み物産は米を最とし、之に次ぐもの苹果・糖菜・蔬菜等なり。又本村大字堂平の堂平石村は敷石若くは記念碑材料に適し、近來その需要頗る多く、本村特有の物産と言ふべし。輝石安山岩にして、黒色、板狀部理良く發達し、岩石中には輝石及び斜長石の斑晶を含み、長石は概れ分解す。廢

落置後には第三次大區第四小區に屬し、明治十一年津輕郡役所々轄となり。後戸長役場の制度施行せらるるや駒越村外六ヶ村戸長役場設置せられ其區域を駒越・眞土・龍ノ口・島井野・如來湖・一丁田・堂平の七ヶ村とし、明治二十二年町村制實施の際村名を駒越村とし、その行政區劃は以前と同様なり。

て、當座の事をしのぎける。
コマサワ 駒澤 且と東京府在野原の町名なりしが、東京市城大擴張により世田谷區に入る。其地は凡そ今の世田谷區下馬町・野澤町・三軒茶屋町・上馬町・深澤町・新町・弦巻町等に當る。武蔵野臺地の原形を多く保ち、郊村式の野菜栽培盛に行はる。厚木街道内を斜に貫き、玉川電車設けられ、街村的業務發達し居りしが震災後住宅地として急激に發達す。町内に駒澤大學及び有名なる駒澤ゴルフ場あり。東北部に野砲兵聯隊野戰重砲隊等の兵營及び練兵場あり。野戰重砲隊等の兵營及び練兵場あり。野戰重砲隊等の兵營及び練兵場あり。

多少の形式を存せるも、米坂線の工事により大部分崩壊する。置賜公園は伊達老臣原田甲斐の首塚と傳へらる。(諏訪神社) 上小松に鎮座。郷社。祭神、南方富命。創建年代不詳。往古より小松の産土神として崇敬さる。三代實録の清和紀貞觀十二年條に、出羽國白野縣、須波神社に從五位を授けらると見ゆ。白野はいま最上の粟山の神にして(八幡神社)、山下に白岩林あり。須波とは即ち當社のことなるべし。のち伊達政宗に深く崇敬して社殿を造營し且つ社額若干を寄進す。其後蒲生氏の社領沒收ありたれど、慶長六年上杉登勝の領土となるや社領五十石を寄す。例祭、九月七日。(大光院) 新義眞言宗豐山派。松光山と號し、一に長岡寺とも稱す。貞觀年間經濟正の開山に係り、附近の牛居坂は曾正の騎りし牛、此處に到りて盤ひしより此名あり。又影向松あり。曾正の瑞見を見し所なりと傳ふ。堂宇に本堂・庫裏・十玉堂・惣門等ありて、古は置賜の郷に屬せしにより置賜郡頭の四字額を掲ぐ。
【小松村】 茨城縣常陸國東茨城郡の北部。水戸市の西北方。北は石塚町、西は西郷村、南は山根村、東は飯宮村と隣す。八溝山脈の一支脈の東端を占め、村内大部分は約一〇〇米の山地なり。中央には那珂川の支流東流し、それに沿ひて細き低地ありて田地をなす。農業主にて米・麥・蕎麦を産す。北隣石塚町に茨城鐵道

【小松町】 山形縣羽前國東置賜郡の西部。米澤盆地の西南の大局にして、米澤市・高島町・赤湯町・宮内町に大體三里、西置賜郡長井町に二里半の距離にあり。南西部は低き丘陵にしてスキーの好スロープあり、反對側は廣き平野にして米の産出少なからず。市街は大川に沿ひ街村を形成せるも、玉庭盆地に直角狀の枝を出す。元來は上・中小松のほか下小松をも含めるものなるも、後者は別れて大川村となる。米及び蕎麦の集散地にして商業盛んに行はる。三日町・東五日町・八日町・十日町の地名を存するも、維新前後の市日は五と十日の日のみなり。大正十五年米坂線の羽前小松驛開設せられ、玉庭方面の出入として重要視せらるるに至り、馬車の普及以前は越後街道の牛の子米澤間の要驛として工業商業共に頗る盛なりといふ。産物として他に移出するものは酒なり。生産額は年六千石、七十五萬圓を越え花梨・白梅・富久小松等の諸酒は縣内は勿論、福島・宮城・青森・岩手・東京等に仕向けらる。一千戸中一四二戸が工業、二〇九戸が商業、三〇戸が交通業、一〇〇戸が公務・自由業なり、小松城には元龜年間まで伊達老臣牧野彈正・中野常陸介宗時等に據り主に叛し、のち桑折氏が居住せるも天正五年より廢城となる。城跡佛成寺に桑折景水の墓石あり、城址は中小松城の内と呼ばれ、最近まで

落置後には第三次大區第四小區に屬し、明治十一年津輕郡役所々轄となり。後戸長役場の制度施行せらるるや駒越村外六ヶ村戸長役場設置せられ其區域を駒越・眞土・龍ノ口・島井野・如來湖・一丁田・堂平の七ヶ村とし、明治二十二年町村制實施の際村名を駒越村とし、その行政區劃は以前と同様なり。

て、當座の事をしのぎける。
コマサワ 駒澤 且と東京府在野原の町名なりしが、東京市城大擴張により世田谷區に入る。其地は凡そ今の世田谷區下馬町・野澤町・三軒茶屋町・上馬町・深澤町・新町・弦巻町等に當る。武蔵野臺地の原形を多く保ち、郊村式の野菜栽培盛に行はる。厚木街道内を斜に貫き、玉川電車設けられ、街村的業務發達し居りしが震災後住宅地として急激に發達す。町内に駒澤大學及び有名なる駒澤ゴルフ場あり。東北部に野砲兵聯隊野戰重砲隊等の兵營及び練兵場あり。野戰重砲隊等の兵營及び練兵場あり。

多少の形式を存せるも、米坂線の工事により大部分崩壊する。置賜公園は伊達老臣原田甲斐の首塚と傳へらる。(諏訪神社) 上小松に鎮座。郷社。祭神、南方富命。創建年代不詳。往古より小松の産土神として崇敬さる。三代實録の清和紀貞觀十二年條に、出羽國白野縣、須波神社に從五位を授けらると見ゆ。白野はいま最上の粟山の神にして(八幡神社)、山下に白岩林あり。須波とは即ち當社のことなるべし。のち伊達政宗に深く崇敬して社殿を造營し且つ社額若干を寄進す。其後蒲生氏の社領沒收ありたれど、慶長六年上杉登勝の領土となるや社領五十石を寄す。例祭、九月七日。(大光院) 新義眞言宗豐山派。松光山と號し、一に長岡寺とも稱す。貞觀年間經濟正の開山に係り、附近の牛居坂は曾正の騎りし牛、此處に到りて盤ひしより此名あり。又影向松あり。曾正の瑞見を見し所なりと傳ふ。堂宇に本堂・庫裏・十玉堂・惣門等ありて、古は置賜の郷に屬せしにより置賜郡頭の四字額を掲ぐ。
【小松村】 茨城縣常陸國東茨城郡の北部。水戸市の西北方。北は石塚町、西は西郷村、南は山根村、東は飯宮村と隣す。八溝山脈の一支脈の東端を占め、村内大部分は約一〇〇米の山地なり。中央には那珂川の支流東流し、それに沿ひて細き低地ありて田地をなす。農業主にて米・麥・蕎麦を産す。北隣石塚町に茨城鐵道

【小松町】 山形縣羽前國東置賜郡の西部。米澤盆地の西南の大局にして、米澤市・高島町・赤湯町・宮内町に大體三里、西置賜郡長井町に二里半の距離にあり。南西部は低き丘陵にしてスキーの好スロープあり、反對側は廣き平野にして米の産出少なからず。市街は大川に沿ひ街村を形成せるも、玉庭盆地に直角狀の枝を出す。元來は上・中小松のほか下小松をも含めるものなるも、後者は別れて大川村となる。米及び蕎麦の集散地にして商業盛んに行はる。三日町・東五日町・八日町・十日町の地名を存するも、維新前後の市日は五と十日の日のみなり。大正十五年米坂線の羽前小松驛開設せられ、玉庭方面の出入として重要視せらるるに至り、馬車の普及以前は越後街道の牛の子米澤間の要驛として工業商業共に頗る盛なりといふ。産物として他に移出するものは酒なり。生産額は年六千石、七十五萬圓を越え花梨・白梅・富久小松等の諸酒は縣内は勿論、福島・宮城・青森・岩手・東京等に仕向けらる。一千戸中一四二戸が工業、二〇九戸が商業、三〇戸が交通業、一〇〇戸が公務・自由業なり、小松城には元龜年間まで伊達老臣牧野彈正・中野常陸介宗時等に據り主に叛し、のち桑折氏が居住せるも天正五年より廢城となる。城跡佛成寺に桑折景水の墓石あり、城址は中小松城の内と呼ばれ、最近まで

落置後には第三次大區第四小區に屬し、明治十一年津輕郡役所々轄となり。後戸長役場の制度施行せらるるや駒越村外六ヶ村戸長役場設置せられ其區域を駒越・眞土・龍ノ口・島井野・如來湖・一丁田・堂平の七ヶ村とし、明治二十二年町村制實施の際村名を駒越村とし、その行政區劃は以前と同様なり。

て、當座の事をしのぎける。
コマサワ 駒澤 且と東京府在野原の町名なりしが、東京市城大擴張により世田谷區に入る。其地は凡そ今の世田谷區下馬町・野澤町・三軒茶屋町・上馬町・深澤町・新町・弦巻町等に當る。武蔵野臺地の原形を多く保ち、郊村式の野菜栽培盛に行はる。厚木街道内を斜に貫き、玉川電車設けられ、街村的業務發達し居りしが震災後住宅地として急激に發達す。町内に駒澤大學及び有名なる駒澤ゴルフ場あり。東北部に野砲兵聯隊野戰重砲隊等の兵營及び練兵場あり。野戰重砲隊等の兵營及び練兵場あり。

多少の形式を存せるも、米坂線の工事により大部分崩壊する。置賜公園は伊達老臣原田甲斐の首塚と傳へらる。(諏訪神社) 上小松に鎮座。郷社。祭神、南方富命。創建年代不詳。往古より小松の産土神として崇敬さる。三代實録の清和紀貞觀十二年條に、出羽國白野縣、須波神社に從五位を授けらると見ゆ。白野はいま最上の粟山の神にして(八幡神社)、山下に白岩林あり。須波とは即ち當社のことなるべし。のち伊達政宗に深く崇敬して社殿を造營し且つ社額若干を寄進す。其後蒲生氏の社領沒收ありたれど、慶長六年上杉登勝の領土となるや社領五十石を寄す。例祭、九月七日。(大光院) 新義眞言宗豐山派。松光山と號し、一に長岡寺とも稱す。貞觀年間經濟正の開山に係り、附近の牛居坂は曾正の騎りし牛、此處に到りて盤ひしより此名あり。又影向松あり。曾正の瑞見を見し所なりと傳ふ。堂宇に本堂・庫裏・十玉堂・惣門等ありて、古は置賜の郷に屬せしにより置賜郡頭の四字額を掲ぐ。
【小松村】 茨城縣常陸國東茨城郡の北部。水戸市の西北方。北は石塚町、西は西郷村、南は山根村、東は飯宮村と隣す。八溝山脈の一支脈の東端を占め、村内大部分は約一〇〇米の山地なり。中央には那珂川の支流東流し、それに沿ひて細き低地ありて田地をなす。農業主にて米・麥・蕎麦を産す。北隣石塚町に茨城鐵道

【小松町】 山形縣羽前國東置賜郡の西部。米澤盆地の西南の大局にして、米澤市・高島町・赤湯町・宮内町に大體三里、西置賜郡長井町に二里半の距離にあり。南西部は低き丘陵にしてスキーの好スロープあり、反對側は廣き平野にして米の産出少なからず。市街は大川に沿ひ街村を形成せるも、玉庭盆地に直角狀の枝を出す。元來は上・中小松のほか下小松をも含めるものなるも、後者は別れて大川村となる。米及び蕎麦の集散地にして商業盛んに行はる。三日町・東五日町・八日町・十日町の地名を存するも、維新前後の市日は五と十日の日のみなり。大正十五年米坂線の羽前小松驛開設せられ、玉庭方面の出入として重要視せらるるに至り、馬車の普及以前は越後街道の牛の子米澤間の要驛として工業商業共に頗る盛なりといふ。産物として他に移出するものは酒なり。生産額は年六千石、七十五萬圓を越え花梨・白梅・富久小松等の諸酒は縣内は勿論、福島・宮城・青森・岩手・東京等に仕向けらる。一千戸中一四二戸が工業、二〇九戸が商業、三〇戸が交通業、一〇〇戸が公務・自由業なり、小松城には元龜年間まで伊達老臣牧野彈正・中野常陸介宗時等に據り主に叛し、のち桑折氏が居住せるも天正五年より廢城となる。城跡佛成寺に桑折景水の墓石あり、城址は中小松城の内と呼ばれ、最近まで

線石塚驛あり、當村より縣道を通ず。此地は和名抄那珂郡入野郷の地とす。大字増水戸より野州茂木に至る驛路に當る。佐竹家士知行目録、康安二年の歌に那珂西増井村の村の名見ゆ。蓋し此地とす。村内に平重盛の遺骨を分ち納むといふ小松寺あり。村名之に因る。大字上入野村は和名抄那珂郡入野郷の遺稱。延元三年この地の人、入野助房風連城を守り王事に盡す。また小松寺には平重盛の家臣の建てたる重盛の分骨塔と稱するものあり。

【小松寺】 大字上入野にあり。新義貞言宗智山派。白雲山普明院と號す。平氏の滅亡後、族平貞能、小松内府重盛の遺骨及び其念持佛如意輪觀音を奉じ、重盛の家相應尼を伴ひて當國に至り、觀音を安置し相應院と名づく。これ本寺の草創なり。貞能剃髮して小松房と云ひ重盛の菩提を弔ひて此地に寂す。骨塚中興す。もと本寺十二ありしも、のち離廢せり。本尊如意輪觀音像一函(國寶)木造浮彫、堅二寸八分、幅二寸五分、厚五分の小像にて、應原時代に盛行せる箱佛等の念持佛の類と見られ、精巧の作、而も關東の地には頗る珍らしき遺品、寺傳に平重盛の念持佛と云ふ。背面に水戸光國の銘あるは特筆に足る。

【小松】 武藏國南葛飾郡の地名。現今東京市葛飾區馬戸町に在り、上小松・下小松に分る。南は江戸川區東西小松川と接す。里見八犬傳・九ノ三五「其本名は葛河

也、是よりして西東は、小松中川女木造井・猿江村五木松、南本所、北本所、兩國河より西を武藏とす、こゝは葛飾郡にて、この邊處々に小流あり」

【小松町】 石川縣加賀國能美郡の西部。省線北陸本線に沿ふ。北は牧村、東は白江村、南は苗代村、西は牧村に界す。加賀平野の西南部にあり。南部石川の中心地をなす。古くより北陸街道の一驛として發達したる町にて、いまは省線北陸本線の小松驛(明治三十年設置)を置き、社線小松電氣鐵道及び尾小屋鐵道の起點をなす。いま區裁判所・警察署・中學校・商業學校・女學校・資料高等女學校等あり。金澤市に次ぐ石川縣第二の都會にて、輸出向絹織物の大産地、陶器・漆産の産も多し商業盛なり。此地或は和名抄那珂郡葛飾郷の内に屬せしものならん。寛和年間花山法皇此地に潜行し給ひし折、供奉の近臣梯川の邊に館を築へ後國に多くの糧松を植ふしが、年經るに及び繁茂し人々國の小松原と名付け松原に民家を造りて居住す。町名小松はこれより起るといふ。

古來、北國街道の一驛として榮ゆ。奥の細道・小松原と云ふ所にて、しほらしき名や小松吹萩す。此所太田の神社に諸尊盛が甲錦の切あり往昔源氏に屬せし時義朝公より給はらせ給とかやけにも平士草ののほりもの金をちりばめ龍頭に彫形打たり眞盛討死の後木曾義仲願狀にそへて此

社にこめられ侍よし種目の次郎が使せし事共まのあたり縁記にみえたり。むざんやな甲の下のきりくす(「明治天皇小松行在所」指定史蹟。明治天皇明治十一年北陸東海御巡幸の際、十月五日行在所となる。「小松城」城地の起原明ならざるも、永祿七年越前の朝倉氏兵を出し本折小松城を陥れしこと見えるにより、凡そ永祿の初頃よりありしものならん。世俗の口傳に、古の小松の地今の本折なりといふも、本折は小松に接し其南偏の地なるゆゑ多少の變遷ありとしても、同一地方と見るべきか。天正八年松田信長の北國經營につれて、當城に村上義明を封じ、本能寺變後、同一年前田利家暫く此地に居りしが、この年豊臣秀吉、丹波長秀に若狭・越前二國及び加賀の江沼能美二郡を賜ふ。依りて義明自ら長秀の麾下に屬す。同十三年長秀卒し、この地堀秀政の領となるや、義明またその勢力となり、慶長二年秀政の子秀治越後に移るや、長秀の子長重小松城に入りて之を治す。同五年關ヶ原役に當り、長重西軍に屬するや、前田利長これを圍み、投定まりて長重國除せられ、小松城は前田氏領となる。その後前田利光の時、小松城は藩主退隱老の地となり、亭を營み、花園を開きしが、萬治元年利光薨去の後、重臣を置きて之を守らしめ、以て明治維新に至る。「多太神社」上本折町に舊座、縣社。祭神、御神等手留比古命・仁德

天皇・應神天皇・神功皇后・比咩大神・經兒命(武烈天皇五年六月十八日、男大連王子の越前國栗田郡庄加茂村に御忍びましましし時、當郡舟津松ヶ中原に勸請せられたるに創むと云ふ)。寛和二年、花山帝御幸の御にこの地を名所なりとて今江の山へ登らせ給ひ、同年九月舟津松ヶ中原八幡宮と小松多太神社に詣り給ひて神職に宰官司職を賜ひ、舟津松ヶ中原御殿を造り住し給ふ。之を花山帝新法皇御所と號す。寛弘五年法皇の御遺勅に依りて舟津松ヶ中原の八幡宮を小松多太神社に遷す。壽永二年木曾義仲は當社に參詣し、平家を追討し四海靜平に歸し、源氏を再び興さん事を立願す。同年五月壽永實盛の舊原に敗死し、義仲曾て養育せられし恩を想ひ且は實盛の義勇の深誠せんことを慮れ、當社にその兜・鎧の大袖・鬘・錦の直垂に自身の表指の矢を添へ、社領としては鎌屋の莊十三町を寄進す。右社領は永祿年中の加州一揆暴亂に掠奪せられしと云ふ。慶長五年城主井掛加守長信の崇敬あり、元和元年徳川家康公代徳見の節、上使廻國して參拜奉幣あり。また藩主前田利常は藩費を以て社殿を修め、當郡の總社と定め、且つ自筆の縁起を納む。社費中、實盛の遺物たる兜頭・袖・鬘當各一雙は國寶に列せられ、殊に兜には芭蕉の當社に詣りて折「あなむざん甲の下のきりきりす」の名吟あり。例祭、七月十八日。「蓮橋神社」濱田町に鎮

座。縣社。祭神、惠壽大神。八坂刀賣命・健甕名方命(相殿)。創建年代詳かならざるも延喜式内社にして、當郡舊得權郷三十箇村の總社なり。初め同郷小野村に鎮座ありしを慶安(或は治曆)年間に現在地に遷座す。舊小松城は當社の氏子地内にありしを以て舊藩主前田利常は小松左城の時、同座諏訪神社(今は相殿小松諏訪神社)と共に之を氏神と崇め、且つ小松・金澤兩城の鎮守と定められ、更に本殿を營築し社地並に神具を寄附せらる。維新の際に重稱神社の社號を取消され、相殿の諏訪神社を以て氏神と齎すべき旨達せられしも、明治十五年八月、舊稱なる現社號に復稱。例祭、八月二十七日。「本蓮寺」細工町にあり。眞宗大谷派。轉如の二子願圓覺の開基。萬治元年、藩主前田利常現在の寺地を寄せて郡門一宗の禰頭役を命じたり。明治十一年天皇御巡幸の御當寺を行在所に定めらる。「建聖寺」曹洞宗。永祿年中大乘寺十三世雪惠禪師の開創。城主村上義明、その母花岳常榮大禪定尼の菩提所となし寺地を寄す。寛永年間前田利常小松城に隱退するや今の地に移らしむ。寺内に大權現像・地藏等を安置す。前者は火防守護神として衆庶の師依厚く後者は機織工女の信仰厚し。

【小松】 遠江國(靜岡縣)の古地名。和名抄、佐野郡に小松郷あり、その地今の小笠郡曾我村の邊に當るか。

【小松村】 滋賀縣近江國滋賀郡の北端。

南は木戸村、西は葛川村、北は高島郡の高島村・大溝町に接し、東は琵琶湖に臨む。北西の大部は比良山脈に屬する山地にて村の西端に最高峰武奈嶽(一一四米)あり、花園岩より成り、山頂附近は準平原的高峯をなす。村の中央部以東は斷層的ななし、著しく開折せらる。之に接して約四〇〇米以下の洪積層の丘陵地あり。多くの小河流による扇狀地の堆積物に被覆せられ、扇狀地の末端より湖岸の沖積平野に連なる。湖畔には砂丘連なり近江舞子の稱ある堆積物の附近に最も著しく此處には砂嘴の内面に湖淵を形成す。北に眺めば山地が湖岸に迫り村の北界に明神時あり此處に縣社白鬘神社湖に面して建てられ猿田彦命を祀る。一に比良宮とも稱せられ長壽の神として聞ゆ。本村は農林業を主とし漁業と石材採掘とを副とし石燈籠・手洗鉢その他庭園用石細工の特産あり。湖岸に沿ひて西近江路あり之と平行して江若鐵道通過し比良(大正十五年設置)・近江舞子(昭和十五年設置)・北小松(昭和二年設置)・白鬘(昭和二年設置)の四驛を設く。古く比良水門、秋水門と云ふは小松村比良の琵琶湖畔の地時附近を稱せしものなるべし。萬葉・三「吾が船は比良の海に傍ぎ泊む沖へな放りさよふけにけり」(白鬘神社)「比良神社」大字鶴川に鎮座。縣社。祭神、猿田彦命。垂仁天皇二十五年の創祀に係ると傳ふ。祭神は天孫降臨を奉迎せしもの

且伊勢國に止まり給ひしが、その後諸國を巡りて此地に來り、秀麗なる湖水の風光を賞して此地に居ませしを祀れるなりと云ふ。社號は聖武天皇の御宇にこの神老若に現じ良神曾正に逢ひ給ひしに因ると傳説す。白風年間に社殿修造のことあり。貞觀七年正月從四位下を授く。元慶四年には舍利一粒を納めらる。戰國時代に六角氏の南部近江を領有するや崇敬厚く、天文九年六角義賢は津田權内高光を奉行として社殿を造營せしめ、次で慶長八年豊臣秀頼これを再修し、片桐且元の近江國人なる故を以てこれが奉行ならしむ。徳川氏また社領一萬石を寄せ崇敬淺からず。例祭、五月十一日。「堆積湖湖岸」指定名勝。琵琶湖の西岸に於ける松青沙白の半月形沖嘴にして俗に近江舞子と呼ぶ。前方に廣闊なる湖面を隔て沖島長命寺山を望み水清くして清明に湖岸の勝景地として優秀なるものなり。「揚梅瀑布」字水谷にあり。雌雄二瀑に分かれ、雄瀑は高さ四米半、幅五米半、雌瀑はその下方にありて高さ一〇米、幅三米半なり。揚梅の名は天文の頃足利義輝が興へしものといふ。汽車内よりも望見せらるを得。

【小松山】 近江國(滋賀縣)の歌枕。今の滋賀郡小松村と木戸村に跨がる比良山を稱せしなるべし。花・松・谷・崎・濱・原・里等の名所たり。信明家集「いかに

して君が衣にたちつらむこまつ山のすみそめをら」

【小松崎】 近江國(滋賀縣)の歌枕。滋賀郡小松村の地にあり。小松里・小松原といふも此地なり。瀬川後百首「ささなみや小松にたちて見渡せば三尾のみさきに田鶴むれてゆく 仲實」大曾會德紀方の歌「引つれてけふの子の日の小松原千歳のかげにあそぶもろ人 光榮」

【小松ヶ原】 歌枕。近江國にありといふ。或は滋賀縣滋賀郡小松村の地を指せるものか。夫木・原「みどりなるおなじ二葉をひきそへて小松がばらに若菜をそ摘む 大藏卿隆教」

【小松】 京都市右京區御室の西南の邊の地名。光孝天皇後田邑陵の邊。歌枕。家集「暮れて行く秋と悲しき嵐ふく小松か峰に鹿の鳴くなる 中納言定頼」

【小松町】 山口縣周防國大島郡尾代島の西部を占め、北・東・南の三面は瀨野・屋代・沖浦の諸村に包まれ、西の一面、大島瀬戸を隔てて玖珂・熊毛の兩郡に對す。之も小松・小松開作・志佐・笠佐島の上記四大字の内、笠佐島は海上孤立の一島を形成す。町名の小松は、或は曰く高麗津の轉訛なるべく、蓋し往昔、高麗との交通往來によりて生ぜし名稱ならんと(防長地名遺蹟)。當町の歴史は遠く神代に遡り得べしといはれるも、詳細は明らかならず。毛利藩所領時代には、部分によ

りそれぞれ藩邸敷家の采地となり、村名も時として屋代小松村と呼ばれし時代あり。明治維新以後に至りては、各村の聯合一ならざりしが、明治十七年に至り、聯合して小松開作ほか二ヶ村一ヶ島戸長役場の下に統一せられ、明治二十二年四月町村制實施の際には、これを小松志佐村と名づけ、大正五年六月に至り、昇格して更に小松町と改稱せり。産業は農業のほか、醸造業・機械業及び製鹽業行はれ、即ち綿織物・醤油・清酒を生産す。町役場の所在地たる小松市街は、海岸の小港にして、大島驛との間、船舶の往來繁く、棧橋の設けもあり。教育機關には縣立大島南船學校ありて、從來多數有爲の船員を輩出せるを以て世に知らる。〔小松港〕山口縣周防國大島郡小松町に屬する海港。西北、大島瀬戸を隔てて柳井嶺の大島驛と對し、相互の間に聯絡發動機關あり旅客を運搬す。當港の棧橋より上陸せば直に大島南船學校門外の運動場に達すべし。市街は人口僅に二三千の小都邑なれど、街上は清潔、商業も活潑なり。〔大島鳴門〕一に小松瀬戸・大島瀬戸ともいふ。最狭の部分に牛車未滿に過ぎず。潮勢、岩礁に激して奔流盤渦し、奇觀實に阿波の鳴門に亞ぐといはる。海岸に沿へる縣道の傍らに大島郡最古の神社、大島麻根神社あり。大島麻根を祀る。尙ほ此の鳴門は、神武天皇御東征の際御通過あらせられしところと傳へら

る。〔笠佐島〕海上に一渚餘、大島海峡の中央に當れる周圍三十町餘の島にて、當町の一大字を形成す。風光の美稱れに見る所、且つ納涼の好適地として、將來一大公園たるべき計畫あり。〔龍心寺〕所在地は屋代村に屬するも、當町を距る僅に十區に過ぎず。所謂海城大將村上家の菩提所にて、村上家の遺物、累世の位牌・石碑等を存す。好古家必遊の古刹なり。〔地蔵山古墳〕前記龍心寺の北五町餘、北迫にあり。推古朝の横穴式古墳なり。〔小松八景〕當町には所謂八景なるものあり。鳴門歸帆・漁村夕照・飯山暮雪・明神夜雨・島山秋月・雲蓋寺曉鐘・澄晴嵐・笠佐落雁。〔志駄岸八幡宮〕寶龜三年六月宇佐八幡宮の分靈を屋代村に勧請せしが、弘安三年八月の洪水にて社殿、小松に漂流せし爲め、遂に現地に奉遷し、志駄八幡宮と稱す。先年社山の北側より古代土器を發掘せしことあり。〔小松〕讚岐國(香川縣)の古地名。和名抄那那に子松あり、古高松と訓す。その地今の仲多度郡琴平町・榎井村の邊に當るべし。建長二年關白道長に讚岐國子松莊、宜秋門院領あり。後宇多院御領目録にも讚岐國小松莊月輪殿御領とあり。圓光大師行狀聖賢にも讚岐國子松莊と見ゆ。〔小松町〕愛媛縣伊豫國周桑郡の東部。高瀬牛島頭部の東側にあり、中山川の沖積平野と斷續しつづ西走する讚岐山脈の

北斜面の一部を含む。北は吉井村に、西は丹原町に、西南は石根村に、南は千足山村に界し、東南は新居郡の大保木村に、東は水見町と隣す。町の北半は低平な中山川の沖積地にて田畑拓け灌漑の便よろしきため農産多く、殊に米・蕎麥・蔬菜等を多量に産す。南半は山地にて東南隅の綱付山(五二〇米)を中心として東・南・西の垣を約四〇〇米餘の山嶺連なりて圍み何れも急傾斜をなす。麓は桑畑も多少あり養蠶業を營む。交通は省線讚本線が東部にて伊豫小松驛(大正十二年設置)を通過し平地を西走し稍も西部より急に北上して吉井村に行く。また是に平行して四國街道は山麓を西走し石根村より西の方向を過る。その外市街より北方に行く縣道及びこれを横切り中山川に沿うて東西に通ずる縣道等あり、交通便なり。市街は寛永十一年小松城主一柳氏の陣屋のありし所を中心として街道の兩側に發達す。産物は前記物産のほか清酒・瓦の製造・綿織物等の工業も少からず、北四國の主要なる一都會なり。此地は舊一柳氏の所領にて陣屋の置かれたる地なり。即ち一柳直盛西條城に封ぜらるるや、寛永十三年小松一萬石を割き三男藏人直頼に分與せしもの。爾來明治維新に至る。一柳氏は越智河野の庶流にして當國二千一年の故家と稱したり。本町の邊を昔は千町原と稱し、また千丈にも作る。一柳侯入部の頃までは猶ほ荒野なりしを拓きて

邑落とせしが、猶ほ稀少の松林多きをもちつて小松と稱すといふ。太平記に康永元年、土居通郷、讚岐守護川頼春と千町原に戦ひ敗走せし由見ゆ。明治三十一年町制を布く。いま新屋敷・南川・北川・玉之江の四大字より成り、新屋敷に役場を置く。〔小松藩〕寛永十年一柳直頼西條藩より分知し一萬石を領して此處に居り、子孫相承け明治維新に至る。明治四年藩を廢し縣を置きしも、のち松山縣に入る。〔香國寺〕南川にあり。古義眞言宗。梅檀山王院と號し、同宗御室末四國八十八所第六十一番札所。用明天皇御撰平康の爲め聖德太子の草創せし所と傳ふ。のち空海大師の隱當山麓に鎌倉の女を救ひし由縁に因り特に安産・子育ての靈顯を獲す。爾來寺運隆昌たりしが、天正年間に至りて兵火にかり堂宇概れ灰燼に歸す。寛永年間小松城主一柳氏之を再興せしむ。遠く舊觀に及ばず。御詠歌「後の世をおもる人はかうをん寺とめてとまらぬ白蓮の糸」(實壽寺)新屋敷にあり。古義眞言宗。天養良山觀音院と號し一宮山といふ。高野山金剛峯寺に屬し四國八十八所第六十二番札所たり。聖武天皇天平年間白坪郷に己貴命を勧請して一宮と稱し國家鎮護とす。のち僧道慈社傍に一字を創し、金剛寶寺と號し其別當とせしを當寺の靈廟なりと傳ふ。その後寶類せしを再興し現寺號に改む。御詠歌「さみだれの音に出でたる玉の井は白露

なるや一の宮かは

コマツガワ 小松川

江戸川區の町名。荒川放水路に臨む。しとは今の平井・西小松川・東小松川途の汎稱。舊時は東京府下の農耕地にて、小松菜はこの地名を負へるものなるが、今は江東工業地帯の一部をなす。近世は葛飾郡東葛西領に屬し、東小松川村・西小松川村に分る。東小松川村は小田原役帳に遠山丹波守四十五貫文葛西東小松川とあり。また本多兵衛太郎職功によりて葛西郷のうち金町・曲金・小松川村にて五百貫の地を賜はりしといふ。正保の頃は伊奈半十郎が代官となり治めし地と源法寺領・善照寺領とが入り交りし地にて、元禄十年酒井河内守の檢地あり。西小松川村は小田原役帳に太田勝亮十五貫三百文葛西小松川とあり、正保の頃は伊奈半十郎の代官となり治めし地。大正三年船堀村・小松川村・平井村を廢しその區域の一部を松江村・奥戸村に編入し、その他の區域を以て小松川町を置けり。

コマツジマ 小松島

美方郡熊次村に當るか。〔小松島町〕徳島縣阿波國勝浦郡の東端。徳島市の東南約八軒、北は勝占村に、西は勝浦川を隔てて多家良村に、南は那賀郡の立江町に接し、東は小松島灣及び紀伊水道に面す。町の西南には四國山脈の東端に延びて二〇〇米餘の山地をなし、北東隅には山地の殘留せる二〇〇米餘の小丘陵あり東端は海に落れて深き江灣をもつ。中央及び東は山脈を切つて北流する勝浦川の沖積平地よりなる肥沃な勝浦平野をなし、蕎麥・米・粟等の耕作行はれ又綿織業も盛なり。町は小松島灣に望み北の徳島港に比して港灣深き良港地なる爲め修築して徳島市の外港とし、又四國の東門として盛に阪神・和歌山線と連絡をなし高松港と對抗す。徳島市より出でし土佐街道は西北隅より小松島町の西方を過りて南下し立江町を経て沿岸づたひに高知市に通ず。鐵道は本町の小松島驛(大正二年四月設置)より徳島市に小松島本線通じ徳島本線に連絡し、町の西方中田驛(大正五年十二月設置)より私線阿南鐵道を分岐す。附近の海岸は海水浴場として名あり。本町は徳島縣に於ける新興郡邑の一にて、小松島港の完成と相俟ち將來益々大ならんとしつづあり。町は神田川の支流を挾みて南北に跨り、南は舊市街にて商業地域をなし古來發達せし所、北の部分には築港開設以來發展せし

所にて、躍動小松島の姿を示しここに小松島驛・阿波國共同汽船會社の埠頭及び本社・合同紡績の小松島工場等立ち並ぶ新開地たり。また本町には警察署・縣立高等女學校・町立商業學校等あり。往古の事は詳かならざるも、大字小松島・中田等の地は和名抄、勝浦郡餘戸郷に、大字中郷・田野・新居見等は同新居郷に當るもの如し。而して餘戸郷は中世尾子浦といはる(同項参照)。蓋し海人の居邑せるを以てなり。平家物語に八間尾子浦とあるはこれなり。當町はもと小松島浦といはれ勝浦郡の海驛たり。廢藩置縣後名東區に屬し四區に分ちて戸長役場を設け、明治九年高知縣に合す。同十三年分離して徳島縣に入る。同二十二年町制の布かるるや、小松島村と稱し、同四十年町制を布く。郡の首邑にして元郡役所の所在地なり。〔小松島港〕明治時代は五十噸内外の船が着けらるるに過ぎざりしが、大正二年勝浦川の泥濘と鐵道開通を機とし、千五百噸級の汽船を横づけとする現代の港を生じて海を埋め、水田を埋立て小松島驛・商家・紡績工場等が續々と建設され、遂に徳島港の地位を奪つて徳島本線の關門として阪神地方との交通頗る盛んとなり、遂に港の狹隘を上げ大築港計畫に着手し、現代二千五百噸級の汽船を著け得る築港完成す。然し最近種種の理由にて稍もその勢力衰運に向ひ徳島市勢力を挽回しつづあるは注目すべき

ものなり。然し近年古來使用されし港の北方に新に港が作られ、四國の東關門としての設備を整へ省線との連絡、阪神地方との交通一層便となれり。いま本港の移出入の状態を見れば移出總額約二千三百三十萬圓、移入總額約一千六百六十萬圓に達す。移出品は綿織物(約七百六十萬圓)・生糸(約六百萬圓)・銅鐵(約百三十萬圓)・織物類(約六十萬圓)・蔬菜及び果實(約三十萬圓)等を主とし、移入品は棉花(約三百三十萬圓)・綿織物(約二百六十萬圓)・織物類(約百四十萬圓)・石炭(約七十萬圓)・煙草(約六十萬圓)・和紙及び洋紙(約五十萬圓)等を主とし、取引先は鋼鐵の別府・佐賀縣・高知等、石炭の若松・宇部等を除く他は主として大阪・神戸なり。〔八坂神社〕田野にあり。聖武天皇の御宇惡疫流行し四民の災に罹るもの多かりしを以て、天皇深く之を痛み國毎に一社を建立し祈願以て其災を除く。本社は其一なり。素戔鳴尊・大己貴尊・稻田媛尊を奉祀し、五穀成就、惡疫退散・牛馬安全の守護神として農民の渴仰甚からず。其所る者必ず牛馬を奉納するを慣例とし、其用ひし所の鰻牛いま尙之を存す。〔恩山寺〕田野にあり。古義眞言宗。母養山寶樹院と號す。現に同宗高野末にして、四國八十八所第十八番札所たり。寺傳に天平年間行基の草創と傳ふ。時に聖武天皇の勅願所と定めらる。延暦七年空海當山に留錫し、其母公に侍して孝養意

コマツキ 驛家

但馬國(兵庫縣)の古地名。和名抄に七美郡驛家郷あり。但馬考には「驛はコマツキなり、今俗の駒次庄といふに當る、其義よくかなへり、太田文に熊次と録す」とあり、地は今の

らず。因みて現寺に改むといふ。天正年間兵火に罹りしを蜂須賀氏これを再建す。御詠歌「子を産めるその父母の思山寺とよらひ慕きことばあらじな」(千代の松原)大字中田にあり。芝山を負ひ小松原街道に面す。現時殆ど舊觀を失へるも今猶衰殘の松林々々天を衝き優美の姿愛すべきものあり。八幡祠は鬱蒼たる松林の中にありて翠色滴るが如し。また豊國園の址あり、往時櫻樹道を挟み春時美人眼を驚かすものありしといふ。通枝の詠に「常盤木に花の光を匂はせてまた一しほの千代の松原」とあり、以て當時の風光を想見すべし。慶長六年蜂須賀家政此處に別館を修め、老いて移居す。のち豊國園を館側に建立す。(小松島松原海水浴場)小松島灣南西部一帯の松林は蜂須賀氏初代遷居の植ゆる所にして樹齡數百年を越え、遠淺の砂濱に接して亭々天を摩し、海水浴場として關西籍に見る好適の地。前に和田岬の翠嶺長く海中に突出し遠く紀淡の山々夢の如く遙に煙霞の間に浮ぶ。灣内の岩礁松を頂いて點在し漣波靜に寄せて風光明媚、誠に初夏の理想境なり。殊に海濱隨所に清水の湧出するは此地特有の奇蹟なり。一に此地帯を横須松原と稱し、また合磯の松原とも云はる。(旗山)大字芝生にあり。土佐街道の左方にある一小阜にて、田圃の間に位し石出で松秀づ。往昔源義經日子々浦に上陸するや、屋島の平氏を追討

する爲め先づ此處に旗を立てたるをもつて旗山と稱すといふ。(日ノ峰)本町北部の山麓芝山の一部分にて海拔一六〇米、阿波三峰(津ノ峰・中津峰)の一と稱せられ、頂上に日ノ峰神社あり、海陸の風光を一瞬に収め形勝の雄大なること附近第一と稱せらる。芝山は地質學上頗る重要な山麓にて四國の主軸を爲せる石垣山脈結晶片岩系の東端にあり。鉄泥片石・點紋鉄閃片岩・紅鏡片岩・綠泥片岩・胡雲母片・麻岩・石炭片岩より成り、殊に藍内片岩は他に多く見ざる特有のものとする。(榕樹)辨天祠より丘上に出づる坂道の右手に有名なる榕樹あり。樹根數十條互岩性石を纏うて地に達せるの狀頗る奇觀なり。榕樹は熱帯植物にて日本内地に自生せるもの甚少なく、殆ど西南の海邊暖地に限らる。當處は北緯凡そ三十四度に當り、日本國中これより北には此樹を見ず。其の分布の極限は學術上最も有益なる資料を與ふべく、日本に於て最も貴重すべき天然記念物といふべし。また近時山下の小島にも同樹の生ずるを發見せり。(辨天女祠)大字合磯にあり。天平年中僧行基の創始する處といふ。小丘の上海邊の防備に宛てたる臺場の跡あり。其の功勞者たる同村多田宗太郎の頌德碑は辨天祠前にもあり。附近海中に奇巖怪石の聳え立つもの各處に散點し、松樹これに生じて其の趣愛すべく、眺望散策共に宜しく、小公園の觀あり。また此處

を稱して田野村恩山寺の奥ノ院といふ。(松浦春舉)本町松浦家に生る。通稱松三郎、諱は重吉、幼より畫を好み天才を以て目せらる。京師に往き森田仙に學び、のち圓山應舉に學びて其奥旨を究む。家富裕にして頗る情を以て畫とてこゝ金碧燦爛目を奪ふ。殊に孔雀と鴉を畫くに妙を得、松浦家藏する處の孔雀帖は世人の垂涎指かざる處なり。弘化四年十二月京師に歿す。歳七十七。小松島地藏寺先聖の墳墓に合祀す。
【小松島線】省線徳島線の一部。徳島本線徳島驛(徳島市)より勝浦郡小松島町に至る。全長一・一軒。徳島市とその外港小松島を結ぶ重要な線にして小松島驛にて阿波航路に接続し、中田驛(小松島町)にて牟岐線に接続す。
【コマツタニ】小松谷 京都市東山区東大路より東方の上馬町・下馬町を稱す。清閑寺の西、阿彌陀堂の西北にあり。鳥部山・西大谷の南邊谷越(滑谷越)に通ずる谷に當る。往昔平重盛の邸のありし所。故に重盛を小松内大臣といふ。重盛はここに薨す。往昔は此邊も六波羅の一部にて平家の邸宅充滿せりといふ。谷の奥に正法寺あり。淨土宗。知恩院に屬す。此寺の西北に燈籠堂址と稱する所あり。重盛の念佛堂のありし所と傳ふ。
【コマツバラ】小松原
【小松原】↓東條村(千葉縣)
【小松原】播磨國(兵庫縣)の古地名。中

世の姓名にして、文明五年の文書に見え、北野社領なり。いま加古郡粟井村大字小松原に姓名の名残りなるべし。北野社文書「北野社領諸國所目録、一、播磨國小松原莊、文明五年二月」
【コマト】護摩堂(山)
【護摩堂山】雲山(龍山)(山形縣)の別名。
【護摩堂山】新潟縣中蒲原郡橋田村と南蒲原郡田上村に跨る丘阜。標高二六八米。西麓を信濃川北流す。昔は護摩堂の古城ありしところにして、前面に川を控へ要害堅固の地たりき。越後の名家平賀氏の居城なりき。
【コマナコ】小真名子山 那須火山 脈日光火山群に屬する一峯。栃木縣上野郡日光町と、鹽谷郡栗山村の境界に跨る。標高二三三三米。山中巨樹鬱蒼とし、山勢頗る秀抜、急峻なり。山頂に小真名子明神の小祠あり。
【コマノ】駒野 ↓城山村(岐阜縣海津郡)
【ゴノダン】護摩ノ檀山 高野山の南方約十七軒、奈良縣吉野郡津川村と和歌山縣日高郡龍神村の境界に連る。標高一三七〇米。北西段は笹ノ茶屋を経て白峰(一一一〇米)に、南東段は針尖岳(二二二〇米)に連る。東斜面より十津川の一支出納川源流して東流し、南西斜面より日高川の一支出出して南流す。和歌山縣第一の高峯にして山は菅草を以て

掩はれ、山頂よりは東方に濃尾の大東山脈の連山一列に並び、西方は濃波懸たる紀淡海峡を見渡し、眺望甚だ雄大なり。傳説に據れば、源氏との戦に敗れし平維盛、壇ノ浦に下る平家の一門と離れ、單身熊野に通れ、戦の勝負心にかかりあまり山頂にのぼり護摩を焚き、その煙天のぼれば平家の勝、谷に下れば敗と定めて祈りしが、悉く煙は谷に下りしため、平家の運命もいまはこれまでと遂に熊野灣に入水せりと。これこの山の名の由来なり。
【コマバ】駒場
【駒場】省線土佐線の一驛(大正十四年設置)。北海道十勝國河東郡音更村にあり。
【駒場】東京市目黒區の町名。區の北端。江戸時代は駒場野といひ、約十六萬坪に互る原野にして、將軍の狩獵が行はれし所。もと農林學校があり、これが後に東京帝國大學の農科大學となり、今は農學部と改まり本郷向同の第一高等學校とその位置を交換せり。またこの地に東京帝國の航空研究所あり。
【駒場】愛知縣碧海郡にありし村。明治三十九年本村は竹村・若岡村・堤村と共に廢せられ新に高岡村を置く。
【コマバヤシ】駒林 ↓日吉村(神奈川縣)
【コマミ】駒見 富山縣越中國婦負郡の北部、神通川の左岸に中世置かれし地名。大體いまの富山市の神通川左岸の一部と

四方町・百塚村・倉垣村・八幡村・草島村等に當る。
【コマヤマ】駒山 千葉縣君津郡にありし村。昭和十二年廢村と共に廢せられ新に環村を置く。
【コマユミ】子檀嶺 子檀峯とも云ふ。上田市の西方約十二軒、長野縣小縣郡浦里村と青木村の境界にあり。標高一二二三米。東段は飯沼山(九三二米)に連る。山中延喜式子檀嶺神社あり。
【コマヨセ】駒寄村 群馬縣上野郡群馬郡の東部。駒寄市の西北方約四軒にて利根川の西岸にあり。南は越後町、西は清里村・明治村、北は古登村、東は利根川を隔てて勢多郡南橋村と隣す。全村利根川流域の平地を占め、大部分桑畑をなし、川の沿岸のみ水田ありて米麥の産あり、省線土佐線、村の中央を北走するも驛を置かず。南隣越後町に群馬縣神社ありて驛道を通す。此地は和名抄群馬郡桃井郷の内とす。中世は桃井庄に屬す。平治物語に上野國の住人大直太郎云々と見える大直氏は蓋し大字大久保に住せしものか。いま大久保・津原の二大字より成り大久保に役場を置く。(天狗岩峯)大字津原より群馬・佐渡兩郡の二町八ヶ村にかけて延長約二八軒に互る一路の用水あり、これ利根の本流を津原に於いて堰止め引水せるものにして、天狗岩峯と呼ばる。この堰は越後城主秋元越中守長朝の起工にかゝるにより、長朝に因み一名を

越中堀と云ひ、また大字植野を貫通するところより、植野堀とも稱せらる。
【コマル】小丸
【小丸山】新潟縣中頸城郡春日村大字大場にある地名。承元元年三月僧觀覺三十五歳の時越後に配流せられ、郡司藤原民部景景の山脚に蘆屋を作り五年間寓居せし地と傳ふ。いま西本願寺の別院あり、參詣の信者多く集まる。庭前に上人衣懸の松あり。
【小丸川】 大分縣兒湯郡にある川。東白杵郡南郷村の西境山地に發して東南に流れ、東郷村にて西南に變じ渡川と合し兒湯郡に入り、流路を更に南東にとり山地を切り木城村の南部にて東に流れ高鍋町の中郡より日向灘に注ぐ。流程約四一軒。
【コマカド】小御門村 千葉縣下總國香取郡の西北部。利根川に近し。北は神崎町・高岡村、西は滑河町、東は米澤村、本大須賀村、南は印旛郡久住村と隣接す。房總丘陵の一部を占め村内全部丘陵地をなし、森林多し。南部の丘陵間の狭き低地に水田あり米・麥・蕎麥等を産す。西隣滑河町に省線成田線滑河驛あり、驛道を通す。この地は和名抄、香取郡磯部郷の内なるべく、大字名古屋は大須賀風信の七子を奈古屋七郎左衛門尉重信といへば此地に住し在名を稱せしなるべし。小御門神社もここにあり。大字高倉は三條高倉王の由緒に出づと爲す説あるも、詳かならず。(小御門神社)大字名古屋に鎮座。

別格官幣社。祭神、藤原師賢。明治十五年の創建。師賢は鎌倉時代末の朝臣にて師信の子。參議・左大辨に任ぜられ左近衛中将を兼ね、文保二年權中納言に任じ勅授帶劔を允さる。嘉祥元年權大納言に進み次いで正二位に敘せらる。後醍醐天皇復古の大業に參ぜしがその謀洩れ北山に屏居す。元弘元年天皇笠置に幸し給ふとき師賢を觀山に遣はし天皇に擬裝せしめられ、敵鋒を避け給へり。事顯はれて笠置に逃れしが遂に捕へられ、のち刺殺して素貞といひ、翌二年下總に配流され千葉貞胤の家に囚となる。同年十月遂に配所に三十二歳の生涯を終る。のち太政大臣を贈られ文貞と諡す。今社背にその墳墓、附近に配所の跡遺る。例祭、四月二十九日。(助崎城址)大字名古屋宇助崎にあり。一に登城と稱す。之を本丸とす。城址尾羽根川の上に屹立す。いま山林及び芝地たり。順徳等の跡なほ存するものあり。區中乘願寺は大手門の址なりと傳ふ。西方字二丸に二丸の址あり。千葉常胤の四子大須賀風信初めて本城を築き、以て子孫に傳へたりしが、天正十八年小田原陥落後、本城また從つて廢す。(高倉日代館址)大字高倉にあり。區に櫻井氏あり。その宅地は高倉日代の居址なりと傳へらる。清宮秀隆曰く、高倉は高倉宮の領地に基きしものにして、源頼朝高倉宮の令旨を奉じ、家を起せしより頼朝を擬るのち爲にその名蹟を存せしに

非ざるかと。(藤原師賢館址) 大字名古屋宇小帝にあり。小御門神社の南方約百...

康郡に入り、東方より来る龍治江を管れ、それより蛇行西流して再び伊用郡に入...

【小湊町】青森縣陸奥東津輕郡の東部。小湊町は往時の平内郷の中央にして昭和...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

て水田發達す。主なる産物は米・大豆・帆立貝・鱈・木炭・馬にて住民の過半数は...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

【小湊町】千葉縣安房郡の東北端。清澄山の東南麓にあり。太平洋に臨む。...

街と小湊間に臺灣製糖株式會社經營の輕便鐵道の通するほか二條の大道路ありて...

ンシンの季節に入りて、其港勢風を避く
るに便なる故、僅に支那船の假泊す
るを見る所なり。庄治一帯は古来より嶺
嶺の地にして、爲に街建設せざりき。
本庄は領臺後臺南嶺に屬し、爾後幾度か
の變改を経て、大正九年十月の地方制度
改正以前には、臺南嶺の管轄下にありて、
風山上里・風山下里の二里に分たれ、其
下に草衙・佛公・港仔地・二苓・大人宮・
店仔後・鹽水港・中林仔・風鼻頭・大林
浦・紅毛港(以下風山下里)・中大厝・空
地仔・刺葱脚・中厝・大坪頂・二橋(以
上風山上里)の十七庄を管理せし。改正
後上記二里十七庄は、高雄州鳳山郡下の
一庄として、小港庄の名稱の下に一括せ
られ、十七庄の各々は、小港庄下の大字
として其地名を存続し、港仔地は字小港
と改稱されて庄役場の所在地となれり。
〔天然記念物〕 宇紅毛港の海岸及川岸に
繁茂する紅樹林は珍らしき植物として學界
に認められ、昭和十年十二月五日附を以
て天然記念物として指定せられたり。其
樹林を構成する植物は次の五種とす。紅
樹科の中アカバナヒルギ・マカオヒルギ
ギ・オホバヒルギ、使君子科中のヒルギ
モドキ、馬鞭草科中のヒルギマシナリ。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

國大川郡の南端、阿讃山脈中に位す。東
西二里、南北一里の地域を占む。東は福
榮村大字入野山に、西は長尾町大字前山
並に多和村に、北は松尾村大字田面・富
田村大字南川並に石田村に、南は徳島縣
阿波郡大俣村大字大影に隣り、何れも連
峯を以て界さる。山脈は阿讃國境の連山
と呼應して東西に連互し、谷間に於て耕
地を觀るも、大部分は山地にして、耕地
は僅に全面積の十分の一に過ぎず阿讃兩
方面への水源地をなし、東北半村の水は
東流湊川に、西南半村の水は南流吉野川
に注ぐ。地質は南部は砂岩より成れど、
大部分は花崗岩質より成り、土地肥沃、
氣候中和、水田九十町、畑三十一町を有
し、米(約二千石、約六萬圓)、麥(約八
百石、一萬三千圓)を産し、品質も決して
讚美に比し遜色なし。然れども元來山
地にして林産地をなし、薪炭材(千二
百圓・八百圓)・竹(二千三百圓)・藪(一萬
七千圓)等の産あり、漸次發達しつつあ
り。人口は減少の傾向あり、本山は山地な
れど、讚岐の三本松・津田方面より阿波
市場町に通ずる交通の中間に位し、阿讃
の一交通路に當るをもつて、現今津田・
三本松並に引田のみの鐵道開け、津田・
阿波市場町間に定期自動車の往來あり、
交通便となる。本村は開發新しく、永
年中、木村重輝なる者阿波より來住せ
しに初まり、天正年中その息子が現今の
字日下・大嶽・鈴竹・長野・柳川の五ヶ

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

所に分住、各名主となる、名主五名より
成る地なるを以て五名村と名付けたりと
云ふ。この名稱は明治初年に至り五名山
村と記すに至りしを、大正十二年再び五
名村と改稱す。本村は開發新しきを以て
名跡の古きものなく、氏神社の如きも富
田村の郷社富田神社にして、各字に一ヶ
所の神社(日下社・鈴竹社・大嶽社・長
野社)ありと雖、何れも無格社なり。寺
院もなく、宗教は眞宗を初め各宗あれど
何れも附近村落の寺院を菩提寺とす。
【Five】 五明村 愛媛縣伊豫
國温泉郡の中央部。高麗半島西部の高麗
火山(九八六米)の西南方にあり、又松山
市より北東約八軒の所に當る。東及東
南は湯山村に接し、西南は伊藤村に、西
北は栗井村に、北は河野村に界す。人口
は大正九年の國勢調査の時より年々減少
の過程を辿る。従つて密度も一方軒六十
人、同郡三十八中三十六位、同郡の平均の
四分の一に當り稀薄な人口地帯をなす。
村内一般に山地にて、北に大月山(九五四
米)、西南に夫婦山(三八九米)聳え花崗岩
地帯にて平地殆どなし。南のウツバヤ峠
(三七三米)、北の幸次郎ヶ峠(五二二米)と
及北西部・南西部の溪谷を利用して山道
通じ、それに沿ひて葉落散在す。往昔の事
は以て徵すべきものなし。今菅澤・神次
郎・城山・柳谷・恩地・小屋・梅木・上
總の八大字よりなり菅澤に役場を置く。
【Comio】 ヤマ 五名山 香川

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

【小宮村】 東京府武蔵國南多摩郡の中部
より南に五日市町の西隣にあり。東は
五日市町・大久野村、北は三田村、西は
檜原村、南は戸倉村と隣す。關東山脈中
の一部を占め西端は北部に大嶽山(一、二
六七米)、中部に馬頭刈山(八八四米)、南
部に白杵山(八四二米)あり。東端も北に
九〇二米の山地ありて共に村内に向ひて
傾斜す。村の南部白杵山の麓を多摩川の
支流秋川東流し谷をなす。全村森林多
く、栗・櫟の産あり。秋川に沿ひて府道
あり。五日市町に通ず。同町に五日市鐵道
線武蔵五日市驛あり。他の大部分は交通
不便なり。この地は近世多摩郡小宮領に
屬す。大字乙津は近世立田庄秋留郷に屬
し、もと幕領なりしが、寶曆二年津越
前守に賜はり、其後子孫相續いて知行す。
寛文七年に成瀬八左衛門の檢地あり。ま
た此地より大畑紙といへる紙を産せしこ
とありといふ。大字斐澤は高倉庄秋留郷
に屬す。斐澤の起源に就ては斐澤川の上
流に花水といふ所あり、此處は上古日本
武尊が東夷征討の時に御嶽山に陣營をな
し、麾下の土人悉く渴えし時この山間の
花水を飲みて疲勞を癒はしより斐澤の名
起りしといふも詳かならず。もとより幕
領にして代官小野田三郎右衛門の支配せ
し地なるも、それ以前の代官詳ならず。
寛文七年に成瀬八左衛門・上坂安左衛門
の檢地あり。

曹洞宗。天澤山と號す。天長年間空海海の草創と傳ふ。初め眞言宗を奉ぜしが、のち武田信光之を再興、支那宗黄を請じて曹洞宗に改めしむ。仍りて支那を中興の祖となす。本尊は釋迦如来像なり。

コメカミ 米神 神奈川縣足柄下郡にありし村。大正二年本村は石橋村・根府川村・江浦村と共に片浦村を置く。

コメノツ 米ノ津町 鹿兒島縣薩摩國出水郡の北部。米ノ津川河口に位し八代灣に臨む。出水町の北に隣り、西南は高尾野村に接し、東北は熊本縣東北郡水俣町にて、東北より西南の方向に稍々細長き町なり。東北半は山地にて、東隅に聳える國見山脈の一峯尖峯嶽(六八七米)麓やかに西に傾斜し、西南半は米ノ津平野の東北部を占め平地平坦にて米ノ津川東南方より中央部を横切り山麓を西北流し八代海に注ぐ。海岸線は單調にて多く砂濱をなす。水田よく拓け米の産地をなし其他甘藷・栗・櫻栗・茶類・蜜柑・茶・百合根等を出す。又養蠶も行はれ、海岸は漁業行はる。鹿兒島島街道は山麓を海岸に沿ひて西南部低地に出で、之を横切り西南方阿久根町方面に通ず。途中縣道被れて米ノ津川に沿ひ東南出水町方面に出づ。省線鹿兒島線尖峯嶽山麓に沿ひて、東北方より海岸に沿ひ米ノ津河口に出で、東南に迂回し、出水町に出で更に西に迂回して阿久根町方面へ走る。首邑米ノ津町は河口にあり昔は米の輸出港なりしも

鹿兒島島の開通によりて發へ池港として其生命を保ちつつあり。此地は和名抄出水郡大塚郷の地か、また延喜式に見える古郡市來も此地に擬すべきか。中世以降肥後街道の要衝に當る。もと出水村と稱せしを、大正十二年米ノ津町と改稱す。町の西南なる名護ノ浦は車載の名産地として知られ、生糸のたま或は干蝦として阪神地方を始め諸地方に搬出さる。薩摩日地里墓考「米之津港、廣瀬川の海日にて舟船碇泊の良港なり此所より肥後國に往來するに三太郎といへる薩摩の坂あり(佐藤太郎・津貫太郎・赤松太郎を合せて三太郎といふ其外にも薩摩坂餘多あり)故に旅人多く此處より舟に乗る彼方より來るも同じ因て人口賑へり」(加繁久利神社)下瀬間に鎮座。縣社。祭神、加繁久利神。創建年代不詳なるも、延喜の制に式内小社に列す。文德實錄に仁壽元年六月官社に預かりしこと見え、三代實錄には貞觀二年三月二十日從五位下より、同八年正五位上に進階せること見ゆ。中世に神佛習合の跡、當社また社僧を置きて別當寺を總持院幸壽寺と稱せり。古來領主・地頭の崇敬厚く、寛永二年に家久の社殿を再興し、享保六年に古費もまた重興せりと云ふ。元和年中に寺社地減少の時も、舊の如く六十石を安堵せらる。なほ享保五年正月薩州一國の總社たる事を許され、同九年には神領總額百六十石に及べりと云ふ。例祭、三月四日。(鶴

渡來地)指定天然記念物。其地域は當町及び三笠村・高尾野町・野田村一帯に亘り、海岸の松林に沿ひ、後に岡を控ふる廣き水田と畑地なり。この附近を寛政田圃と稱す。近年渡來する鶴の数は一千羽に達すと云ふ。その多くは鶴鶴にて、眞鶴は僅々数十羽を交ふるに過ぎず。これ等の鶴は夏季東部シベリヤ・滿洲・北部朝鮮等に蕃殖し、十月中旬迄々日本海を渡りて來たり、三月中旬に至る間をこの地に過す。従來は阿久根附近を時とせしも、いま阿久根には二・三羽づつ小數を見るに過ぎず。近年は晝夜共にこの附近にて暮し、晝は早朝より小群をなし、隨所に分散して餌を漁り、夕刻にいたればこの寛政田圃の中央に集まり夜を明かす。

コメマキ 古馬牧村 群馬縣上野國利根郡の西部。浮田町の西北約八軒。利根川上流の左岸に沿ひ、西は右岸の桃野村に對し、東は南に薄根村、北は水上村に連り、面積五〇平方軒餘を占む。東境には高橋山(一三二五米)・板澤山(一一四七米)・三峰山(一一二二米)の山嶺北より南に連りて池田原と界し、その山腹西に急斜し始め山地原野をなす。西部利根川沿に耕地拓け、米・蕎麥・野菜等の産あり。清水越・越後街道と省線上越線利根川の谷に沿ひて南北に通じ、従者は南部に後園驛(大正十五年設置)、北部に上牧驛(昭和三年設置)を設け、交通不便ならず。日本後紀・弘仁二年十月の條に「上

コメヤマチ 米屋町 大阪の町名。東區。本町と唐物町との中間に並行し、東横堀川より東西に通ずる町五丁目まであり。現今東區南本町と改稱す。卯月の調色・上・必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町

コメン 後免町 高知縣土佐國長岡郡の南部。北は長岡村に、東及び南は大窪村に、西は岡豊村に接し面積〇・一五方軒の狭小なる町。北に一〇〇米前後の小丘あり、南麓を舟入川西に流るる外、高

知平野の中央沖積地に位する爲、温暖な氣候と共に農業盛に行はれ水稲は二期の收穫をなし、又野菜・茶園等の産あり。町の北に山田町(香美郡)、東に野市町・赤岡町(香美郡)、西に高知市あり省線土讃本線は町の北を、高知市より野市町へ向ふ街道は南を過ぎる。而して前者の後免驛(大正十四年設置)は隣村岡豊村の地籍にあり、私線土佐電鐵・高知鐵道はこゝにて連絡す。其他大小の道路は四方に通じ交通便なり。町には學校・警察署・裁判所・郵便局等あり。近年とみに發達せる新興の都會にて、人口の稠密さは縣下第一にして一方軒の密度は約八五七三人、高知市の四倍にも當る繁華な町となれり。此地古くは和名抄、長岡郡大窪郷の内に屬せり。町は香長平野の中央に位し、永應元年野中兼山が花々たる平野の眞中に建設したる稻吉新町がその初めなり。開墾獎勵のため種種特典を與へられ、年貢御免の事などもありき。兼山の計畫になる舟入川開鑿も完成してより、交通の要衝となり漸次發展し來る。

コモ 願面 朝鮮總督府鐵道局京釜本線の一驛(大正十四年設置)。朝鮮慶尙北道慶山郡孤山面にあり。

コモイリ 薦入 肥後國(熊本縣)の古地名。和名抄、山鹿郡に薦入郷あり、一に著人郷に作り或は著入郷に作り、著入郷に作るも誤なるべし。その地今の鹿本郡田鹿村の邊に當るか。

コモギ 峠 赤城山の北方にある峠。最高點は一〇二四米を算し、群馬縣利根郡赤城根村と東村の境界に跨る。西降すれば東村字穴原に至り、南東降すれば、利根川の畔なる赤城根村字利根に達す。

コモサン 古茂山 朝鮮咸鏡北道富寧郡西上面の東南部。滿鐵北鮮鐵道管理局線北鮮西部線の古茂山驛(大正五年設置)は南隣の富寧郡北端にあり、朝鮮鐵道咸鏡北線こゝより分岐し、西走し車輪嶺の險を過ぎて鴨綠江上流の茂山まで六〇軒の輕鐵を通ず。驛は輪城川(武陵川)右岸にあり、附近より木材・木炭の搬出多し、西方二〇餘軒の車輪嶺・舞袖湖の大森林は木材の産地として知らる。驛の北方約二軒(西上面内)に古茂山城址あり、李朝初期築を築き萬戸を置きたる址にして、當時の城壁今に存す。

コモタ 薦田 筑前國(福岡縣)の古地名。和名抄、穂浪郡に薦田郷あり、古毛多と訓す。その地今の飯塚市に當る。穂波村も本地域内なりしものか。

コモタハマ 小茂田濱 ↓佐須村 (長崎縣下縣郡)

コモチ 子持 上野國群馬、吾妻、利根三郡の境にある山、海拔約一二六三米にして舊噴火口と思はれる谷あり。頂上に子持神社(群馬郡自郷井村)祀らるるが、子持岩と稱す巨岩を始め種々の奇岩あり。利根

川を隔て、赤城山の西に隣する堆積なる山にて、肩部に小峰を持ちしための名稱と思はる。その西なる小野子山と相並ぶ。萬葉集・一四に左の如く歌はれたるは此山なりと稱せらる。兒毛知山若鷲冠木のもみづまで宿も吾は思ふ汝は何ぞか思ふ

コモツリ 菰釣山 關東山脈丹澤山塊に屬する一峯。山中湖の北東方に峙ち神奈川縣足柄上郡三保村と山梨縣南都留郡道志村の境界に位す。標高約一三五〇米。金山露岩たる森林を以て掩はる。山一麓は丹澤世傳御料林にして原始林の美は聲音に盡し難く、然もこの山未だ登山者より顧みられざるため、原始林のままに存す。

コモノ 菰野町 三重縣伊勢國三重郡の西部。鈴鹿山脈東麓を占め四日市市より西北方約一〇軒にて東は縣村に、南は櫻村・水澤村に、北は鈴川原村・千種村に接し、西は山嶺を隔て、滋賀縣蒲生郡市東村・甲賀郡勸修寺村に界し稍々東西に細長き村なり。西北境に御在所山(一一一〇米)、西南境に鎌ヶ嶽(一一五七米)ありて東方に緩く傾き一支脈東に延びて南境を限る。東部北半に低地をつくり三

野國利根郡長野牧場(三品葛原親王)と見える長野牧は大字上牧・下牧等なるより見て、蓋しこの地ならんといふ。延喜式に久野牧ありて長野牧見えず。恐らく長を久に誤りしものならん。此地は金銀を産する天沼瀨山の一部を成し、また東京電燈會社小松發電所(大正十一年開設)あり。當時出力七一〇〇キロワット(最大出力一〇七〇〇キロワット)にして利根川水系・利根川及び湯輪川を利用す。大字後園は越後街道三國越・清水越の分岐點たる一驛。曹洞宗の玉泉寺あり。(玉泉寺)大字後園にあり。曹洞宗。三峰山と號す。嘉吉年中、一州正伊開創す。正伊は長尾昌賢に請ぜられ、鎌倉に玉泉庵を建立す。のち浮田長忠これを上野國に移す。よつて正伊當地に來りて造替せしもの本寺なり。寺領近世五十石を有す。

コメヤマチ 米屋町 大阪の町名。東區。本町と唐物町との中間に並行し、東横堀川より東西に通ずる町五丁目まであり。現今東區南本町と改稱す。卯月の調色・上・必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町

コメン 後免町 高知縣土佐國長岡郡の南部。北は長岡村に、東及び南は大窪村に、西は岡豊村に接し面積〇・一五方軒の狭小なる町。北に一〇〇米前後の小丘あり、南麓を舟入川西に流るる外、高

瀧川東流し四日市市に入り海に注ぐ。三瀧川上流に菰野温泉湧出し、泉質無色透明無臭のアルカリ泉にて加熱し浴用に供す。また湯ノ山温泉とも言ふ。低地には耕地よく拓け良質の米を産し世に關取米の名あり、東部低地は交通よく發達し縣道南北に通じ、一は東南に被れ四日市市方面に至り、又四日市市より社線三重鐵道線の湯ノ山線(電車通じ)、神倉・菰野・湯ノ山、以上三驛は大正二年設置)・菰野(昭和五年設置)・中牧(昭和四年設置)の五驛を置く。この地は神風抄に菰野御厨と見ゆ。天正年中瀧川一益、織田氏の命によりて此地を管し代官を置く。慶長五年土方河内守雄久この地に築き子孫相承けて明治維新に至る。昭和三年町制施行。(菰野藩)土方雄久閣下原役に功あり、この地に封を承け一萬一千石を領して子孫相承けて明治維新に至る。明治四年藩を廢し縣を置きしが、間もなく廢して安濃津(三重)縣に入る。藩校顯道館はもと藩澤館又は修文館と稱し、文化十三年土方義苗の創立にかゝる。

コモハラ 薦原村 三重縣伊賀國名賀郡の西部。名張盆地の西端にあり阿山郡上野町の南方約一軒、名張町との間に菰持村を隔てて其北にあり。東は美濃波多村に接し、北は吉山村・花垣村に隣り、西は奈良縣山邊郡波多野村・豊原村なり。西部及西北部は二〇〇米程度の丘陵走り東南部には一〇〇米程度の臺地あり、

コモフ——コモロ

其間低地をなして名張川西部に屈曲しつづ北流す。米・藁の産あり。名張街道は北方上野町方面より東北部を掠めて東隣に出で、東境近くを南へ走り名張町に出づ。東南約二軒には社稷參宮急行電鐵の西原驛あり、古くは和名抄、名張郡周知郷に属せるもの如し。村は萬生・西田原・八幡・鶴山・家野・葛尾の大字よりなり、萬生に役場を置く。村名は村の大部を占むる萬生・西田原の一字宛を取りしもの。〔彌勒寺〕 新義真言宗豊山派。草創沿革不詳。木造十一面觀音立像一軀は高さ五尺四寸七分、鎌倉初期の作にて同末期の作なる木造觀音立像一軀と共に同裏。

【小諸町】 長野縣信濃國北佐久郡の北部。淺間山の南斜面を占め、町の南端は千曲川に沿ふ。東は小諸村・北大井村・南大井村、南は三岡村・川邊村、西は大里村と隣す。淺間山の南斜面の一部を占め、北境は約一八〇〇米位にて南方に緩傾斜し、山裾を千曲川西北に流れて町の南西境をなす。山地には森林あり。千曲川沿岸北端は田地をなし、南部は畑地をなす。米・麥・酒・醬油・味噌等を産し、養蠶盛に行はれたる木材を産す。町の南部を善光寺街道通り往昔小諸驛を置き、街はこれに沿ひ、又善信越本線北西に走りて小諸驛(明治二十一年設置)を置く。同驛は又小海線の起點にて、町の東南端には同線乙女驛(大正四年設置)も置く。小諸警察署・小諸高等女學校・小諸商業學校及び信濃川水系の千曲川を利用せる小諸發電所(出力一三、四〇〇キロワット)あり。この地は和名抄、佐久郡大村郷の内なるべく、延喜長部省次の信濃國、善水郡馬十疋とあるは此地ならん。小諸は一に小室に作り、千曲川を流れば、善水年間小室太郎光榮この地を領し、小諸城に居り小室仲に應じて之を授け、のち鎌倉へ出仕す。建久八年、將軍家、信州善光寺詣の時に小室太郎が館に宿りしことあり。應永以後は小室氏衰へ、大井氏起り、文明十六年、大井伊賀守光忠この地を領す。大永、永正の頃より村上氏の邑となり、村上氏

逐はれて武田氏の兵來り小室城を守る。小諸に鎮城を造りしは此時か。天正十年、澁川一益の時に通家彦八郎正榮ここに來り守る。既にして北條家の兵、一益の退去に乗じて入る。天正十一年徳川氏の將依田信蕃佐久郡を攻略し小室城を取る。元禄十二年牧野康成來り治し、子孫相傳へ明治に至り廢城し、城址はいま公園となる。〔小諸城〕 驛の西約三〇〇米。東は淺間山麓の丘陵に連り、西は千曲川に臨み、南北共に斷崖をなし、規模雄大なる城址を存し、西は本丸址、東に濠を距て二の丸址あり。本丸の天守臺その他曲輪址・二の丸址・間門址・同南丸及北丸址等何れも石臺殘在し、三の丸は市街の一部に屬せし、明和元年牧野康成の再建にかかるとの門のみ遺存す。樓門にて左右の土塙に銃眼あり。此城一に乙女ヶ城といふ。善水の頃、小室氏此地を領す。文安・享徳の頃に至り大井氏領す。天正・大永の頃村に善清此地にあり。天正十二年武田氏之を陥れて、城を築き、小山田昌幸等居城す。天正十一年徳川氏の將依田信蕃攻めて之を取り、關後十八年まで徳川氏の有たり。〔小諸藩〕 依田下野守康國が天正十一年三月、徳川氏より六萬石を賜はり此地に居りしが、弟修理大夫幸正に至り、天正十八年上州藤岡に移り、仙石秀久は豊臣秀吉より五萬石を以て此地に封ぜられ、慶長五

年徳川氏に服す。仙石秀政が元和八年上田に封じ、直ちに松平大納言忠長五萬石に加増されて之を繼ぎ、寛永元年に至り久松因幡守、四萬五千石を以て此地に來り、慶安元年に青山因幡守宗俊三萬石を以て所領す。これより以後暫く代官を以て宛てしが、寛文二年酒井勝成守忠成に代り、延寶七年九月に西巻忠成氏入りて所領し、二萬五千石を食む。天和三年に至り、石川美作守宗俊二萬石を以て代り、同年十一月牧野周防守康重一萬五千石を以て入領し、爾來其子内膳正康周・遠江守康滿・周防守康隆・内膳正康備・宮内少輔康長・弟なる内膳正康明・遠江守康命・遠江守康成を経て周防守康清に至りて明治維新に及ぶ。明治四年藩を廢し縣を置きしが間もなく廢して長野縣に入る。藩校明倫堂は文化二年牧野康水の創立せるものにて、明倫學校は明治三年牧野康水の創立せるもの。〔光岳寺〕 淨土宗。天機山傳通院と號す。慶長七年松平因幡守勝元、其母傳通院(徳川家康の母)追福の爲め葛飾郡弘願寺を改め母の諡號に因みて光岳寺と號し、堂宇を再建して弘願寺第九世善慶を開山とす。〔天狗妻飯産地〕 指定天然記念物。驛の東南二軒。小諸町味噌塚にある天狗の妻飯と云へるは特異なる小瓢箪にして、飯塚山・墨嶺山その他に場所を限りて見らる。採りて食するを得、古來飯粒・飯砂・飯鬼の飯等の別稱あるも、近來天然状況の變化に

因り變質して不純粋となり居れり。尙ほ小諸町内の淺間山上「ぎば」に純粋なる麥飯産地あり。

其後元禄十一年阿部豊後守に賜はり、子孫繼いで領せり。大字三丁免とも明用村の内にて小名を三丁免と稱せしを、徳川氏關東入國の後、酒依喜右衛門知行せし時(元禄十一年、明用村を阿部豊後守に賜はりし頃)分村せり。されど正保の國圖には既に村名あれば分村せしは正保以前の事なるべし。慶長五年地頭酒依喜右衛門の檢地あり、子孫繼いで知行す。

抄に島上郡見屋郷あり。地は今の三島郡富田町の邊と云ふも詳ならず。名稱よりして、神代紀に見ゆる天見屋根命の裔の居りし處かと云はる。

郡の中部。飯路市の西方一五軒。北は神岡村に、東は太田村に、南は豊田村に、西は排保川を距て龍野町に對す。準平原をなす中ノ山脈の南面に屬し、此山地より排保川と林田川が南流し、本村は兩川に挟まれ、中部には分懸丘陵が見らる。此等の山地は流紋岩よりなりて高度は二〇〇—三〇〇まで低し。河間の低地には水田分布し、播磨米の名をもつて有名なり。鐵道は中播磨の交通上の要地だけに、又龍野町が排保川の右岸にありて山地を控ふる爲、對岸の此地に集り、飯路と新見をつなぐ新線はこの排保川の谷を上り、本龍野驛(昭和六年設置)を置く。又飯路・新宮間には自動車道の便あり。小宅村は和名抄、排保郡小宅郷の地にて、今小宅北村なる大字名残れり。蓋し中井の地は排保郡上岡郷の地ならん。小宅の里は元は漢部里とも云ひ、往昔この地に漢人居りしゆみの名を得、のち小宅と改む。

コヤシキ 後屋敷村

山梨縣甲斐國東山梨郡の南部。北は鹽山町に、西は日下部町・加納岩町、南は等々力村・休息村、東は山村と隣す。面積二七二平方軒の小村なり。甲府盆地の東北隅の一部を占め、西方を流るる信吹川の流域にあり。全村桑畑多く米・麥・藁の産多し、省線中央本線村の北部をかすめて西南に走り、西隣加納岩町に日下部驛あり、驛道を通ず。この地は和名抄、山梨郡玉井

コヤ 小谷村

埼玉縣武藏國北足立郡の北部。荒川中流の東岸。西北は吹上町、東は箕田村、南は田岡宮村、西は荒川を隔て、比企郡北吉見村と隣す。關東平野内の一部を占め、全村平地にて殆ど水田なり。荒川堤防の外側は水田なく、畑地をなし米・藁の産多し。中山道及び省線高崎線は村の北部を通りて西北隅吹上町に通じ同町に吹上驛を置く。此の地は近世足立郡郡領に屬す。大字小谷は箕田郷箕田庄に屬す。寛永十一年に、太田次兵衛の賜はりし地と、同十九年に山本新五左衛門・下山五郎助・酒依喜右衛門等の賜はりし地入り交り、子孫繼いで領せり。寛永六年には大河内金兵衛の檢地あり。大字前砂も箕田郷に屬し、徳川氏關東入國後は代官の治所なりしが、寛文四年山岡十兵衛に賜はり、のち幕領となり、元禄十年に阿部豊後守の領地となりしより子孫繼いで領す。慶長十二年に伊奈備前守の檢地あり、その後延寶五年、山岡十兵衛の檢地あり。大字明用は村民鶴間氏の開墾せる地にて、往昔は鶴間村と稱せしを何れの頃よりか明用村と改めしといふ。また大字三丁免も明用と一村なりしといふ。正保の頃に幕領及び酒依喜右衛門・戸川主水の知行所入り交り、慶安五年に代官の南後金右衛門の檢地あり、

コヤ 木屋村

福岡縣筑後國八女郡の南部。矢部川上流に沿ひ黒木町の南に隣る。西は串毛村に隣り、東は笠原村・大淵村に隣り、南は熊本縣鹿本郡岩野村に接す。南境に女岳(五九六米)あり、全村山地多く全體に西北方に傾斜し、東南方より流れ来る矢部川東部を北流して北部に出で西に迂回して黒木町に、更に西に流れて筑紫平野に出づ。川の流域に僅に耕地拓け米・麥を産す。交通概して不便なれど、矢部川の谷に沿ひて驛道走り北隣黒木町より西方福島町方面に通ず。往昔の事は詳かならざるも、中世黒木の一黨この地に住して木屋氏を稱し、正平中の勤王家に木屋行實あり、いま木屋・北木屋の二大字よりなり木屋に役場を置く。

コヤウラ 小屋浦

省線吳線の一驛(大正三年設置)。廣島縣安藝郡坂村にあり。

コヤケ 小宅村

兵庫縣播磨國揖保郡の中部。飯路市の西方一五軒。北は神岡村に、東は太田村に、南は豊田村に、西は排保川を距て龍野町に對す。準平原をなす中ノ山脈の南面に屬し、此山地より排保川と林田川が南流し、本村は兩川に挟まれ、中部には分懸丘陵が見らる。此等の山地は流紋岩よりなりて高度は二〇〇—三〇〇まで低し。河間の低地には水田分布し、播磨米の名をもつて有名なり。鐵道は中播磨の交通上の要地だけに、又龍野町が排保川の右岸にありて山地を控ふる爲、對岸の此地に集り、飯路と新見をつなぐ新線はこの排保川の谷を上り、本龍野驛(昭和六年設置)を置く。又飯路・新宮間には自動車道の便あり。小宅村は和名抄、排保郡小宅郷の地にて、今小宅北村なる大字名残れり。蓋し中井の地は排保郡上岡郷の地ならん。小宅の里は元は漢部里とも云ひ、往昔この地に漢人居りしゆみの名を得、のち小宅と改む。

コヤ——コヤシ

コヤシ——コヤフ

郷の内なるべし。〔清白寺〕西後屋敷にあり。臨濟宗妙心寺派。元弘三年足利尊氏の開基、夢窓國師を開山とす。天和二年榮上。貞享年間關東周芳之を再興す。爾來妙心寺派となる。堂宇中佛殿は正慶年間の建立に係り五間五重層入母屋造の繪皮葺なり。軒は隅に隔欄を用ひ、軒端殊に隔軒著しく反り、禪宗建築の特徴を現はす。折組は唐様出組を用ひ、柱間は前面中央に棧唐戸をつけ、兩脇二間に火燈窓をつけ居り。内外よく鎌倉時代末期に於ける禪宗建築の様式を存し、現に國寶建造物たり。

コヤシロ 小社 近江國(滋賀縣)の古地名。和名抄に神塚郡小社郷あり。その地今詳かならず。

コヤス 小安 神奈川縣橋本郡にありし村。明治四十四年橋本市に編入さる。

コヤタイラ 木屋平村 徳島縣阿波國麻植郡の南端。北は中枝村と美馬郡口山村に、東は東宮山(一〇九一米)、京城山(一六二八米)を界とし、中枝村・名西郡上分山村・那賀郡澤谷村に、南は當野石時(一二七一米)・天神丸(一六八二米)・日奈田時(一八四六米)・一ノ森(一八八〇米)・劍山(一九五五米)等を界として、那賀郡澤谷村と界し、西は九使山(七二二米)・赤帽子山(一六一二米)・保賀山時(一一二六米)・桐付山(一二五六米)・林立峠(一〇四八米)・明神岳(一二二三米)を界として美馬郡の東祖谷山村・一字村・古宮

村に界す。麻植郡の四割の面積を有し、廣範圍に亘る村なるも一方軒の人口密度は五三人の稀薄なり。四國山脈の南方を東西に走る平均高度約一五〇〇米を有する劍山を脈の主峯、劍山は村の西南隅に聳え、それを中心として東方及北方に山岳重疊聳立して分水嶺をなし又浸蝕烈しきため谷の發達著しく何れも深谷をなす。村の中央部を南北に吉野川の一支穴吹川の上流が溪谷を穿ち、北東隅に於て流路を西にかふ。是にほゞ平行して里道つくる。靈峯劍山の參拜に登山する人々の爲め山道は穴吹川の谷を廻り、更に西南方の谷を傳ひつゝ海抜一三〇〇米附近の富士の池の神殿にまで通ず。山地には森林繁茂して樹類に富む。村内に森遠城址あり。平宗本ここに據り松家越前守と稱し或は大浦と稱す。一に小松内府の齋たりと傳ふ。正平中兩朝に奉侍す。天正中邊谷安太夫に從ひ成を丹生山に討ち功あり、即ち五十石を賜はり世々里正となる。今の松家家は其裔孫なりと。また古老の説に據れば此の松家家の祖先は、安徳天皇の屋島を逃れて大浦山に匿れ、木屋(本村の古名)に假居し給ひし時に屋從せしものにして、それに平氏を語へ木屋平氏と稱し、地名もまた之に因みて木屋平と稱す。慶安元年に至り蜂須賀忠英より松家の姓を賜はりしものと。大字三木は麻植郡那賀郡の人々の開きたる所なりと、其高橋いつの頃よりか山中に移り地名を

取りて三木氏を稱すと。

コヤナ 小梁村 福島縣岩代國南會津郡の北部。北は布澤村に、東南は富田村に、西南は八幡村に各隣接す。北邊に大曾根山(九五三米)・靈現山(七九八米)の山嶺東西に連亘し、南境を伊南川西北に流るるも低地少く、僅に伊南川岸にありて水田拓け、米・蕎麥を主産し薪炭を出す。縣道沼田街道南部伊南川に沿うて通じバスの便あり。本村は小林・葉取の二大字より成り、小林のほとと葉取の葉とを同じ小梁村と名づく。八幡村・布澤村と組合町村をなし役場を大字小林に置く。大字小林に往時館あり、天正十八年長沼盛秀と布澤上野助、同じく信濃の爲めに攻め落されしといふも何人の居館なりしや詳かならず。

コヤノセ 木屋瀬町 福島縣筑前國鞍手郡の東北部。遠賀川の東岸にして植木町の東に隣る。南は中村に接し、北は遠賀郡香月村に界す。東半は丘陵性の山地起伏し東端に舞岳あり。西半は遠賀川流域の沖積地をなし土地平坦耕田よく拓け米を産す。又筑豊炭田の一部を占めて木屋ノ瀬炭山あり。北方八幡市方面より來る縣道(舊鹿兒島街道)西部を南に走り直方方面に至る。築港之に沿ひ街村型をなす。北部に社寮筑豊鐵道の終點野面驛(大正四年設置)あり。附近町村と共に要塞地帯の一部をなす。此地は和名抄、遠賀郡木夜郷の地とす。古くより長崎街

て豪奢漲りなし。今の湖山池は當時長者の田地なりしが、或年之が田植を一日間に了せんとし、國中の人を驅り集めしに小許を割して日没に薄ければ、金扇を舉げて日を招くこと三度、天日亦逆轉光を回入せしと云ふ。此の如かりければ、後水となり、財貨も悉く消亡して其家遂に斷絶したり。湖水の附近に塚塚と云へる孤山あり、該家全盛時代の時塚を築てたるもの積りて山となれりと云ふ。

【湖山村】 鳥取縣因幡國氣高郡の東北部。湖山池の東北岸に沿ひ、面積一二・一四方軒。鳥取市は東方六軒の地點にあり、北は鳥取市に、西は木坂村に、東及び南は松保村に界し、日本海岸の砂丘地を含む。村は鳥取平野の西北部を占め湖山地より流出する賀露川(湖山川)が村の中央を西南より東北方に流れるを利用し灌漑を便にし、木田を拓き米・馬鈴薯等をつくる。鳥取市より來る省線山陰本線は湖山驛(明治四十年設置)を設けて村の南部を湖に沿うて西にゆく。賀露川と鐵道の交叉する所に湖山村あり、村の主要をなす。往古の事は今詳ならず。村内に和泉式部の産水の井及び大江の屋敷址と稱するものあり。傳ふるところに據れば式部の父大江雅輔は此地に住せしものにして、式部もまたここに生るといふ。湖山池を霞湖と稱するは和泉式部の「春たてば花の都を見てもなほ霞の思に心を

ぞやる」といへる歌に基づくといふ。

コユ 兒湯郡 宮崎縣日向國。宮崎縣八郡の一。縣の中央部を占め、西は國見山脈山嶺より東は日向灘沿岸に亘る地域を占む。北は東臼杵郡に、西北は西臼杵郡に接し、南は宮崎郡・東諸縣郡に、西南は西諸縣郡に隣り、西は國見山脈を隔てて熊本縣球磨郡に界す。東部にある美々津町・都浪町・妻町・高鍋町の四町と十一村より成る。西北の大部は國見山脈及び前日向山脈の山地をなし、東南部は宮崎平野の北部を占むる平地なり。西境に略一〇〇〇米の國見連嶺連りて西北隅に市房山(七二二米)を起し夫より東に石堂山(一五四七米)・樋口山(一四三三米)・空野山(一一二七米)等連りて北境を限り、其南の西北部より北部にかけて天包山(一一八九米)・鳥帽子嶺(一一二六米)・オサレ山(一一五二米)・高家山(九八七米)等聳え、又國見山脈の一支脈一〇〇〇米程度の連嶺を連りて西境より西南部を東に延び、西北部山地との間に市房山の北方笠原山より發源する一ノ瀬川上流の多くの谷を抱き、之等山地は謂ゆる米良山塊をなす。之等山地の東に郡の中部を東北より西南の方向に走る前日向山脈ありて北境東端に尾鈴山(一四〇五米)、其東の東北境に畑倉山(八四九米)あり、尾鈴山の西南方、郡の中央北部に杖木山(一〇二二米)、其南に大瀬内山(九七九米)、更に西南方面の中央西南端に國見山

コヤヘ 小矢部川 富山縣西部を流るる川。東、西礪波兩郡境、大獅子山(一一二七米)と、大門山(一五七二米)間にあるアナオ峠に發源して北流す。西太美村字才川七まで約二〇軒間は粗面岩類、上部球粒紀・第三紀層より成る地域中を、嵌入し曲流す。才川七附近より謂ゆる礪波平野中を貫流し、礪野町(東礪波郡)の西に於て有名な城端町(東礪波郡)より流來せる山田川と合流す。更に石動町(西礪波郡)を経て方向を變じ、謂ゆる石動地塊の東縁を東北に流れ、高岡市の西を過ぎ、北陸有数の貿易港たる伏木町(射水郡)に於て富山灣に注ぐ。流域に城端・福光・井波・礪野・津澤・石動等の各都邑地方的中心都市として約六軒の距離に散在せる事は注目すべき現象なり。

コヤマ 小山 長野縣上高井郡にありし村。明治二十五年豊丘村と改稱す。【小山】 愛知縣碧海郡にありし村。明治三十九年本村は刈谷町・重原村・進妻村・元刈谷村と共に廢せられ刈谷町を置く。【小山】 大阪府南河内郡にありし村。大正四年藤井寺村と共に合併し、新に藤井寺村を置く。【小山】 ↓飛鳥村(奈良縣高市郡) 【コヤマ 湖山】 鳥取縣日本海岸にある湖沼。鳥取市の西約五軒に位し、氣高郡の湖山村・松保村・大郷村・木坂村の四箇村に

互る。高度一米附近にあり。面積七二五平方軒。四周一四・六二軒あり。全體としては淺く水草繁茂するも北方津生島附近は湖流のため深き澤となり九米に達す(湖底湧泉に基づく説は非なり)。著しき注入河なき排水は北東湖山川を経て河口附近の千代川に注ぐ。千代川・湖山川の浸淫により海水逆流し被害を及ぼせしも、昭和十年池田開門完成されし後は春より秋には淡水となり、冬には水門開かれる故多少汽水となる。これにより湖水を木田の灌漑により使用し得るやうになれり。湖は土地の沈降並に日本海岸との間に發達する砂丘の阻止に基く。水は濁り透明度一二米内外。水温は年中上下殆ど等温。冬季寒き年には四度以下に降り轉じ全面結氷す。鹽分は季節により大差あるも海水のりを超ることなし。弱アルカリ性にして現在酸素の成層なし。湖岸にはヨシ・マコモ・ガマ・ヒシ其他沈水植物繁茂し、プランクトンも豊富。底棲動物は楕殼及房蝸幼蟲、魚類はワカサギ・コヒ・フナ・ボラ・ウナギ・シラウチ・エビ等なるも養殖不充分に於て割合に漁獲量少し。調和富榮愛型に屬す。漁業の外南東岸に日本航空會社の着水場設けらる。觀光地として好適ならず。またこの池に有名な傳説あり、湖山村の茶屋の間の沙堤に住む屋敷石の如き小石を發見せらる。是れ長者屋敷の跡なり。長者を産見と云ふ。富一國を嘆ふし

11201

(一〇三六米)、西南境に掛掛嶽(一二二三米)聳え各々東南に傾斜し、それ等山地の間を西北より東南方の方向に多くの河川流れて日向灘に注ぐ。南方より一ノ瀬川、小丸川・平田川・名貫川・都濃川等あり、一ノ瀬川の上流は米良の山峯を急走して發電の便を興ふる。東南部は岡崎平野北部の低地を占むるも多くは臺地起伏し、其他小丸川初め各河川の沿岸にのみ沖積低地を造る。東部日向灘の海岸線極めて單調にては、南北に直線型をなし船舶を繋ぐべき港なし。氣候は南國のため夏涼冬暖にて夏の暖氣は一般の地方より二ヶ月程長く、謂ゆる南海型の多雨季且つ多雨季なり。此惠まれし氣候の爲、稲は二度作が出来、又この天恵を利用して豊富な圃園農業も行はれ南瓜・西瓜・胡瓜・茄子・トマト・黒芋・甘藷・豌豆・蠶豆等栽培され優良な竹材の特産もあり。又臺地には桑の栽培も行はれ蠶蠶も盛なり。畜産又行はれ牛・馬・豚に富む。然し原野は未だ拓ききれぬ可耕地を多分に持ち、人口増殖力に餘裕ある移住地を幾せり。郡の人口は昭和十年度九六・四五〇人にして人口密度一方軒に八二人なり。西方山地は交通一般に不便にて、東部低地には日向街道南北に走りその東海岸に沿ひて省線日豊線通じ、北より美々津驛・都濃驛・川南驛・高鍋驛・三納白驛等あり。東南部には省線豊後線が南陽宮崎郡にて日

豊後より流れて一ツ瀬川に沿ひて通じ、黒生野驛・豊後・終點杉安驛等あり。景行紀に子湯驛とあり、景行天皇の行宮のありし所。讀日本後紀承和四年の條に子湯驛と見え、延喜式に五りて兒湯郡に作る。和名抄は古山と訓じ三納・穂北・大垣・三宅・觀崎・韓家・平野・都農の八郷を統く。本郡は日向國府を置きし所なるもその地はいま宮崎縣に入る。

御油町

愛知縣三河國寶飯郡の北部。豊橋市の西北方一二軒。北は赤坂町・萩村に、東は八幡村に、南は國府町に、西は御津村に接す。木曾山脈の南西に延びる所古生層の山地は二〇〇米位の高度を以て町を四圍し、香利川は東南に流れ此山地を切り洪積層の谷を生ず。町は香利川の右岸にありて、この峽隘を東海道通じ、爲に御油は北接の赤坂とに宿場たり。いま東海道本線の御油驛(明治二十一年設置)は御津町にあり、社線名古屋電線は此谷を東海道と平行して通じ、香利川の對岸に元海油驛(大正十五年設置)を置く。面積小なるに、山地起伏するが故に、川の流域に僅かの水田・桑畑を認め得るのみにして農業は概はず、町も東海道本線の開通とともに交通量を減じ、ために衰へ老年期の町となれり。曾ては寶飯郡郡役所の所在地たりしが、今は警察署があるのみ。此地は和名抄の寶飯郡望理郷の地にして、相當古くより發達せしものと思惟せらる。町内には城

址ありて狐屋敷と稱す。御油はもと五位又は五井に作り、御油松平氏あり。之は松平信光の七男彌三郎元芳の住地にして、御油の又五郎殿と云へり。明治二十五年一月町制を布く。好色一代男(二)さらばの島に別れて、日数程ふり、御油赤坂の殿女に、なほかり枕泊り(一)に有程に、色よき袖を垂て、やうく駿河の國、江尻といふ所につきて。

古邑

朝鮮總督府鐵道京義本線の一驛(明治四十一年設置)。朝鮮平安北道定州郡葛山面にあり。

小餘綾・小洵綾

五小郡・瓦山留木にも作る。神奈川縣相模國中郡大磯・小磯一帶即ち和名抄の餘綾郡伊藤郷の海濱をいふ。コロギとも訓む。萬葉集に全呂伎濱といふも之に同じ。また小餘綾濱ともいふ。東海道名所圖會に「小餘綾濱、酒匂より大磯までの磯邊をいふなるべし、方角抄には、大磯・小磯のほとりと記せり。鎌倉志には、腰越と七里ヶ濱との間を小磯とあり」と見ゆ。風光明媚にして古來より歌枕として知らる。古今・鐘上・玉だれのこかめやいづくころぎのいその波分け沖に出でにけり。後撰・戀三・君を思ふ心を人にこゆるぎの磯の玉もや人もからまし。

五葉山

北上山脈に屬する一峯。釜石市の南西一六軒、岩手縣氣仙郡上有住村・日頃市村・唐丹村と上閉伊郡甲子村との

田地は多く他町村地主の所有なる點は本村にとり重大なる關心を拂ふ要ありと思はる。養蠶・養蠶・蠶工品の産多く村當局に於てその改善發達に努力しつゝあり。本村は推古天皇御宇に開かれ、後小松天皇應永六年子吉修理進本村を領し子吉館に住す。元和八年本莊城主六郎兵衛頭領となる。明治四年本莊縣に編入され、次で秋田縣の管轄に屬す。古來産石多きより小石と稱し、由利十二黨時代に石を吉と改め、子吉修理進の領するに及び子吉と改稱さる。明治五年頃元結川郷に屬せし宮内村を併合し、その後養蠶業・埋田・宮内・玉ノ池・高法・船岡・藤崎・海士別れの諸村の八ヶ村戸長役場となり、明治二十二年町村制實施に當り海士別は西日村に編入、残り七ヶ村を以て子吉村となす。本村養蠶部正業寺境内に養蠶明王の像あり、寛政年中金峰山正業寺九世の僧弟子唯心、鐵樓建設寄附勸誘中、大佛師春日運慶の作、金剛界大日の尊像海中より出現せりとして寄附を受け安置、守護中個々老婆の何れよりか現れ、「我は唯心僧の持參せる像の一體分身なり、遂かに此旨住僧に告げ大日像を我が腹中に納むべし、然る時は汝の願望成就せん」との靈夢あり。因つて養蠶明王の像を彫み、大日の尊像を腹中に納め之を祀る。のち紙蠶・安産・良縁の願望にその靈驗顯著なりとして遠近參詣する者甚だ多し。

子吉川

主として秋田縣山形郡内を流

走する川。流長約六〇軒。鳥海山東麓各の諸水を集めて水脈をなす。即ち次郎瀧・赤瀧の水を集めて赤澤川となり、三瀧山(九八六・四米)より發するものは上玉田川となり、此の二水合流し更に下玉田川を入れて鳥海川となる。朝日森(六二二米)より發する直根川ありて鳥海川に入る。山形縣最上郡及位村飯峠(七五一米)附近より發する飯川あり、他の小川をいれ籠子川となり、西北流して鳥海川と由利郡川内村に於て合流す。これより子吉川と稱して本河川の本流をなし、之より山地の断絶部を曲流して西北方に流路をとり、結川村にて結川を流れ、支流高瀬川と合流し、本莊平野を流れ下流にて支流芋川を合す。これ等本支流の流るる地域は郡内の主たる地域を含み本郡の主水脈をなす。本流の上流に矢島町あり、舊城下町にして山間の名邑たり。河口に本莊町あり、舊城下に加ふに河口港をなし往時甚だ賑へり。本河川は灌溉に利用せらるのみならず水産多く、殊に矢島町・結川村を中心に結の産者ばる。その大なると味よきを以て知られ遠くより釣竿を運る者多し。舟運は高瀬川の合流地より自在なるも、上流は増水期を利用して山型船の往來あるのみ。往時米穀の運搬盛なりしも今は稍々衰ふ。筏として木材の運搬盛なり。

小吉川

新潟縣越後國西蒲原郡の東部。中ノ口川

四村境界に跨りて峙つ。標高一三四一米。山體花崗岩より成る。頂上の西南面に五葉神社あり。大同五年坂上田村麿の建立にかかると傳ふ。この山の二三〇米以上の上部は僅松蔓延し、山頂一等三角點迄一面僅松の海をなす。僅松は一名五葉松と稱する故、山名出づと。

五葉山

九州山脈に屬する一峯。大分縣との縣境に近く、宮崎縣東臼杵郡北川村と西臼杵郡岩戸村との境界に峙ち、標高一五七〇米。山は壯麗なる原始林にて掩はる。

子吉

秋田縣羽後國山形郡の中央。子吉川下流を占む。西南は山地に圍まれ北は本莊町、西は西日村、南は結川村、東は子吉川を隔てて小友村の各町村に接し、謂はゆる「本莊米」生産の沃野を擁せり。子吉川下流の曲流部に接する地域のため沖積層より成り沃度大にして且つ山地に池沼多き爲、灌溉に便なる等の事の爲、純農村として發達を遂げしものなり。縣道本莊矢嶋線は本村を通り子吉川河岸の段丘上を過り滑道に街村を見る。省線矢嶋線及び羽越線本村を通り殊に矢嶋線は便益を興へ村内に養蠶業・子吉(何れも大正十一年設置)の二驛を置く。耕地整理よく行はれ米産大にして縣外への販路廣し。蔬菜の栽培亦盛にして花卉との風流本花町への出荷大なり。大豆・小豆の産亦多し總じて水田耕作中心なれど、その

の左岸にあり。北は大原村、西北は道山村、西は松長村及び小中川村、東は月湯村及び對岸の中蒲原郡新飯田村に界す。全村殆ど水田にして米の産多く、養蠶また行はる。社線新潟電鐵道線に沿ひ、縣道また四通して交通便なり。本村はいま柳山・杉山・杉柳・道金・八王子・小池・小圃・大圃・藤柳・大圃の十大字より成り、柳山に役場を置く。

吉吉野村

岡山縣美作國勝田郡の中部。津山市を距る東方約一二軒、吉野村の北、北吉野村の南にて、東は勝田村、西は植月村に隣る。面積五・三二平方軒の小村。中部以北と東邊とに山林多きも、中部には平地ありて田畑よく拓げ主産物に米・蕎麥等あり。省線新線勝田田驛へは西南約七軒を隔て交通なほ便利ならず。この地は北吉野村と共に、和名抄勝田郡吉野郷の地にして、圓覺寺文書に、貞治三年、美作國小吉野庄、眞梁村領家得分内十貫を正續院に寄附の事あり、貞治年間小吉野庄と稱せられし地にして、村名は庄の遺稱なるべし。

瑤瑤水道

北海道根室郡根室沙布岬と水晶島との間にある水道。根室半島を廻航する船舶の航路なり。水道の東側七・三軒の間、カイガラ淺灘横はり危険多く、又五・六月の交、南風起る時は、濃霧を生じ咫尺を辨せず。且つ海岸に險礁散在するを以て、舟子の殊に警戒する所なり。水深は水道の中央

に於て五六米乃至七五米、兩側は一六米乃至二九米なり。漲潮は、中央は南流し兩側は支流を起し、激しき渦流を生ず。

古里村

東京府武藏國西多摩郡の北部。東は成木村・三田村、南より西は水川村、北は埼玉縣入間郡名栗村と隣す。關東山脈中の一部を占め、西麓は川乗山(一三六四米)及び一二二五米の山地あり。北境に柳ノ嶺(九七六米)、東境に高木山(七九三米)・惣岳山(七四二米)あり。何れも村内に向ひて急傾斜し、南部を東流する多摩川の谷に臨む。川の南側は村の南端三田村内にある御嶽(一〇七〇米)の山裾を占む。多摩川はこれら兩山地の間を窮谷をなして流る。山地は何れも森林多く畑あり、養蠶行はる。川に沿ひて府道あり。水川村に通ず。他は東部に村道あるのみにて交通不便なり。この地は近世、多摩郡三田領に屬し、大字丹三郎村は明應・天文の頃に原島丹三郎友達なるもの住せしより村名となりしといふ。丹三郎友達は武藏七富の内、丹之黨丹貫主筆時の後裔なりといふ。即ち明應・天文の頃は原島丹三郎の領せし地なるべく、水津の頃は野口利部秀領せしと。徳川氏關東入國の後には幕領となり、正保の頃は高室喜三郎代官となり支配し、のち小野田三郎右衛門の支配せし地なり。大字梅津は楢保庄の内に屬せりと。何れの頃よりか上下二村に分てり。この地も古より幕領にして、正保の頃は高室喜三

IKROM

邸支配せしが、のち小野田三郎右衛門の支配地となりし地。寛文八年に曾根五郎左衛門の捨地ありしと。大字白丸も楢保庄に属し、古より幕領にして正保の頃は高室三郎の支配地たり、のち小野田三郎右衛門の支配所たりし地。大字細澤は近世、石井相馬保正に属す。細澤とは蓋し此の地に多名神祇あるにより起りしといふ。徳川氏關東入國の後幕領となり、寛文八年竹村兵衛の捨地ありて高室四郎兵衛支配し、のち代官交るる支配せり。大字小丹波は楢保庄に属す。この地は小田原北條家に仕へし原島丹三郎友達の子孫の開墾せし地なりと。徳川氏關東入國の頃より幕領となり、のち、小野田三郎右衛門の支配せし地にして、寛永八年竹村兵衛の捨地ありしと。大字大丹波も楢保庄に属し、多摩川の支流、大丹波川に沿ふ。北に廻行すれば柳ノ嶺、西北行すれば川乗山、東行すれば高木山・惣持山に至る。この地徳川氏關東入國の時より幕領にして、寛文八年曾根五郎左衛門の捨地し、その後伊奈半左衛門の支配の頃、延享年中、田安家へ賜はりし地なり。大字川井も楢保庄に属し、徳川氏關東入國の頃より幕領たり、代官交るる支配せし地にして、寛文八年に曾根五郎左衛門の捨地ありしと。この地の小名尾崎に楢地あり、承平年間、平將門、細澤に來り住し、その頃將門の従者尾崎十郎といふもの、此處に楢を植

へて警衛せりと傳ふ。故に今に至るも尾崎といふ。(松ノ湯温泉) 御嶽を距る約二・七軒。アルカリ性硫黄泉。加熱を以て松ノ湯と名づく。胃腸病・神経痛・婦人病等によろし。附近に射山溪・武州御嶽山・數馬の奇景・鳩ノ巣等の探勝地あり。

コリ 栢里面 朝鮮平安北道豊津郡の南部。東は龍山面に、西は延山面・寧邊面に、北は古城面・南新面に夫々隣接し、南は清川江を隔てて平安南道价川郡に境す。東北境に耳山(五四二米)峙ち、その餘部内を縱横に走り散れ山地を成し、其間諸所に低地ありて僅に耕地拓くのみにて産業見るべきものなし。主生業は農にして米・麥・大豆・小豆・綿等を産す。三等道路、面の中部を西南より東北に走り、これより分岐せる等外道路南方に走るのみにて、交通は未だ便ならず。

コリカワ 是川村 青森縣陸奥國三戸郡の東南部。八戸市の南に隣り、東は大館村・階上村に、南は島守村・中津村に、西は田部村・館村に接し、面積二三・四方軒餘を有す。北は山北郡の丘陵地帯に属し、南より北に緩慢に低下し東西に波状をなす。新井田川、南隣島守村より東に中部の谷地を北に流れ海岸に多少の田地拓く。村内多くは山林にして畑地これに次ぐ。米・林産品等を出す。八戸街道村の東境に沿ひて南北に通

じバスの便あり。古くは記録の微すべしものなきも、此地に石器時代の遺蹟あり、風くより開けし地なるを知る。善政の頃は八戸藩に属す。(是川石器時代遺蹟) 字中居、泉山栗次郎氏邸内にあり。津輕式土器・土偶・石器・玉器・骨角器等多数の遺物を出土せり。製作は優秀、特に注意すべきは漆塗器弓・白木弓・漆塗器木太刀・篋狀木製品・漆塗木製容器・漆塗織物製容器(藍胎漆器)・漆塗櫛・耳飾・漆塗木製陶環等の植物性遺物のあることなり。遺物の主要なるものは重要美術品に指定せらる。ここより四〇〇米南、清水寺の裏手、字一玉寺の畑地にも遺跡あり、別箇の土器を出し、貝殻・骨角器・人骨等あり。是等の遺蹟より発見されし遺物は、悉く泉山郷と八戸市の泉山岩次邸内に保存陳列せらる。

ゴリョー 五柳 朝鮮總督府鐵道全羅線の一驛(昭和六年設置)。朝鮮全羅北道任實郡善善面にあり。

ゴリョー 五龍川 朝鮮咸鏡北道にある豆滿江の支流。慶興郡の西部に西流して鏡城郡に入り、これより北流し、龍溪面の中部にて西方より來れる小支を合せ、更にこれより東北流して慶源郡に入り、東原面の東南部にて豆滿江に入る。流域約七〇軒。中流以下は兩岸低平にして廣大なる平野ここに拓け、舟楫の便あり。

ゴリョーカク 五稜郭 省轄南前線の驛(明治四十四年設置)にして省線上磯嶺の起點。北海道渡島國龜田郡龜田村にあり。明治元年榎本武揚・大島圭介等が立籠りし有名な五稜郭の址は前市内龜田町とす。

ゴリョーガシマ 五領ヶ島村 福井縣越前國吉田郡の北部。九頭龍川の右岸、松岡町の北。面積四・〇五方軒の小村。九頭龍川沖積平野にして水利よく水田開け米産多く、また粗織物を産す。社線越前電氣鐵道の松岡驛に近く又社線永平寺鐵道の樂間・板倉兩驛へも村境より一軒前後にて達す。本村はいま上合月・下合月・木政・兼定島・渡新田・楯爪・領家の七大字より成り、楯爪と領家は九頭龍川支流の北にあり。古くは上・下合月及び木政の三大字を以て五領ヶ島と稱し、兼定島と渡新田は支流の右岸に位置せり。當時の支流の位置は今と頗る異なるものにして、現今の支流は寶曆年間、川脈を生じ、寛政元年八月十四日の洪水に耕地を流出して生ぜしものなり。渡新田は本郡中島島村新田より渡り來て、郡

コリョー ドー 栢柳洞 朝鮮總督府鐵道京仁線の一驛(明治三十二年設置)。朝鮮京畿道富川郡桂南面にあり。

コリョー 五領村 大阪府河内國三島郡の東北部。大阪平野東北隅の一部を占め淀川の西岸にあり。高槻町の東に隣り、北は島本村に接し、東は淀川を隔てて北河内郡榎葉村・殿山町に界す。西北隅に四〇〇米程度の山地ありて東南方へ略々扇形に緩く傾斜する外は、淀川沖積平原の一部にて土地極めて平坦にして東境に淀川西南方へ流る。淀川川筋には低湿地あれど、低地はよく耕作行はれて、河内米なる良米を産す。交通極めて便利にて淀川水運を初め、西北山麓に沿ひ東海道走り、之と並行して省線東海道線・社線京阪電鐵新大阪線東北より西南方に通じ、西南約三軒に東海道線高槻驛あり。村は福原・萩之庄・井尻・鶴殿・上牧・神内・前島の大字よりなり、福原に役場を置く。村名は藩政の頃この地に高槻藩主水井氏及び島丸大納言その他三人内は建武中興の前使しば、兵亂の巷となりたる所にて、殊に文和四年足利義詮と山名師氏と戦を交へ、山名氏敗戦せし處。書紀安閑元年紀に天皇三島に行幸あらせられし時、三島縣主飯坂上御野・下御野の地を獻するの記事あり。上牧は即ち上御野の地ならんといふ。鶴殿に産する鹿は鶴殿鹿として筆貨の貨として古來名

落を成せしものなり。五領の名は御陵より來りしものにして昔は御陵ヶ島と稱せり。明治になりて建設されし小学校の名稱は、一を兼定といひ、一を陸西といひしが、今は兩校を合併して御陵小學といふ。大字領家の九頭龍川堤の廣場にて毎年盆の十六日に相撲行はる。然し近年は二・三年毎に行はるといふ。この堤は九頭龍川の氾濫により度々切れて、これより西方の坂井郡の住民の被害甚大なりき、種々協議の末人柱を立つることとなり、或日治水工事せしところ來りし一人の策を捕へてこれを人柱とすることとなれり。然るに策實は、自分は相撲を好む故、自分の埋めらるることにてのちの是非相撲をして失れ、と言ひて埋められたり。この人柱故にか、のち堤の切るる憂なくなりしと。依りて村人は堂を建てて策實の冥福を祈ると共に毎年こゝにて相撲を催し來れりといふ。

コリョーモリ 御靈林 京都市上京區鞍馬日通寺町西入上御靈神社の附近に在り、相國寺の北に位す。應仁の亂の尋火線とも云ふべき小靈合、即ち御靈林のありし處。

コリョーヒツ 御靈嶺 郡山市の西方約一七軒、猪苗代湖の東岸に位し、福島縣安積郡多田野村と月形村との境界に跨る嶺。最高點八七六米。維新の際官軍は板垣氏を參謀として此地に攻め來りしかば、會津藩は砲兵隊をして守

コリョー 御領村

高し。高嶺・龍紙王「うどのの廣の露分けて旅衣きん野の雲をたどり行く」
コリョー 御領村 熊本縣肥後國天草郡天草下島の東岸。北隣に鬼池村あり、南隣は佐伊津村にして西は手野村・城河原村と界す。面積一・五二方軒。全村五〇一〇〇米程度の丘陵起伏し、中央東部及び東北部に低地開け島原海灣に臨む。東北岸に長崎鼻の突出あり、その北に龜島の小島あり。主生業は農業にして全戸数の七割八分を占め、其他商業五分・工業六分・漁業四分の割合にして昭和十年に於ける主産物の年産額左の如し。農産二六萬圓、畜産三萬五千圓、工業二萬八千圓、水産三萬五千圓。農産内譯(米)九萬二千圓・麥(七萬四千圓)・甘藷(三萬二千圓)・繭(三萬五千圓)馬鈴薯其他(六萬圓)。特産物には和船(木造)・灰石・ケレンシヒス・茂木枇杷等あり。縣道は西隣手野村・城河原村を南北に走り、之と村道によりて連絡し中央東海岸の主邑御領村に道路集まる。聚落は多く海岸にあり。本村の名稱の起原は成務天皇五年九月、神皇命十三世の孫、建島松命、天草國造に任ぜられ船にて下向し給ひ、本村に上陸し城の木場(現在本村の隣村、城河原村)を國府と定められ、永らく本村その地領たりしにより、御領の名起りしと傳へらる。上古は斯くの如く建島松命の國造として下向以來その地頭となり、室町時代の末葉に家族絶えし

て威勢を振ひしことあり、往年の城址等あり。萬治年間檢地あり。大庄屋配置され長岡氏本村にあり、附近を統治し、以て明治に至り、二十二年町村制施行に當り御領村となる。小山平兵衛(安政の頃の實業家)・石本平兵衛(天保の頃の實業家)・池田實之丞(和算學者)・西道後(勤王の志士、高山彦九郎の勤王の友)は本村出身なり。

コリョー 御靈村 和歌山縣紀伊國有田郡の西部。有田川の南岸にして西南部は湯淺町に接す。西は藤並村に、北は有田川を隔て、島屋城村に、東は石垣村に界す。面積三三・〇〇米程度の峯を連ねあり、西境に約三三〇〇米程度の峯を連ね其等は北部及び東北部へ傾斜し、東部は約一〇〇〇米程度の臺地をなし、北部には低地開け有田川北流に西流す。臺地及び山麓處々に湖沼あり。低地及び臺地は耕地よく拓け臺地處々に蜜柑の栽培行はる。縣道は西方箕島町方面より北部低地を東走し、社線有田鐵道その北に走り東北隅に終點釜屋口驛(大正五年設置)、北西部に御靈驛(大正五年設置)あり。村は庄・東丹生岡・西丹生岡・垣倉・吉見・徳田の大字よりなり、庄に役場を置く。村名は大字徳田附近の古名御靈野に起因せるもの如し。大字吉見に義有王を葬り奉る地なりといふゆかんととの森あり。(大乗寺) 大字徳田にあり。淨土宗。陀藏尼山と號し、永祿十二年法山の開基に係る。

コリョーヒツ 御靈嶺 郡山市の西方約一七軒、猪苗代湖の東岸に位し、福島縣安積郡多田野村と月形村との境界に跨る嶺。最高點八七六米。維新の際官軍は板垣氏を參謀として此地に攻め來りしかば、會津藩は砲兵隊をして守

コレ——コロモ

らしめたりしが、官軍は防備薄き幕成の地より攻入り、會津藩の敗戦となれり。

コレ——社 臺灣新竹州大溪郡の舊社。大崎溪の上流山嶽地帯の善界にあり。

コレ——古禮山 關東山脈秩父山塊に屬する一峯。山梨縣東山梨郡三宮村と、埼玉縣秩父郡大滝村との境界に峙つ。標高二一・二米。北西は坂坂峠最高點(二〇八二米)に、南東は笠取山(一九四一米)に連る。山中にツカ・シラヒツ等繁茂す。山名のコレイは方言コレより出でて、コンとは山干瀟を意味し、この山の溪谷にこの植物繁茂する故にかく呼びしを、古禮の字を充てしなりと。

コレカワ 是川村 是川村(青森縣)

コレト 是戸村 富山縣越中國西礪波郡の東部。戸出町の南に接す。西は西礪波郡高波村、北は同郡醍醐村、東は東礪波郡北般若・南般若兩村、南は同郡油田村・戸出町に界す。面積三・六四平方軒。礪波平野の略々中央部に位し、庄川より小矢部川に通ずる放水路により灌溉は便にて水田發達せり。主産業は農業とす。省縣中越前村の東部を通り、戸出驛に近し。往古の事は以て微すべしものなきも、中世は是戸郷と稱せられたり。いと同御所・光明寺・竹・竹北・放寺・六十歩・行儀・延島・放寺の九大寺より

なり同御所に役場を置く。

コロ——社 臺灣臺北州蘇澳郡の舊社。蕃稱 Kolo。大湖水溪上流の山地善界にあり、アマヤル族中の南澳蕃に屬する高砂族の部落。昭和十一年末現在、戸數二二、人口一三一。

コロ 葫蘆島 關東州長山列島西端の小島。廣鹿島の西北約二軒にあり、長さ一・五軒、幅廣さ處にて〇・八軒。最高點は西部にあり、六五米に達す。定住者なく、廣鹿島會に屬す。

コロ 古老面 朝鮮慶尙北道軍威郡の東部。西は義興面・山城面に相隣り、東北は義城郡・青松郡に、東南は永川郡に接す。北東部の三面は何れも三―四百米の諸峯を以て圍繞され、中部より西に亘りて低地あり。洛東江の支流渭川東南部に發源して西北流し、この低地を灌溉し耕地拓く。然し耕地面積狭きため産業比較的發達せず。僅に米・麥・粟・棉・豆類を産するのみ。面の西部を二等道路南北に過ぎり、バスを通じて交通の便よし。

コロ 五郎 愛媛縣喜多郡大洲町の大字。省線豫讃本線の驛(大正七年設置)あり。

コロル——島 Koral 南洋羣島パラオ支那管下の小島。パラオ諸島の主島パペルダオ島の南岸に近く、これと隔狭く水淺きオーグタルゲル水道を隔て、西南はワトラフジナル島、西北は

衣

アラカヤサン島と相對す。安山岩を基礎とする火山島にて、西部は珊瑚礁によりて生じる石灰岩にて蔽はる。西岸にコロル池あり、港岸には南洋廳・パラオ支廳・産業試験所及び無線電信局等あり。西南約四〇哩に橋を以て著名なるアンガウル島を控へ、また西方遙にフィリッピン群島、西南方に蘭領セレベス島、南方に蘭領ニューギニー島に對し、南洋廳管内の政治・交通上の中心地をなす。

コロト 葫蘆墩街 臺灣臺中州豐原郡豐原街豐原の舊名。大正九年地名官制改正に依り改稱せらる。もと平埔蕃バセツへ部族中の岸裏社(今は岸裡と書す)の地に屬し、同蕃語にてフルトンと呼びしより、葫蘆墩は之に宛てたる近音譯字なりと云ふ。清の乾隆初年、閩の漳州府詔南の人、廖舟に依りて開拓の端緒を開かれ、初めは岸裏新庄と呼ばれ、高慶の頃より葫蘆墩と稱せられたり。

コロフジ 頃藤 上小川村(茨城縣)

コロベーションテン 五郎兵衛新田村 長野縣信濃國北佐久郡の中部。小諸町よりは南、岩村田町よりは西各約六軒を隔て、東は中津村、西は北は南御牧村、東南は南佐久郡野村に隣接す。面積四・二一平方軒の小村。佐久平の西部に於て南より北に緩く傾き、北半は平坦にして田畑拓げ、南半は丘陵性にて原野・山林をなす。米の産多く養

殖行はれ、また瓦・藥用人蔘の産あり。縣道東西に貫き東は岩村田町、西は南御牧村・本牧村方面へバスの便ありて交通不便ならず。

コロモ 衣 【衣里】 三河國(愛知縣)加茂郡の歌枕。和名抄賀茂郡母郷の地、即ち今の西加茂郡母郷町の邊を稱せしものなるべし。設・梅・櫻・卯花・鶯等の名所たり。千載集「立歸り尙見て行かむ櫻花ころもの里にほふさかりを 貞武 夫木集「白たへにさかさなれる卯の花はころものさとのつまにそありける 忠隆」同・三一「よよをかきね山立出て時鳥ころものさにときつつなくなり 俊盛」

【衣瀧】 歌枕。山城國に二箇所あり。一は葛野郡の雙丘の東南花園の邊とし、一は相樂郡坂原村大字西の邊となすも何れとも定め難し。夫木・體八「いはばしる音はかくれぞ夕霧の衣の瀧をたちこむる」とも、中納言國信卿

コロモ 母母町 愛知縣三河國西加茂郡の南端。北は保見村・旗投村に、東は矢作川を以て高橋村と境し、南は碧海郡上郷村・高岡村・富士松村に、西は愛知郡長久手村・日進村・東郷村に隣接す。名古屋を距る東二〇軒の地に位す。町の三方には木曾山脈の餘派の川六米餘の丘陵地起伏し、東境には矢作川南流せり。北境に於いては龍川・矢作川に合流し、西部丘陵地には灌溉用貯水池多し。丘陵

の細谷には水田延び、矢作川沿岸は桑園と水田交又せり。農産に於いては米・蔬菜・花卉の産多く、養蠶も盛にして産前の集産地たり。工業にはガラス紡と云ひて水車を動力とする小紡績工場あり、三河木綿・漆類の集産地をなす。北西部丘陵には礫土採取場あり。之は磨砂・ガラス等の原料にして阪神地方に移出せらる。西方丘陵を越えて母母街道を通じ、矢作川を渡り足助方面に至る。三河鐵道は刈谷に分岐し此地より旗投方面に北上し、矢作川中流の交通上重要地にして、土橋・上母母・母母(何れも大正九年設置)・梅坪(大正十二年設置)を置けり。母母は衣母と稱し、和名抄賀母郷の地なり。當地には石銅・石鐵の出土あり、また古墳も發見せられ、勾玉・管玉・甕瓮を出せり。母母の兒子口には落別王墓あり、墳上に兒子口社と云へる小祠を祀る。祭神は落別王にして古來衣君の御墓と云ひ傳ふ。宇野城の地に城址あり。慶長九年、三宅康貞この地に封を受け在城し、康貞に至り、寛文四年田原城に移る。延寶五年、本多忠利居城し、次で寛延二年、内藤政前封せらる。然し水害を恐れて在城二十年にして移城す。いま池臺及び石垣残る。童子山の城址は安永元年の築城にして内藤氏居住せり。大字金谷には外敷の城址あり。室町時代より戦國にかけては中修氏居り、永祿四年には佐久間信盛在城せり。其外、梅坪城址(戦國の頃三宅

氏)宮口の城址あり。内藤氏轉封後、母母には尾張藩三家老の一人渡邊氏一萬石の陣屋ありき。この地に西加茂郡の首邑にして、明治二十五年町制を施さ、同三十九年梅坪・宮口・遺妻・根川の四村と共に廢せられ新たに母母町を置く。警察署・女學校・同隣區裁判所母母出張所・母母土木工區事務所等また大字細谷・下細谷に衣々原飛行場ありて元郡役所所在地たり。〔母母藩〕寛永年間内藤政晴この地を領せしが延寶年間本多忠利之に代り寛延二年、内藤氏上州安中より再び移り二萬石を食み、子孫相承け明治維新に至る。明治四年藩を廢して母母縣を置きしが間もなく額田縣に併合さる。〔崇化館〕母母藩の藩校。天明七年十月創立、初め學館といひ、のち崇化館と改む。明治二年皇道寮と稱し、四年閉寮。五年五月崇化館を以て總校となす。〔長興寺〕長興寺にあり。臨濟宗東嶽寺派。集雲山と號す。創建年代不詳なるも南北朝の初め母母城主中修氏の創建に係るものゝ如し。開基は或は太陽義仲といひ、或は僧春庵といひて定かならず。近世寺領百石なりき。佛涅槃圖一幅(國寶)は絹本着色、三川州高橋庄集雲山長興寺常住應永廿八年丑辛精刻日尊像比丘薩摩の畫あり、その頃の作と考へらる。額田信長像一幅(國寶)は紙本着色、信長像の中に著名のものなり。紙背に元秀の印ありて、狩野元秀の筆と推し得らる。

コロモガウラ 衣ヶ浦灣 愛知縣知多灣の北部をいふ。初め堀川の末なる入江を衣浦と呼びしが、遂にその南の廣き灣即ち知多灣北部の汎稱となれりと。然るに尾張名所圖會には衣ヶ浦は横須賀より南西の海濱なりといひ、宗藏方角抄には鳴海より五、六里辰巳の方なるべしとあり、これに従へば伊勢灣の北部を指すこととなり、詳かならず。和歌の名所「波あらふ衣が浦の袖貝を汀に風のためみおくかな 西行」

コロモカセ 衣かせ山 山城國相樂郡の原泉川の向ふにある鹿背山の一角。古今「九」都いでて今日鹿の原泉川、川風寒し衣かせ山の和歌に起りし名。好色二代男、「入日の岡と思ふ所に、雲とりのうつくしく、衣かせ山に妻鹿のありさま、梅津川のしがらみ、松の尾の佛法僧の鳥も、目に珍敷く」 茨鹿背山

コロモガワ 衣川 〔衣川村〕岩手縣陸中國瀧澤郡の東南端。東南は前澤町及び西磐井郡平泉村に接し、北は小山・若柳の二ヶ村に連り、西南は西磐井郡殿美村に界す。東北本線平泉驛より九・八軒、前澤驛より七・二軒に位置す。本村の山岳丘陵地帯は第三紀層に屬し、構成岩種は主として石英粗面岩質凝灰岩にて、概ね山林をなし耕地として利用さるるもの極めて少く、南股川及び北股川上流地帯に點々之を認むるのみ。洪積層は第三紀層丘陵の麓より低地に向ひ

稍緩なる傾斜をなしつつ其發達を示し本村耕地の大半は此層に屬す。沖積層は衣川本支流域に沖積せられし地帯にて洪積層より一段低く、僅に河床に近接し帶狀に分布す。本村の主産業は農林業にて米(六六六一石)・麥(八〇八五石)・大豆(九八八石)・蕎麥(七〇三貫)・木炭及木材(六五〇六三圓)等を産し、また工業として漆器(衣川塗、六七二〇圓)・木製品(八二五圓)・竹細工(一四八六〇圓)等を出す(昭和十一年)。これ等物産の運送は貨物自動車・馬車・駄馬等に依るも、村内は坂路多く、雨雪の際には甚だ惡路となり、交通を阻むこと大なり。木材等の搬出は衣川の水運による便あり。道路の主なるものは前澤より石生へ、石生より下衣川を経て國道へ、石生より北股及び南股等へ至るものあり。本村の名稱は其起原所不詳、或は往古、水源なる高橋王山の五輪谷上(高さ三〇米)に天人降り天の羽衣を乾したるより起るといふも一の傳説たるに過ぎず。「袂より落る涙や陸奥の衣の川といふべかりける 讀人知らず」と和歌を刻みたる石ありしが、今や磨滅してその痕を留めず。永承年間安倍氏八十年間居城を構へ、安倍氏降りて平泉藤原氏の版圖に歸し、市場並に物見の場・接待館等の設けあり、頗る殷盛を極めしものゝ如し。藤原氏滅びて天正十八年までは葛西氏に歸し、同十九年伊達正宗の對内に屬し、明治元年十二月直轄とな

コロチ——コロチ

IKORU

る。明治二年豊原に属し、同四年一關縣に属せしが、同年十二月水澤縣と改稱し、八年磐井縣と改め、明治二十二年町村制施行に當り現衣川村となる。〔衣川橋址〕下衣川宇川西小字館にあり、安倍氏の居館なり。西に八千坂・月山の天輪を控へ、東西南の三面は衣川にて閉む。其橋外に櫻數千株を植ふといふ。故に此地を並木屋敷ともいふ。永承中、安倍頼時、貞任と共にここに據り亂をなし、

浪の音にも聞きし菊川の菊は世に似ぬ色香なりけり。北の方(衣ノ瀧)源は何なるらん白雲の衣の瀧は涼しかりけり。浪人不知(菊ノ瀧より約一二軒の上流にあり、直下一五米、落懸山谷を振盪するの壯觀なきも、千尋の素龍香埃に懸り、萬丈の錦河、翠橋を傳ふるの眺めあり、其飛沫となり雨となり涼々として深潭に落つ。傍に壺の如きあり、水湛へて壺の如し、俗に壺壺といふ。(陣場)康平年中、源頼義安倍氏征討の時陣營を構へし地。後年伊達家の士卒銃術を練習せるにより織堀場ともいふ。其西方樹形森は鐘樓のありし址也。此鐘樓は平泉の塔山の北にあり、鏡ヶ岳より軍令を受け、順次傳へて外濱に至れるもの。(接待館址)神明神社の北東にあり。東西一六米、南北五六米、藤原秀衡の母深く佛法に歸依して、慈善のため往來の旅人を接待したる所。〔舊市場の跡〕安倍氏全盛の時、道路を狭めて宿場を設け、上の宿・下の宿と云ふ。藤原氏時代に至りて六日市場・七日市場と變じたりと。その外八日市場・十日市場等あり、何れも今その名傳はる。〔古穴屋敷〕下衣川にあり。三條吉次信高の宅址。東西一〇〇米、南北八七米、四隣水田に接し礎石今尙存す。後人、長者原といふ。吉次の父を藤太といひ、陸奥栗原郡金成村の人。三子あり、吉次・吉内・吉六といふ。長子吉次、性謙敏、商を好み平泉府に出入す。秀衡風にその敏

捷を愛し、命じて應用を辨せしむ。其母京の産なるを以て、砂金を托して京洛に需しむ。吉次大いに利する所あり。爾後往復斷斷なかりしと。斯くて公侯の門に出入し、金貨吉次の名、京洛の間に噴々たりと。時に牛若丸之を聞き、密に托して平泉に來たれるなり。(琵琶橋址)衣川の西南、大手先の前にあり。衣川の流域周圍を築回し、その地形琵琶に似る。故に此名ありと。貞任の庶兄成道の居城たり。(小松橋址)安倍貞任の弟境講師菅原の居館。衣川橋の東南に位す。康平中、安倍氏の一族滅ぶに及び廢城に歸せしが、其後、葉石又三郎、城を此地に構へ天正年中まで居住すといふ。(一首坂)村役場右側の前澤に通ずる坂道。源義家安倍貞任と戦ひ、貞任敗れて軍騎馬に墜ち逃れ此の坂に至りし時、義家が後より「衣の館は綻びにけり」と呼びかけしに、貞任唯唯の間に「年を經し糸の亂れの苦しさ」と返しければ、義家之に感じ、敢て進はざりしとぞ。この故事より一首坂と稱へりしが、後世に至り石生坂に轉訛せり。

歌枕の名所として知られ、養・夕立・櫻・露・五月雨・水・水鳥・鶯・若・松・關等の名所たり。新古今集「ころも河みなれし人のわかればはたもとまでこそ波はたちけれ 重之」續現業集「けふもまたかさなるくもの衣川波たちまさるさみたれのところ 前關白」

コロモサキ 衣前

愛知縣橋豆郡にありし村。明治三十五年本村及榮生村・一色町・味津村・五保村と共に廢せられ一色町を設く。

コロモテ 衣手

伊勢國河藝郡とも、又三河國西加茂郡ともいひ、何れも詳かならず。夫木・維九「ころもての山の麓にたつ鹿のうらさびしきばあけほの聲 神祇伯願仲卿」

衣手

山城國葛野郡の古地名。和歌の名所に於て、衣手里・衣手森などといふ。地はいま京都市右京區松尾町の邊りか。鶯・落葉・霜・松・風・森・野・關等の名所たり。夫木・維一三「かたしきの床の初霜色に出でて夜な夜な消ゆるころもての里 正三位知家卿 同「夕さればみねのまつかせおとつれて紅葉ちりしくころもての里」同・一五「たつた秋のみけしやこれならむもみちかざれの衣手のもり爲氏」

コロモノコノタエマ 杉子斷間

日本書紀に見ゆる河内國の古地名。仁徳天皇の十一年十一月、美田堤を築く際、

堤が潰潰し寒き難き爲め河伯に犠牲とし河内人美田連杉子と武藏人強頭を捧げんとす。強頭は泣きて其犠牲となりしが杉子は奇習により二箇の袖を以て身替として難を免かる。その折葉かれし堤を杉子の斷間、強頭斷間といふ。その地今詳かならざるも、いま北河内郡友呂岐村の大字に太閤あり、蓋し斷間の遺稱ならん。日本書紀・仁徳天皇「冬十月、天皇宮北之部原、引南水、以入西海、因以號其水曰、堀江、又將防北河之湧、以築美田堤、是時有雨處之雲、而乃築之難、時天皇夢、有神告之曰、武藏人強頭、河内人美田連杉子、杉子、此云宮呂母能古、二人以祭於河伯、必獲其家、則夏二人而得之、因以壽子河神、爰強頭泣悲之、没水而死、乃其堤成焉、唯杉子取全強頭、強頭壽子壽其水、乃取兩袖、投於水中、謂之曰、河神堤之、以吾爲幣、是以今吾來也、必欲得我者況是強頭、而不合、況、則吾知河神、親入水中、若不得、況強頭自知爲神、何徒亡吾身、於是颯風忽起、引強頭、水、強頭浪上、而不沉、則瀟々汎以遠流、是以杉子難不死、而其堤且成也、是因杉子之幹、其身非亡耳、故時人號其兩處、曰、強頭斷間、杉子斷間也、是歲新羅人朝貢、則勞於是役」

コロモノサキ 衣前

陸奥國(宮城縣陸奥國)の古地名。和名抄に陸奥國榮田郡衣前郷と見ゆ。その地いま詳ならず

コワ 五和村

大分縣豊後國日田郡の西部。日田盆地西南隅の部分に互り、筑後川上流の南岸を占む。東北筑後川を隔て、日田町と接す。北は川を境に先岡村に、東は高瀬村に、南は前津江村に隣り、西は福岡縣浮羽郡治村なり。南境に八一〇〇米程度の山地あり全村山地多く起伏し、北境に筑後川西流し東北部に日田盆地の西南部の低地開く。この低地に耕地拓け米・麥等を産すれど、平地少き爲め産額多からず。縣道は川の南に之と並行して走り西北方甘木町方面より日田町へ通ずれど交通不便ならず。此地は即ち和名抄、日高郡石井郷の地とす。延喜式に見ゆる石井郷(豊後の初郡とす)もまた此地にありしもの。豊後風土記に據れば昔此村に土蜘蛛の堡あり、土を用ひずして石を用ひたり、故に石井と名付くと見ゆ。明治二十二年町村制施行の際石井・小山・堂尾・内河野・川下の五村を合し、これより五和村と改む。いま夫々大字名に残り、大字石井に役場を置く。〔穴觀音古墳〕指定史蹟。内河野倉岡、原にあり。外形は楕円形古墳にて、石室は羨道部破壊され玄室と前室遺る。兩室共に壁面に赤及び緑の二色の顔料を以て同心圓・螺旋等の文様を描く。後世玄室の奥壁に近く石造觀音像を安置し穴觀音と稱せり。尙この古墳より南二軒半街道に沿へる松尾社と呼ぶ社は下の病に

驗ありと云はれ、木製シシガ多く供へらる。(長信成)支吾又は九郎と稱し、櫻岡或は三春と號す。本村石井に生れ、人となり機略に富み、氣概あり且つ辯才に長ず。幼にして廣瀬淡窓の門に學ぶ。父善右衛門の頃より長三州その他勤王志士に交り、家業を顧みず利意を度外に置き、同志の諸費多く其手に負擔せりと。松方正義日田縣知事となるに及び、史生に任命され、中村元徳・三松省三と共に日田の三村と稱せらる。明治改革に當り、縣民各地に動搖あり、三年政略、日田の兩地亦暴民蜂起し、其數一萬に達す。信成之が鎮定に向ひ、暴徒の爲竹槍に突かれて死す、時に十一月十八日。近親帆足十左衛門、危險を冒し死屍を運び、隈町西光寺に假葬す、享年三十四。贈從五位。

コワイ 社

臺灣高雄州潮州郡の壽地。潮州郡最南部にある高砂族部落なり。パイワン族の中にサアアと稱せらるる一群に屬す。一般には恒春下番と稱せらる。戸數一四、人口六〇。

コワクタニ 小湧谷

神奈川県相模國足柄下郡温泉村の地名。箱根七湯の一。一に地獄と稱せしが、往時明治天皇宮ノ下へ行幸し給ひし時、現今の稱に改む。神山の支峯蓬萊山の山巔に位し、海拔五七六米。近景に北條氏の城址鷹ノ巣山及び淺間山、中景に早川の深き溪、遠景に外輪山の明神・明星の翠峯横たはる等、眺め佳き山の湯の特色を豊かに備へ、箱

根温泉中最も眺望に優れたる地をなす。附近に櫻樹・藤樹・楓樹多し。櫻は明治二十年代に移植せし吉野櫻にて、枝幹漸く時代を加へ、東京より季節や遅れて陽春四月より五月にかけて、華に真り、谷に連り、花の雲をたなびかせて滿山の美を現はし、箱根唯一の櫻の名所をなし、秋は岩廊間・楓樹の蓬萊山及び風來園内に美をほこるあり、夏は標高たかきに依り氣候冷爽、又雨後早川の溪に湧く雲のたつまひ特に興あり。温泉場より約二〇〇米下手の蛇骨川上流に千條の淵あり、千條の淵より鷹ノ巣山・城山・湯坂山道を経て湯本に至る湯坂の遺道遺路あり。これ阿佛尼の十六夜日記に見ゆる湯坂道にして、早川・須雲兩溪谷の風光を俯瞰し、相模灘を一眸に收むべき得がたき尾根づたひの眺望地なり。又附近に笹塚あり、むかし新羅三郎義光奥州へ下向の初豐原時秋に笹の秘曲を授けたる所と稱する笹塚を存す。温泉は新湯にして、今の三河屋主人榎本氏が、いはゆる小地獄の噴氣孔より熱氣を導き來たり湯釜を開きしに創る。無色透明の酸性收斂性鉄質泉にして、溫度二八度。貧血症・胃病・神經諸病・皮膚病・婦人病・リウマチス等によきも、大體は行樂向温泉にして、旅館もまた設備大いによろし。小田原より電車・自動車(約一時間)の便あり。

コワクビ 強首村

秋田縣羽後國仙北郡の西部。東は本郡大澤郷村北ノ

日及び地物川を隔てて刈和野町に接し、西は地物川を以て流川村小種に界し、南は大津郡村に隣し、北は地物川を挟んで華吉川村及び流川村に對す。地物川の曲流部を占むる地域なる故、土地平坦にて田野よく拓け、その間池沼多く強首沼を最大とす。沖積地なる爲め肥沃なり。南部一帯に互り臺地多く、陸軍演習地として利用せられ、陸軍歩兵旅隊あり。此地を中心として大正三年三月十五日強首地震あり、稀有の大震にして被害多かりき。刈和野より八軒、華吉川より三軒餘共に自動車あり。縣道刈和野・龜田線あり。地物川により北部及び西部は舟楫の便を得ること大にて現在貨物の之に由るもの多し。米の産額多く往昔は地物川により土船港への移出多かりしが、今は大曲町に集められ、東京方面へ販路を有す。現在尙ほ地物川により秋田市へ送らるるもの相當多し。大小豆の産多く大根・馬鈴薯亦多し。養蠶行はれ冬季には草履の製作行はる。本村は慶長の始めまで強巻と稱せしに、寛文十一年に強首と改稱せりといふ。抑々本村を開拓せしは永祿・元龜・天正の頃にて、往古此邊一帯は濕地古川の如き土地なりしといふ。慶長七年佐竹義宣公秋田へ遷封さるゝや、木原田村・金山澤村・高城村・強首村・寺館尻引村・大巻村等は佐竹家の所領となりしに、元和八年最上家没落し、同家の所領幕府の引上地となるに際し、江原田村・木

コワクビノタエマ

強頸斷間

寶澤村及び寺館尻引村の半を割き百三段村と替地せられ、又元和九年岩城家龜田に遷封となるや引上地の内戸原田村は岩城家の所領となり、天保三年木實澤村も亦同家の所領となりといふ。明治二十二年町村制實施の際強首・木原田・大巻・九升田・寺館尻引・金山澤の六ヶ村合して強首村となる。本村地獄澤と稱する丘陵上に白岩館あり。明應の頃白岩善左衛門尉の築く所といふ。白岩は小野寺氏の臣にして、天文年中羽根川氏に亡ぼさると傳ふれども明かならず。其後田口氏館に據れりといふも之も明かならず。葦峰山といふ葦の全山を埋めたりと傳ふ山あり。今は葦絶えてなし。人々一本にても得れば幸ありといはれ奉る人あり。村内は石器時代遺蹟に富み、殊に大字強首にて發見されし遺蹟は石器時代人の祭祀のあととして著し。

コワシガワ

コワバル

割肉社

小笠河村 鳥取縣國朝氣郡高野の西南隅。西北は日置村北は邊坂村に、東は鹿野町・明治村に、南は八頭郡の西野村、東伯郡の山鹿村に西は同じく三徳村に接す。村内は中國山脈に屬する山岳重疊し、東の鷲峰山(九二一米)を主峯とし、東南・西境には何れも八一九〇米以上の連峯聳え高峻なる地形をなし北部もなほ一〇〇米餘の高きあり。中央部を南北に溪谷通じ河内川の上

流をなす。東北方鹿野町より来る村道は溪谷を潤り、西南隅附近にて西に轉じ佐谷越を経て西北方の倉吉町に通ず。村の産業に見るべきものなし、従つて人口も一四〇〇餘にすぎず、一方軒四九人を算するのみ、密度の稀薄さは同郡中第一位にあり、此の地は和名抄、氣多郡大坂郷の地なりと、(鷲峰神社) 鷲峰山の西麓にあり。近世、元龜中に藤州の毛利氏再興す。然るに慶長九年、郡主龜井武藏守、故ありて之を燒捨て、祭事を斷絶すること九年、同十九年に子登前守これを再興す、この時に現在の地に社を轉じたり。この神社は三代實録貞觀四年授位の嗣にして、鷲峰山神を奉斎せるものならんといふ。

【權現山】 關東山脈に屬する一峯。八王子市の西方約二七軒に當り、山麓北郡留部七保村と西原村との境界に時つ。標高一三二二米。山中に大宮權現を祀る祠ある故に山名出づ。東京方面より夜行列車利用の週末登山地として興趣深き山にして登山者も多からず。

コング

コング

コング

【權現山】 比叡山脈の一峯。琵琶湖の西岸、滋賀縣滋賀郡和邇村に時つ。標高九九五米。東麓は琵琶湖に濱し、西麓に安曇川北流し、これに沿ひて山路通ず。山頂は廣き笹原にして權現を祀る小祠あり、これは東山麓和邇村宇原原より勧請せしものなりと云ふ。この山頂よりの比叡山の眺めは殊の外美し。登山は西麓坂下より、又は東麓原より行ふ。

コング

コング

コング

【權現山】 中國山脈の西南端に屬する一峯。萩市の南西方約一四軒に位し、山口縣美祿郡共和村と大津郡三隅村との境界に時つ。標高五六〇米。全山石英粗面岩より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

コング

コング

コング

【權現山】 九州山脈に屬する一峯。熊本縣八代郡柿野村と下益城郡年輪村との境界に時つ。標高七四二米。山麓秩父古生層より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

コング

コング

コング

【權現山】 九州山脈に屬する一峯。熊本縣八代郡柿野村と下益城郡年輪村との境界に時つ。標高七四二米。山麓秩父古生層より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

コング

コング

コング

【權現山】 九州山脈に屬する一峯。熊本縣八代郡柿野村と下益城郡年輪村との境界に時つ。標高七四二米。山麓秩父古生層より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

コング

コング

コング

【權現山】 九州山脈に屬する一峯。熊本縣八代郡柿野村と下益城郡年輪村との境界に時つ。標高七四二米。山麓秩父古生層より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

コング

コング

コング

【權現山】 九州山脈に屬する一峯。熊本縣八代郡柿野村と下益城郡年輪村との境界に時つ。標高七四二米。山麓秩父古生層より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

コング

コング

コング

【權現山】 九州山脈に屬する一峯。熊本縣八代郡柿野村と下益城郡年輪村との境界に時つ。標高七四二米。山麓秩父古生層より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

コング

コング

コング

【權現山】 九州山脈に屬する一峯。熊本縣八代郡柿野村と下益城郡年輪村との境界に時つ。標高七四二米。山麓秩父古生層より成る。

コング

コング

コング

【權現山】 九州吾振山塊の一峯。佐賀縣佐賀郡の北方小國村に時つ。標高五八六米。山麓花崗岩より成る。西麓を川上川・南東流す。北方東西に吾振の連嶺を望む。

望を發し、遂に安政年中「百姓をやめて神の御用を勤むべし」との神告を得、直ちに財産を三分し、一分を領主に獻じ、他を村内の貧民と妻とに與へ、自ら六疊の一室に閑居し、爾來死に至るまで二十五年間一歩も外に出でず、たゞ神前に平伏して祈念靜慮し、人來れば神意を語り、去ればまた祈念すること従前の如かりき。世人の喜捨を受けず、守札を下げず、新婦料も收受せざりきと云ふ。かくて明治十六年十月百箇日の修業を了り明朝この世を去るべしと衆に告げ天明と共にこの世を辭す。時に歳七十。「成立」明治十八年組織。當時は神道本局に隷屬せしが、明治三十三年一派として獨立。

び試補の八階に分ち、更に調導以上を正權二級に分つ。同教を奉信する者を信徒とし、更に死生の安心を得て祭祀を委託せる者を教徒と稱す。「現状」教徒、信徒約二百萬を數へらる。教會所一千餘。教師約三千人。「事業」金光中學校・金光教義講究所を設け、専ら青年教師の教育に努む。また全國に組織せられたる青年會は青年子弟の宗教的修養機關なり。なほ將來同教教師たらんとし、高等の學府に學ぶものも尠からず。これがため金光教青年會寄宿舎の設もありて新進の誘掖に努めつゝあり。

コンコ—金剛

【金剛山】 佐渡ヶ島の北方部にある山。新潟縣佐渡郡加茂村に峙つ。標高九六二米。全山雲雲安山岩より成る。【金剛山脈】 近畿地方の中央にある山脈。金剛山(一一二二米)を主峯とし、中央の上火山群、北部の生駒山脈等を總稱す。和泉山脈の東端なる葛城山脈とは千早峠(七七九米)を以て地し、東には奈良盆地、西には大阪平野、北には京都盆地あり。金剛山附近は花崗片岩よりなり。東端は南今市(北葛城郡勢城村)より五條町(宇智郡)に至る南北に直線的なる斷層崖を成し、そこに標高・山田・高天・西佐味・久留野の扇狀地發達す。西端は東麓より復雜にして、階段斷層をなし、持尾—弘川—上河内—東坂まで明瞭な地形を現はし、南方葛城山脈に至りて不明

瞭となる。その西側に加納—水分の線ありて中村の扇狀地を分つ。東西の交通は千早峠及び水越峠(五一六米)により、西方長野野、千早と東方五條町及び西方青崩・富田林町と東方御所町と連絡し得、歴史時代に於いて屢々利用せられたり。中央の上火山群は、南方は竹ノ内峠(二八九米)、北方は大和川の先行性横谷にて隔られ、北方生駒山脈は同横谷以北にしてその北部は木津川中流なる互椋池の低地に低下す。生駒山脈の東側は田原村上田原—南生駒村北谷を結び、その以南は龍田川による南北の構造によりて東方松尾山(三二六米)の洪積層よりなる丘陵と分たる。西側は大和川横谷の出口なる上市村安堂より、恩智神社—北高安村花岡山—牧岡村豊浦—四條堰神社等を結ぶ南北の斷層線により、大阪平野に面す。即ち、生駒山脈は西側に前面を向けたる傾動地帯にして、南北の分水線は西偏す。西側の山麓には扇狀地あるも、他の斷層崖に比較して發達の不良なるは、恩智川その他の運搬力の大なるに因るものなるべし。この斷層崖には必從谷の發達著しく、その水勢を利用する水車の設備により發達せる製糖製鹽業者多し。一際周圍の浸蝕面より高き生駒山(六四二米)は斑岩よりなり、周縁の境界に生駒山賣山寺・長尾ノ龍等あり。晴時より南は片理構造を有する花崗岩より成り、その背面即ち分水界より東側には二段の浸蝕面あ

り、信貴山(四三七米)の東方に於ける南北線により分たる、蓋し斷層線ならん。大和川横谷の中央に龜嶺隆起あり。同隆起附近は昭和六年十一月下旬大規模の地震ありたり、その中心部部部に於いては家屋の倒壊、耕地の地裂あり、地裂のため大和川の河床は隆起し、河道は狭くなり水禍を蒙せり、河床の隆起は累計三〇餘米に及び河幅は四〇餘米狹窄され、舊河道は地盤の隆下となれり。この地の地盤はその後も繼續し、その復舊工事は昭和七年末まで繼續せり。地盤の經過は初めて發見せるは昭和六年十一月二十七日にて夫婦塚附近水田に東西に走る二條の龜裂現はれ、次第に擴大して東方市ヶ平・長尾に及びり。その外郭龜裂線の延長は一七〇〇米、面積二六ヘクタールなり。翌年一月末には鐵道は上下兩線不通となり、滑動は二月下旬が最も著しく三月に入り活動減少し、四月を最低とし、五月に入り活動減少し、漸次活動大となり、六月七日を頂點とし漸次減少せり、七月五日には水平移動五〇釐を越えたり。

コンコ—金剛

る面積を占め、老樹蒼蒼と茂り、古き傳統の面影を見る。古書によれば往時は金剛山寺と稱する寺院ありしも現在は廢滅に歸し、代りて葛木神社の社廟立てり。社より西方の高臺を岡見臺と稱す、河内平野又は大阪方面を見晴すよき展望臺なり。山の西方中腹に補正成の據りし名高き千早城あり。登山路は三あり。千早口—西麓千早より千早古城址を経て急坂二時間にして達す。森屋口—北西方大阪鐵道富田林驛下車、蓋屋を経て水分・建水分神社を経て三時間にて至る。北宇智口—大和方面よりの登山道にして、南東方關西線北宇智驛下車、それより小和を経て二時間の登りの後山頂に達す。

す。もと數河内と稱す。村内に昔葉大明神社あり、伯耆文書に建武二年五月名和判官義高、八代庄地頭分數河内村を出雲大社へ寄進せる由見れば、當時神領となりしを以て當社を建てしものならん。いま高植・彌次・數川内の三大字より成り高植に役場を置く。水島に行幸記念碑あり、並行天皇九州御巡幸の際、八代海岸御渡海の跡、絶海の孤島たる水島に水を求められしといふ。今も清水あり。

等を生じ、磁石の如き巨大なる一枚岩、或は斜面となり、或は平面となり、また崩壊碎落せる巨岩多種多様な形状にて溪間に横ばり、岩石光澤強き紫紺色を呈し花崗岩地帯特有なる山容美・粉谷美・岩石美共に備はり、これに配せる長安寺・神溪寺・輪船寺等の大伽藍その他朝鮮古刹の建築美と相俟つて風致に於て朝鮮第一と稱さる。特に外金剛の萬物相は山容美、内金剛の萬物相は溪谷美の標式的の雙璧と稱せらる。觀光の通路に二方面あり、内金剛よりするものは京元線鐵原驛に下車し、電鐵と乗合自動車により本郷里を経て長安寺に到り、この地を中心として元山より長前まで定期船の便により、それより自動車にて温井里に達し、此地を根據地として探勝するを宜しとす。長安寺及温井里には、ともに朝鮮總督府鐵道局經營のホテル設けらる。且つ温井里は温井川より温井嶺に通ずる斷層谷に當り、アルカリ性の温泉湧出し、各旅館の内湯に浴するの便あり。長安寺・表調寺・摩訶衍・檢站寺・松林寺等は伽藍の一部を割きて旅客の一部に充て居るに依り、そこに朝鮮式宿泊を試みるを得。海金剛は立石濱にて、和船を備ふ可とす。内分金剛回遊の日程は、京城を起點として五日乃至十日の日程とせらる。

【内金剛】 内金剛は凌虛峰(一四五六米)、永郎峰(一六〇一米)、昆崙峰(一六三八米)、月出峰(一五八〇米)、日出峰(一五五二米)、内霧在嶺(一二七五米)、遊日峰(一二九九米)、外霧在嶺(一二九七米)、長外谷・放光臺(一〇六二米)、水光臺等を連ねる山稜線によりて圍まれたる區域を稱し、水系は東金剛川と金剛川との二流域に分れ、東金剛川の上流は幾多の峻峰と溪谷とを成つて秀れたる溪谷美をなし、此處彼處に點在する庵寺は更に風致を添へ、更に金剛川の上流は温井嶺の西、新豐里に發して九成洞の溪流美をつく。而して山嶺溪谷を飾る森林は主として闊葉樹にして、モンゴリナラ最もおほく、長安寺附近にはトウヒ・ナラ等の針葉樹叢生して内金剛の深山溪谷美に一層の趣を添ふ。全體の風致より云へば、外金剛が岩石的なるに對し、内金剛は樹木的と云ひ得べく、即ち前者はその色彩碧褐色蘇灰色顯著にして男性的景觀を與ふるに對し、後者は緑色を基調とし、平和的・女性的景觀を呈す。内金剛の主なる名勝地は、長安寺・明鏡臺・靈源庵・水龍洞・望軍臺・鳴瀧潭・表調寺・正陽寺・萬壽八澤・普徳窟・摩訶衍窟・妙吉祥・昆崙峰・月出峰・日出峰等に於て、ほかに新豐里方面に九成洞の溪谷美あり。長安寺はこれ等内金剛探勝の根據地にして、また閑靜なる避暑地として長期滞在にも適す。内金剛の探勝路は、内金剛のみの探勝と内金剛より外金剛へ(又はその遊路)の探勝とに分つことを得。何れにせ

【金剛村】 熊本縣肥後國八代郡の西南海岸。八代平野の南部にして球磨川河口の南岸を占め八代灣に臨む。北方八代町との間に植柳村を隔つ。東は高田村・下松求麻村に接し、南は葦北郡日奈久町に界す。面積一六・二六方科。東南隅に僅かに三〇〇米程の山地あり斷層を以て西方に終る外は一體に球磨川の廣き沖積原開け、北境に球磨川流れ中部に其分流の南川西流し八代灣に注ぐ。この低地は順次に干拓されしにして、極めて平坦なる爲水田よく拓げ八代米を産す。外に麥・南瓜・蠶豆・西瓜等も産す。省嶺鹿兒島本線東南の斷層崖下を南へ走り、その西に之と並行して鹿兒島街道南北に通ず。此地古くは和名抄、八代郡高田郷の内に屬

【内金剛】 内金剛は凌虛峰(一四五六米)、永郎峰(一六〇一米)、昆崙峰(一六三八米)、月出峰(一五八〇米)、日出峰(一五五二米)、内霧在嶺(一二七五米)、遊日峰(一二九九米)、外霧在嶺(一二九七米)、長外谷・放光臺(一〇六二米)、水光臺等を連ねる山稜線によりて圍まれたる區域を稱し、水系は東金剛川と金剛川との二流域に分れ、東金剛川の上流は幾多の峻峰と溪谷とを成つて秀れたる溪谷美をなし、此處彼處に點在する庵寺は更に風致を添へ、更に金剛川の上流は温井嶺の西、新豐里に發して九成洞の溪流美をつく。而して山嶺溪谷を飾る森林は主として闊葉樹にして、モンゴリナラ最もおほく、長安寺附近にはトウヒ・ナラ等の針葉樹叢生して内金剛の深山溪谷美に一層の趣を添ふ。全體の風致より云へば、外金剛が岩石的なるに對し、内金剛は樹木的と云ひ得べく、即ち前者はその色彩碧褐色蘇灰色顯著にして男性的景觀を與ふるに對し、後者は緑色を基調とし、平和的・女性的景觀を呈す。内金剛の主なる名勝地は、長安寺・明鏡臺・靈源庵・水龍洞・望軍臺・鳴瀧潭・表調寺・正陽寺・萬壽八澤・普徳窟・摩訶衍窟・妙吉祥・昆崙峰・月出峰・日出峰等に於て、ほかに新豐里方面に九成洞の溪谷美あり。長安寺はこれ等内金剛探勝の根據地にして、また閑靜なる避暑地として長期滞在にも適す。内金剛の探勝路は、内金剛のみの探勝と内金剛より外金剛へ(又はその遊路)の探勝とに分つことを得。何れにせ

も觀光者は京元線原野に下車し、金剛山電鐵に乗換へ終點内金剛に至り、それより約二軒をバスにて長安寺に達す。内金剛のみの探勝を目的とするには長安寺を出で長安寺に詣り、溪流を渉り黄泉江溪流に沿うて望軍臺に至る往復約一〇軒のコースを第一とし、途中より望軍臺・白馬峰に行く路を分岐す。この方面には明鏡臺・水鏡洞・百塔洞・望軍臺・望軍臺等の勝地あり。第二コースは摩訶衍往復にして、内金剛より外金剛へ行く。昆崙峰の途中、妙吉祥附近より引返す往復約一〇軒のコースとし、途中には鳴洞潭・三佛岩・表洞寺・正陽寺・萬壽八潭・普徳宮・摩訶衍・妙吉祥等の名所あり。なほ摩訶衍より岐路に入れば白雲臺・須彌臺・船庵・内圓通庵等の古刹あり。次に内金剛より外金剛へかけての探勝には普通、昆崙峰越(一に久米越)・温井嶺越・内霧在嶺越の三コースによる。昆崙峰越はトは長安寺より萬壽洞・摩訶衍を経て、内霧在嶺越道路の途中、四仙橋の手前雑木林中の一茶店より左折し、昆崙峰頂に至る約一〇軒の路と、更に此處より外金剛の九龍洞に下り温井里に至る約一六軒のルートにして、内外金剛の眞髓ともいふべき景勝の地を通過し、内外を繋ぐ最捷徑路たり。先年数久米博士金剛山電鐵社長時代社費を投じて補修開拓せるものにして、一名久米越と稱す。このルートは二日行程を普通とするも健脚者は一日にし

ても充分に踏破し得。次に昆崙峰より彩霞峰越のルートは昆崙峰頂より將軍城に降り月出峰・日出峰の分岐點より彩霞峰に登り屋根を登走して鉢淵沼に至り温井里に出づる約二三軒の新探勝路にして、將軍城・彩霞峰等より外金剛の諸峰を眼下に俯瞰し、遠く日本海の紺碧を望む豪壯なる眺望は全く一幅の繪にして、昆崙峰久米山莊(山頂を下る一軒)に滞在し、彩霞峰下の山小屋までを往復するは一日の探勝に恰好ならん。更に昆崙峰頂上より將軍城にて前記彩霞峰越の道と分れ、日出峰・日出峰の兩頂を極めて、内霧在嶺の頂上に出づる約六軒のコースあり。此處より西すれば山内第一の互利橋站寺を経て開鏡臺を下り、百川橋里より自動車により温井里に出づる内霧在嶺越の行路なり。また昆崙峰より九龍洞への探勝路は、昆崙峰より約二軒、外金剛の方に下り、龍馬石・新羅太子墓の附近にて九龍洞の溪谷を道と分れ、左の方に下れば九龍洞の溪谷を見て蓬田に出づるものにして、溪谷は他に比して幾分小規模なれど、大小多数の瀑布・深淵・碧潭等凡そ九軒の間に續き、頗る麗れる溪流美を有す。次に温井嶺越によるコースを取るとすれば、内金剛より電車にて次郎の末輝里に下車し、此處より定期乗合自動車により約二三軒(所要時間一時間)にて温井嶺口に達す。これより徒歩約二軒、温井嶺を越え下れば舊萬物相の入口なる

萬物相に著く。新・萬物相の絶景は萬物相より背後の溪谷を一軒餘登りて達せらる。萬物相より更に約二軒半、寒霞溪の秀麗なる谷間を徒歩にて下れば六花岩に至る。此處は外金剛行乗合自動車の發着地點にして、温井里まで約六軒の垣々たる道路は寒霞溪の絶景を賞み、觀音連峰の秀嶺を右手に眺める好箇のドライブコースなり。最後のコースは内霧在嶺越にして、前記昆崙峰越ルートの四仙橋より尙ほ約二軒半を東に進めば内霧在嶺頂上に達す。此處にて日出・日出峰を経て昆崙峰へ行く途と分れ、約九軒下れば橋站寺に至る。途中には十二潭を俯瞰する絶景望仙臺及び九龍洞・萬景洞等の勝地あり。橋站寺より外金剛へは開鏡臺の險を險えて(此間徒歩約九軒)百川橋里に下り、新金剛松林寺を探勝の後、再び百川橋里に引返し、此處より乗合自動車により海金剛又は温井里に行く。本經路は橋站寺に一泊し、二日行程となすを普通とし、なほ一日を省て彌勒峰をも探勝し得べし。

【外金剛】 外金剛は昆崙峰(一六三八米)より北に走り、上登峰(二二七米)・五峰山(二二六四米)を連れ、五峰山より東に轉じて勢至峰・文殊峰(九〇六米)・千佛山(六五四米)を連ぬる嶺、及び昆崙峰より日出峰(一五八〇米)・彩霞峰(一五八八米)のなす山稜線に圍まれたる區域にして、觀音連峰・世尊峰(一一三二米)・集仙峰(一三五一米)等の秀峰屹立し、その間を温井川・神漢川等の本支流が流れ、急瀨・飛瀑の壯觀を現はし、玉女峰頂の新萬物相、勢至峰頂の萬物相と相俟つて、外金剛の代表的風景をなす。即ち内金剛の女性的山水美にひきかへ、外金剛は男性的、豪壯雄大な山岳美と溪谷美となせり。外金剛の森林の大部分はテウセンマツと潤葉樹、アカマツと潤葉樹との混生林にして、前者は九龍洞・世尊峰・集仙峰並に新・舊・萬物相一帯に互り、後者は觀音連峰・文殊峰・水品峰・千佛山一帯に互り廣く分布す。外金剛探勝の根據地は温井里にして、此處には温泉湧出し、旅館の施設もた完備す。外金剛の主なる諸勝は、九龍洞・玉流洞・神漢寺・寒霞溪・新舊萬物相・將軍城・彩霞峰・鉢淵沼等とす。外金剛へ至るには京城より汽車により京元線安邊驛にて乗換へ、山麓の東海北線外金剛驛に行く。外金剛驛より温井里までは徒歩四十分の距離にあり、各列車に接続して乗合バスを運轉す。探勝路は萬物相往復と九龍洞往復とに分つ。探勝路は萬物相復は金剛山の山岳美の代表とも稱せらるる舊・新・萬物相を探勝し往復するものにして、温井里より寒霞溪の溪谷を過る。即ち温井里より六花岩まで寒霞溪の溪谷に沿うてつくられたる約六軒の平坦なる道路は乗合自動車を通じ、其處より徒歩二軒餘にして舊萬物相に達す。新・萬物

物相は此處よりなほ約一軒登りたる處にして、天仙臺上附近の雄大な山岳を新萬物相と稱し、舊萬物相へはなほ約半軒を登らざるべからず。本探勝路は徒歩往復約七軒、自動車往復路約一二軒にして一日行程として適當なり。次に九龍洞往復路は、温井里より昆崙峰越の途中、九龍洞まで行き、其處より折返すものにして、温井里より極樂峯の時を越えて神漢寺に詣り、玉流洞溪谷を進行して九龍洞に至る約六軒の徒歩探勝路なり。途中には神漢寺・一應臺・仰止臺・玉流洞・連珠潭・飛鳳潭・上八潭等の名勝を有し、山中第一の雄壯なる溪谷美をなす。更に外金剛より内金剛への探勝路(前述)のうち昆崙峰越(久米越)・温井嶺越・内霧在嶺越の各コースを進行すべし。而して昆崙峰越は外金剛よりすれば登路長く、内より外への路が幾分樂にして、温井嶺越は例れよりするも殆ど相同じく、また内霧在嶺越は開鏡臺の相當急峻なる坂を登るを要する故、内金剛の方より外の方へ探勝するを順路とす。右の外昆崙峰より彩霞峰越のコースあり、然し温井里・鉢淵沼間八軒、鉢淵沼・昆崙峰間約一五軒、全行程約二三軒の長途なると殆ど上り路なるとにより、餘程健脚の人にあらずれば困難なり。

彌勒峰附近の彌勒谷と、百川橋里より溪流に沿うて廻る開鏡洞溪谷一帯を稱し、主なる名勝としては彌勒峰・隱仙谷・七寶臺・萬景洞・十二潭・松林寺・橋站寺あり。開鏡洞溪谷は他の溪谷に比し交通不便のためなほ未踏の地多く、溪谷美として探勝の價値少しとせず。區域内の森林は針葉混生林を主とし、針葉樹はマウヒ・テウセンマツ・テウセンマツ、潤葉樹はナラ類・シデ類・カンバ類多し。新金剛探勝の中心地は橋站寺にして、附近には針葉樹の森林多く、夏季は氣温低く、避暑に絶好の地なり。探勝路は東方百川橋里よりするものと、西方内金剛より内霧在嶺越によりするものとあり。前者は温井里より自動車にて百川橋里に至り(一時間二十分)、それより徒歩四軒にて開鏡臺(七七九米)に登り、鞍馬嶺・歡喜峯(六五〇米)を経て橋站寺に達す。開鏡臺より寺まで約五軒。または百川橋里より松林谷を西に入ること約六軒にして松林寺に至り、これより南方成佛嶺を越えて橋站寺に達す。内霧在嶺越は内金剛の妙吉祥より溪を渡り、昆崙峰越の岐路を右にとり、四仙橋を渡りて一筋の細路を直直に行けば、溪石の奇をなす白華潭あり。此處より盆々内霧在嶺越にかかり、道は楓・樺の類を多く混へたる銀木林の樹梢上下左右より迫り、蒼なほ晴く、五月中にもなほ溪間の處々には残雪を見、九月には既に紅葉の溪水に映ず

るを見る。頂上は將軍臺・萬陣臺の鞍部にして、これを分水嶺とし東に落つる水は日本海に、西に落つるは漢江の源となる。摩訶衍より内霧在嶺越まで約四軒。此處より橋站寺まで約七軒の下り道は殆ど細路にして、途中、隱仙臺・七寶臺・船潭等の景勝を見て、金剛山第一の互利橋站寺に到着す。

【海金剛】 太白山脈の一脈東海岸に迫り海溝中にその岩頂を露はし千象萬態の奇景を呈す。高城邑の本茂里・立石里・燈臺里・浦外津里等十軒餘の距離に跨り近く海洋中に島嶼聳布す。松島・佛岩(船頭岩)・大崎・船岩・鶴島・海萬物相等の奇勝あり、特に水源端附近の險峻きの部分勝る。金剛山中他の外金剛・内金剛に比し規模小なるも海陸兩方面に跨るを以て知らる。松島は立石里前方の海中にあり附近に散布する小島多し。島中に老松孤立せるを以て名あり。佛岩(船頭岩)は松島附近の岩石にして孤立する岩狀、佛像又は船頭に似るを以てこの名あり。大崎は燈臺里南方の赤壁江河口にあり。古昔燈臺地を置きし所に直徑約五米の石塚の周に土壘あり。船岩は燈臺岩の前方海中にあり。岩狀船に似るを以てこの名あり。古昔五十三佛印度より渡來の際の佛船にて船夫の錯誤により覆船したるものといふ。海萬物相は立石里より水源端に至る間の奇勝、奇岩怪石林立し千變萬化左顧右盼萬物の相像を現す。

【金剛山電鐵】 私設鐵道。朝鮮の中央部江原道にあり。鐵原郡鐵原邑にある京元線の鐵原驛より起り東方の平康・金化各郡を経て淮陽に入り金剛山の西麓にある長揚面の内金剛驛に通ず。全長一一六・六軒、軌間一・四三五米、總府鐵道と連帶運轉。

【金剛山】 金剛堂 咸興。富山縣境近く富山縣寄りに峙つ。富山縣歸農郡大長谷村と東瀨波郡利賀村との境界に峙ち、標高一六三八米。全山片麻岩より成る。東斜面より室牧川、西斜面より百瀬川發源し、共に北流し南方斜面より利賀川流出して南西流す。

【金剛童子山】 金剛童子 咸興。東嶺武庫郡山田村に峙つ。標高五六六米。東斜面を黒甲越の山路南北に通ず。山中より美しき小石を産す。登山路北方の有馬と南方の神戶を結ぶ神有電車谷上驛より通じ、約一時間餘にして山頂に達す。

【建治山】 建治山 四國山脈の一峯。徳島市の南西約一二軒、徳島縣名西郡入田村・鬼徳野村・阿野村の三村境界上に跨りて峙つ。この山は往古の建治寺

の舊址として知られ、いま山頂に石洞あり。山中頗る幽邃にして瀑布懸る。北麓に建治川北東流す。

コンスイヘー 淡水坪 みづのへら 滝山(高雄州岡山郡燕巢庄)

コンゼ 金勝村 滋賀縣近江國栗太郡の東部。北は栗山村、西は治田村・志津村、南は上田上村に接し、東は甲賀郡の石部町と雲井村に接す。村の南東の大部は甲賀高原の山地にて古生層と之を貫く花崗岩より成り、中に阿星山(六九三米)、金勝山(五六六米)・龍王山(五八五米)・烏冠山(四九一米)等あり。北・西部は二〇〇米以下の丘陵地となり、其間を草津川上流・金勝川の本支流が流れて島々に盆地を形成し、粟穂産地す。産業は農林業を主とし木材・石材を産す。鐵道の幹線として草津より美濃郡・雨丸・上田・御園・中村・比叡・藤原・東坂を経て石部に至るものあり、鐵道の驛は石部・手原・草津より下車し本村内に入るを便す。本村は古の金勝荘・砥山荘の地にて世々延暦寺領たり。金勝寺・稻敷寺・觀音寺・阿彌陀寺等起原古き寺院跡からす、比叡山と共に近江の聖地として重きをなし、古來、高僧が來集し天下の信徒を集中せり。(大野神社) 大字芝敷に鎮座。總社。祭神、菅原道真。天徳三年の勸請に係る。聖武天皇の勸願所なる金勝寺の領寺なり。神階五位上。古來、稻敷明神また稻敷於野宮神と稱され、佐々木奉納入道・

足利義隆・青地伊豫守茂高等の武門の崇敬厚し。寛政十年領主渡邊氏は藩費を以て樓門を修理す。明治九年村社に列し、のち郡社に昇る。建造物中、樓門は三間一戸、屋根入母屋造、檜皮葺にて國寶に指定せらる。棟札に寛政十年棟入君の銘あり、現在のものは鎌倉時代の遺構と考へられ、墓殿などに見るべきものあり。例祭、五月一日。(春日神社) 大字芝敷に鎮座。無格社。祭神、武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣神。聖武天皇の勸願所なる金勝寺別院稻敷寺の守護神なるも、その勸請年代を詳かにせず。社殿は本殿・拜殿・四脚門・鳥居・倉庫・社務所・神饌所等にして、四脚門は鎌倉時代の遺構にかり、屋根切妻造、檜皮葺。明治三十七年國寶建造物に指定せらる。例祭、五月一日。(阿彌陀寺) 大字東坂にあり。淨土宗。金勝山と號す。蒲生郡安土村淨土院末たり。初め應永十三年淨土院末の地に草庵を結び天台の法を修す。三世宗匠に至り現宗に改む。元和年間宮城丹波守盛盛堂宇を改修す。明治四十二年、更に本堂を再建して現在に及ぶ。(金勝寺) 金勝山にあり。天台宗。俗稱觀音寺、奈良朝天平五年聖武天皇の勸願により良辨僧正の開基と傳ふ。良辨は金唐菩薩と稱せられし爲初め金勝寺と號せしが、のち興福寺の傳燈大法師此山に來りて修禪修行し次で弘仁六年大伽藍を建立し國家の平安を祈願す。仁明天皇の御

宇天長十年金勝の勸願を賜り官寺に列し之より金勝寺と稱す。本堂は釋迦如來像にして別に稻敷寺より移したる稻敷觀音像あり。本寺所藏の虚空藏菩薩半伽藍は木造高さ四尺餘身彩色、其様式手法より見て奈良朝時代の作と見られ、平安朝初期の作たる木造思沙門天立像と共に國寶に指定せらる。寺の南西方國見岩の下に當る稻敷寺の舊址と稱する處に、自然石に彫刻せる摩崖佛大小十二軀を存す。之と共に鎌倉時代の寶塔・寶篋印塔・石造の水漕等散在す。石佛は平安朝中期を下らざるものとして内務省史蹟保存に指定さる。(金勝寺) 大字芝敷にあり。淨土宗。當村阿彌陀寺末たり。天智天皇御宇勸願に依り開創する所といふ。義西の中興にして、貞元中隆秀更に之を重興すとす。其後漸次衰廢せしも明治四十三年堂宇大改修を行ひ、以て現在に及ぶ。本寺木造阿彌陀如來及び兩脇侍像三軀は奇木造、漆塗、様式よく藝が雲蓋座を具備し、中尊の胎内に永治二年五月建立の銘あり。現に國寶たり。(正徳寺) 東坂にあり。本寺木造阿彌陀如來坐像一軀は玉眼嵌入、室町時代の作に係り現に國寶たり。(山日寺) 天台宗。本寺地蔵菩薩坐像一軀は木像にて高さ二尺七寸八分、光背の周圍に十三を附屬せしめ多しき様式に屬し、藤原時代末期の精巧なる作にして現に國寶たり。(善勝寺) 大字御園にあり。淨土宗。貞元二年僧勝光の開創に係

り、初め天台宗を奉ぜしが、寶永年中僧等願之を中興して現宗に改め以て今日に至る。本堂は鎌倉時代の本形にして像身の破損甚し。(敬恩寺) 大字芝敷にあり。淨土宗。同村阿彌陀寺末たり。草創年次等不詳。大永年間眞言宗阿の再興に係る。本寺木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶にて室町初期の作たり。(正徳寺) 大字芝敷にあり。淨土宗。當村阿彌陀寺末たり。寺傳に淨土宗隆興の開基にして、正徳年中圓達これを再興すとす。本堂安置の木造阿彌陀如來立像一軀は國寶にして、玉眼嵌入光背雲綺透彩後光にて、室町初期の作とす。(山日寺) 大字芝敷にあり。天台宗。村内全勝寺末たり。草創年次治革共に詳ならず。寺寶中木造地藏菩薩坐像一軀は國寶たり。其高さ二尺七寸八分、光背の周圍に十一體の十王を附し、總體の破損甚だしと雖も刀法優細にしてよく藤原末期の特徵を示す。

コンゼー 金精峠 かねしほ 栃木縣上野郡日光町と群馬縣利根郡片品村との境界にある峠。最高點二〇二四米。北麓は温泉岳(二二三三米)に、南麓は金精山(二四二二米)を経て、日光白根山(二五七八米)に連る。峠より東方に降れば湯元温泉。戰場ヶ原を経て中野寺湖畔に出て、西方に降れば菅沼・丸沼・大沼尻方面に至る。峠上に金精標現を記する祠あり。今この峠は日光方面より戰場ヶ原を過ぎ、丸沼・菅沼方面への奥日光探勝のハイキング

ア・コースに當る爲、東京方面よりのハイカーから下す。

コンゼツ 長絶岬 朝鮮慶尙南道にある岬。平坦なる沙灘角にして其附近に岩礁多く崩岸約一・八軒以内の處に磯干岩等の暗岩散在し頗る危険なり。古洞末より長絶岬までの海岸は火浦・雲岩浦・羅士浦等の小灣の外は岩礁多き岩岸にして該三小灣は僅に小舟の假泊地たるに過ぎず。本岬に長絶岬燈臺(大正九年設置)あり。燈臺は連四白光、光達距離一二海里。

コンゾー 金藏寺 かねぞう 省轄土佐縣の一郡(明治二十九年設置)。香川縣仲多度郡香通寺町にあり。

コンタ 今田村 兵庫縣攝津國多紀郡の西南端。北は水上郡上久下村に、東は味岡村・古市村に、南は有馬郡東村に、西は多可郡比延庄村及び加東郡鴨川村に夫々隣接す。丹波高原の西南部に屬し、山地は主として流紋岩・石英斑岩よりなる。北部には白髮嶽(一七二一米)、東嶽には虚空藏山(五九六米)、西部に西光寺山(七二二米)あり、黒石川と西斗谷川は南流し、兩川の間に和田寺山(五八〇米)を挟む。兩川の谷間に水田あるのみ。東北に接する古市村には福知山線通じ交通の便よし。本村は和名抄の賀茂郡夷浮郷の地の如く思はるるも不詳。今田は往昔小野原庄と稱せし地にて、平家物語に源義経は小野原より三草山に進軍すとあり。盛衰記には水上郡とも記せり。また

立杭家の古岡古丹波杭本村大字小野原に於て永祿より寛永にかけて作りしものと傳へらる。(古丹波) 立杭家の古岡。初め多紀郡小野原に於て永祿・天正・寛永頃に焼きしものと傳へ名工吉藏を作者となすも、茶器は寛永時代のものと思はれ寛文頃に至り南隣の立杭に移れり。以前藤山嶽と稱せしもの文化文政頃の古式にて實はその立杭焼なりと云ふ。一種古式の窯あり主として赤土に黒釉の堅筒焼を出す。古丹波の茶器は世に聞ゆるも、のち立杭焼の徳利と通稱さる。

コンタ 譽田 よきた 古市町(大阪府南河内郡)内

コンタクラ 權太倉山 福島縣岩瀬郡大塚村と牧本村との境界に峙つ。標高九七六米。全山第三紀層より成り、西方は直に風板峠(八三八米)に連り、北麓を廣戸川東流して阿武隈川に注ぐ。限戸川南西斜面より發源し、南東流して限戸川に合す。山中に聖岩等の奇勝あり、名勝地として知らる。

コンタワラ 權太原 ごんたわら 東京市赤坂區の地名。もと權太左衛門國行なる人が住みしによる故の稱といふ。いま權太原に作る。園花萬葉記・下「權太原。古へ權太左衛門國行と云人住跡也」

コンドー 近藤岬 こんどう 樺太の樺南西端登呂岬の別稱。名稱は樺太開拓の第一人者近藤重藏に因るもの。東方遙かに中知床岬(重藏岬)に相對して亞庭灣を

抱く。

コンバル 金春 東京市京橋區新橋附近の藝妓街。水應二年の江戸圓に出雲町西裏に金春七郎、弓町南に觀世七郎とあるは共に能役者に賜はりし邸にして附近に山東京傳・京山・喜多賀吉・岸本由豆流・平田萬丸・津森等の文藝の士住みり。新橋附近の待合は江戸時代には休みの茶屋「しがらき」・藤原「新橋の南」・玉の井「の三軒なりしが安政の頃より藝者屋が多く出来るに至りしと。

コンビラ 金比羅 こんびら 房總半島の南部に位し、千葉縣安房郡龍田村と國府村との境界にあり。山中に金比羅祠を祀る故に此山名出づ。西麓は西南流する平久里川に限らる。山頂より西南方に館山灣を下瞰す。

コンビラマエ 金比羅前 こんびらまえ 徳島省繪鞆支線の一驛(大正五年設置)。徳島縣板野郡撫養町にあり。

コンブ 昆布 こんぶ 北海道、蝦夷富士(後方半島)とも云ひ、標高一八九三米)の南西方約一八軒に當る一峯。北側は後志支線虹田郡狩太村、南側は膽振支線虹田郡豊浦村に屬す。北麓は東流して日本海に注ぐ

り、初め天台宗を奉ぜしが、寶永年中僧等願之を中興して現宗に改め以て今日に至る。本堂は鎌倉時代の本形にして像身の破損甚し。(敬恩寺) 大字芝敷にあり。淨土宗。同村阿彌陀寺末たり。草創年次等不詳。大永年間眞言宗阿の再興に係る。本寺木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶にて室町初期の作たり。(正徳寺) 大字芝敷にあり。淨土宗。當村阿彌陀寺末たり。寺傳に淨土宗隆興の開基にして、正徳年中圓達これを再興すとす。本堂安置の木造阿彌陀如來立像一軀は國寶にして、玉眼嵌入光背雲綺透彩後光にて、室町初期の作とす。(山日寺) 大字芝敷にあり。天台宗。村内全勝寺末たり。草創年次治革共に詳ならず。寺寶中木造地藏菩薩坐像一軀は國寶たり。其高さ二尺七寸八分、光背の周圍に十一體の十王を附し、總體の破損甚だしと雖も刀法優細にしてよく藤原末期の特徵を示す。

尾別川に限られ、川の北方にニセコアンヌプリ(二〇九米)對峙す。

コンブモリ 昆布森村 北海道釧路國支庁管内の二級村。釧路郡の東南部に位し、西は釧路市、西北は釧路村に接し、東北は厚岸郡厚岸町に界し、南は太平洋に面す。面積一〇二平方軒餘。釧路平野中の海蝕臺地の西南部を占め概ね平坦にして林野廣く、東部は半島状をなしその尖端尾別岬は太平洋に突出し厚岸灣の南角をなす。半島頭部の北面即ち厚岸灣の西南岸は大字仙鳳趾村なり。南岸には小出入多きも概ね海崖をなし泊地を缺く。鱈・鮭・昆布等の海産を主とし、別保炭山ありて石炭を出し、その外に農・林・工業あり。道路は西部の中央と海岸に通ずるも交通なほ便利ならず。大正八年昆布森村・勝水質村・仙鳳趾村を合併して二級村制を布く。

コンブ 長文面 朝鮮全羅南道求禮郡の東南部。北は鏡津江を以て求禮面。馬山面・上旨面に夫々隣接し、西は順天郡に、南は光陽郡に接し、東は慶尙南道河東郡に接す。東南境に白雲山(一一一八米)峙ち、その西麓南境に沿ひて西走し夫等の山脚は何れも北方に傾斜し鏡津江に迫る。従つて耕地少く産葉見るべきものなし。等外道路、一は東境を南北に走

り、初め天台宗を奉ぜしが、寶永年中僧等願之を中興して現宗に改め以て今日に至る。本堂は鎌倉時代の本形にして像身の破損甚し。(敬恩寺) 大字芝敷にあり。淨土宗。同村阿彌陀寺末たり。草創年次等不詳。大永年間眞言宗阿の再興に係る。本寺木造阿彌陀如來坐像一軀は國寶にて室町初期の作たり。(正徳寺) 大字芝敷にあり。淨土宗。當村阿彌陀寺末たり。寺傳に淨土宗隆興の開基にして、正徳年中圓達これを再興すとす。本堂安置の木造阿彌陀如來立像一軀は國寶にして、玉眼嵌入光背雲綺透彩後光にて、室町初期の作とす。(山日寺) 大字芝敷にあり。天台宗。村内全勝寺末たり。草創年次治革共に詳ならず。寺寶中木造地藏菩薩坐像一軀は國寶たり。其高さ二尺七寸八分、光背の周圍に十一體の十王を附し、總體の破損甚だしと雖も刀法優細にしてよく藤原末期の特徵を示す。

IRIR

コソメ——コソヨ

り、一は中部を南北に走るのみにて交通未だ便ならず。

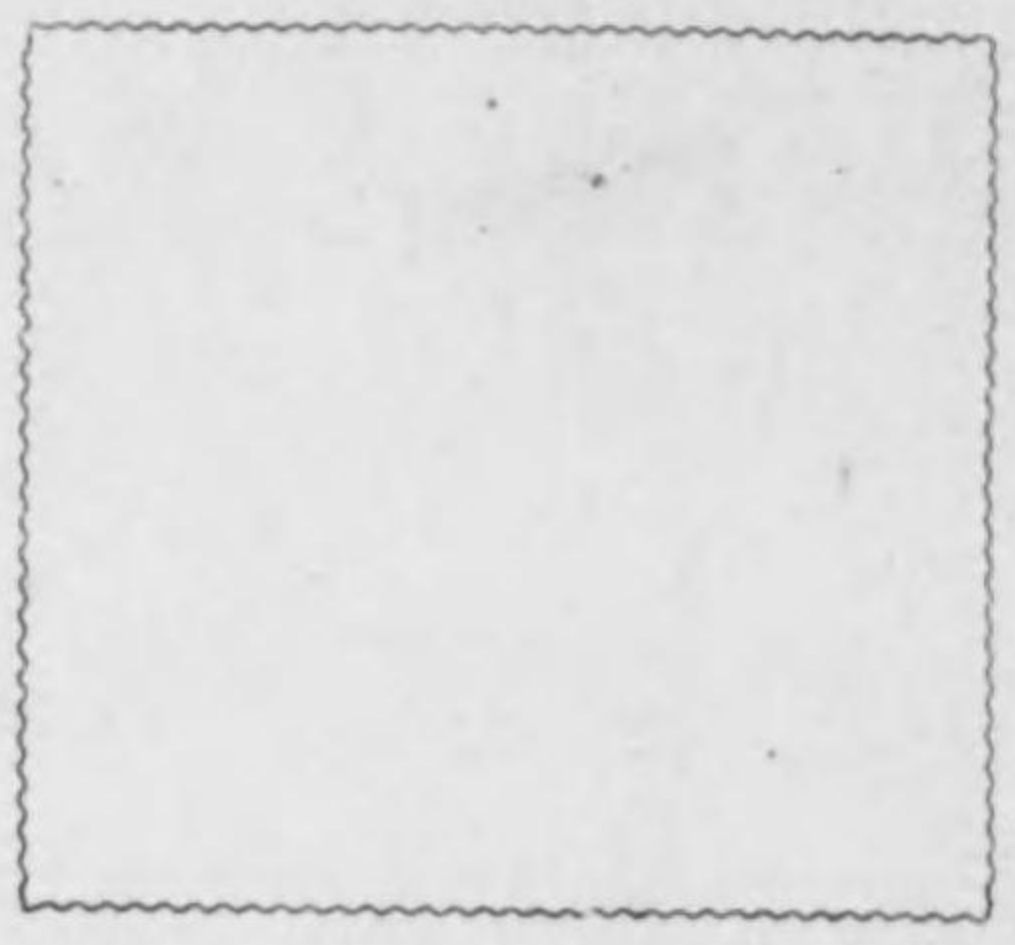
コソメ **昆明面** めいん 朝鮮慶尙南道泗川郡の西北部。東は昆陽面に、南は西浦面に夫々隣接し、北は晋州郡に、西は河東郡に接す。地一般に高きも傾斜緩かなるため耕地よく拓け、且つ南江の小支流北流を東流して灌溉に便す。主生業は農にして米・麥・豆類・大麻・棉等を生産し、また桑園拓けて養蠶業行はる。二等道路西方河東郡より来り面の中部を過ぎて東北に走り晋州郡に入り、三等道路はこれと交叉して南北に通ず。

コソヨ **昆陽** こんやう

【昆陽江】 朝鮮平安南道にある大同江の支流の一。中和郡の中部、舞臺山(二四〇米)の北麓に發源して西北流し、大同郡との境上を曲折東流し大同郡南串面と中和郡揚井面との境にて大同江に合す。流程約三八軒。

【昆陽面】 朝鮮慶尙南道泗川郡の西部。東北は梧洞面に、西は昆明面に、西南は西浦面に夫々隣接し、東南より南にかけては海に面す。西北は百米程度の丘陵地あるも東南一帯は地低平にして肥沃、耕地よく拓く。生業は農・水産兩業にして米・麥・豆類・大麻・棉等の産多し。交通は三等道路西方河東郡より来りて郡邑泗川面に通ずるのみにて未だ便ならず。

製複許不



典辭大名地本日
卷三第

昭和十三年四月二十日印
昭和十三年四月二十四日初版第一刷發行

【定價十二圓】

編輯者 澤田久雄
發行所 日本書房
發賣元 株式會社 凡社
印刷者 君島源
共同印刷株式會社
王子製紙株式會社
村田文泉閣

R291.033

N77

(3)

終